日本建築協会 発行

復刻版

建築と社会

第78巻

第26集第１号～第26集第７号（昭和18年１月～７月）

不二出版

復刻にあたって

一、原本の誌名は次のように変遷している。
　『関西建築協会雑誌』（大正６年９月～７年12月）
　『日本建築協会雑誌』（大正８年１月～８年12月）
　『建築と社会』（大正９年１月以降）

一、表紙を若干縮小して収録した場合がある。また、原本が断裁されているため、不完全なものがある。

一、断裁による不完全な文字は組み直したものがある。

一、表紙の刷色は一色に統一したため原本とは異なる。

一、口絵はカラーの頁も全て黒一色で印刷した。

一、「会報」の通頁には乱れがあるが、原本のままとした。

一、各集ごとの「総目録」は、発見できたものに限り、該当集の第一号の前に収録した。

一、裏表紙は、『第一集第一号』に限り収録した。

一、目次の発行日は、奥付に記されたものを採用した。

一、前付広告の一部及び後付広告は収録しなかった。「広告見出」「広告目次」および「掲載広告一覧」（復刻に際し新たに組み、付け加えた）を参照して頂きたい。
　また、広告頁には独自の頁が付けられているため、本復刻版の広告頁の頁は一貫していない。

一、本復刻版は日本建築協会所蔵の原本を使用した。

（不二出版）

【第78巻目次】

第26集第１号　昭和18(1943)年１月１日発行
第26集第２号　昭和18(1943)年２月１日発行
第26集第３号　昭和18(1943)年３月15日発行
第26集第４号　昭和18(1943)年４月15日発行
第26集第５号　昭和18(1943)年５月20日発行
第26集第６号　昭和18(1943)年６月20日発行
第26集第７号　昭和18(1943)年７月15日発行

大正6年9月14日　第3種郵便物認可・昭和17年12月25日印刷納本・昭和18年1月1日發行（毎月1回1日發行）

建築と社會

第26輯　第1號
昭和18年1月1日

社團法人 日本建築協會

専賣特許

ロータス

セメント防水剤



ロータス防水工法責任施行

関城化學工業株式會社大阪營業所

大阪市西區京町堀一丁目　(電)土佐堀(44)825 3825

東京營業所　東京市渋谷区金王町五　(電)青山 3810

広島営業所　広島市鉄砲町一八　(電)中(2)1344

満州国總代理店　株式会社 大信洋行建材部

株式會社 竹中工務店

株式會社 滿洲竹中工務店

本店　大阪市北區中之島朝日ビル
電話北濱一九一番

新京特別市順天區吉林大路三四號
電話(二)四三四二番

營業所　東京、横濱、名古屋、京都、神戸、福岡、京城、新京、吉林、奉天、安東、大連、北京、天津、濟南、青島、上海、南京、漢口

株式會社 大林組

大阪市東區京橋三丁目七五
電話東(94)八六〇(6)五四〇四(6)

支店　東京、名古屋、福岡、京城、北京

營業所　廣島、仙臺、札幌、臺北、天津、青島、張家口、上海

工作所　大阪、東京

自錄 OHNO SHUTTER PATENTED 商標

日英米特許及實用新案登錄百數十件所有

大野式防火捲上ケ戸

〔特許大野式シヤッター〕

主要製品

大野式シヤッター
大野式ルーブルシヤッター
大野式融金付自動開鎖戸
大野式工場用軸承
大野式轉子入軸筐・戸車
各種防火扉・鋼製建具類
應用特殊機械類設計製作

株式會社 大野製作所

本社　東京市芝区三田四國町二番地
三田工場　電話三田(45)3737・3738・3789

坂橋工場　東京市坂橋区志村町一五九二番地　電話赤羽2768・3272

大阪詰所　大阪市此花区上福島中二丁目六十番地　電話福島(45)588

建築と社會

第26輯　第1號　　昭和18年1月發行

一月號

目　次

建築新体制成らんとす……片岡　安…(1)
年頭所感……竹腰健造…(2)
土建業者の將來……渡部圭吾…(3)
溫古知新……池田宮彥…(4)
建築界の展望……本野精吾…(6)
生產擴充と建築……玉置豊次郎…(8)
戰時下雜感……新名種夫…(10)
時局下世人の住宅觀……吉田信武…(12)
住宅問題の研究……矢田鐵藏…(16)
工場建設計畫と防空の諸問題……新海悟郎…(24)
時局下の建築を語る會……(33)
建築新體制要綱……建築聯合協議委員會…(56)
藤江住宅・初芝住宅……住宅營團大阪支所建設部…(71)
☆紫煙室☆
生活の建築的雜感……辰巳孝雄…(73)
食堂先生と上棟式……津田鑿…(74)
やばさみ……山口正…(76)
☆寫眞欄☆
住宅營團・勞務者住宅……
會報……(79)

三星印

三星印岩綿製品

防音・保温・耐火裝置

三星岩綿(バザール)ブロック構成の防音裝置は爆音に耐へる吸音率を有す

設計　大阪市北区中之島五ノ三〇　大阪田島應用化工株式會社　電話土佐堀(44)1323.5682.6221.7294

施工　東京市神田區岩本町三番地　三星産業株式會社　電話浪花㊀0072番

會告

本協會定款第十七條及第十八條に依り監事二名、評議員半數改選に付昭和十七年十一月二十八日開會の通常總會に於て選擧執行致しました。其結果下記の通りであります。

監事

當選	686票	池田宮彦氏		同	686票	鈴木一幸氏	
次點	2票	生駒忠彦氏		（以下略）			

評議員

當選	79票	林良信氏	同	79票	堀内四知丸氏	同	76票	伊東正也氏
同	76票	藪中一良氏	同	75票	井上一雄氏	同	75票	大下順三郎氏
同	75票	長尾清一氏	同	74票	生駒忠彦氏	同	74票	篠原清孝氏
同	74票	瀧澤眞弓氏	同	74票	棚橋諒氏	同	73票	秋山圭氏
同	73票	岩尾保衞氏	同	73票	川勝健二氏	同	73票	楠瀨澈氏
同	73票	小林清氏	同	73票	中野順次郎氏	同	73票	堀井啓治氏
同	73票	增井敏克氏	同	73票	三浦茂氏	同	73票	水原旭氏
同	73票	山口正氏	同	72票	石原達偉氏	同	72票	岩佐信也氏
同	72票	岡田達彌氏	同	72票	笹岡美代吉氏	同	72票	竹内佐平治氏
同	72票	野中駒市氏	同	72票	藤阪拾治郎氏	同	72票	矢田鐵藏氏
次點	4票	石井春雄氏	（以下略）					

本協會定款第十七條、第十八條及第二十條に依り昭和十七年十二月三日開會の評議員會に於て理事、會長、副會長、常務の選擧を執行致しました結果下記の通りであります

（當日常務の職務分掌を頭書の通り互選）

理事

理事會長	片岡安氏	
理事副會長	竹腰健造氏	
理事副會長	松本儀八氏	

常務

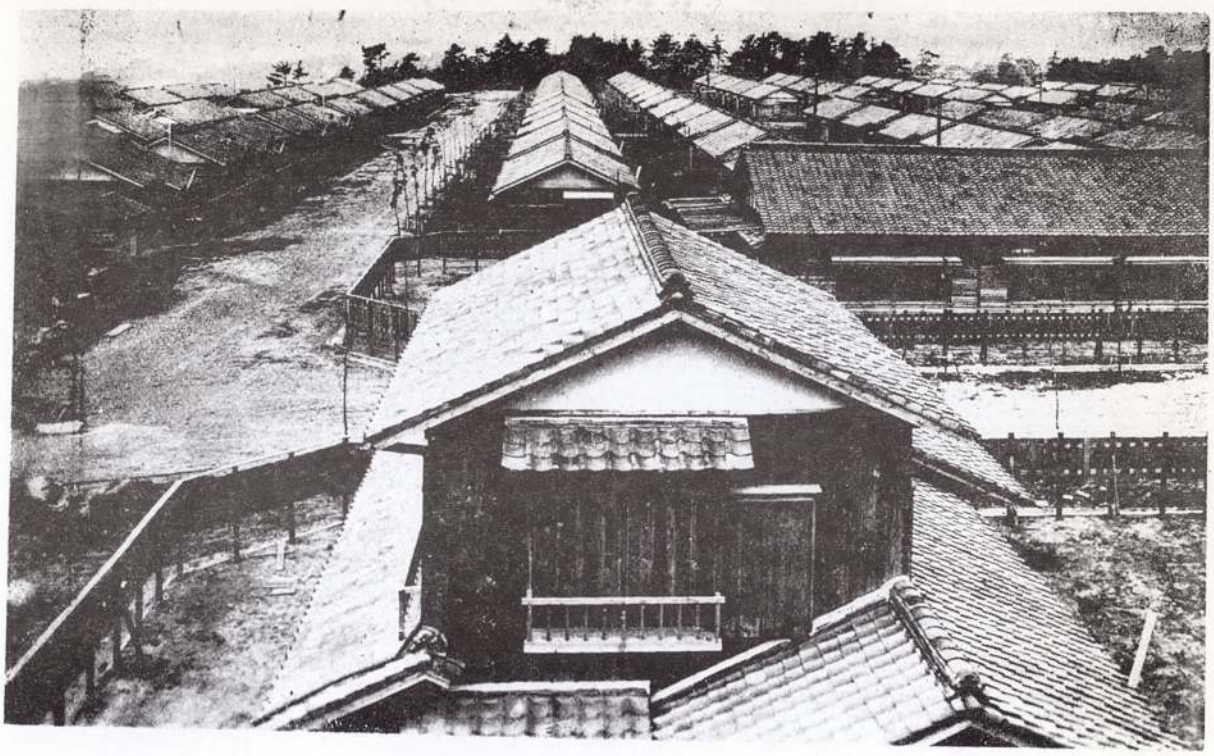
主記	桐本楠雅氏	佐藤正次郎氏
主記	中西六郎氏	堀井啓治氏
主記	藪中一良氏	
主計	小林三造氏	西澤藤生氏
主計	松久保敬三氏	
編輯	伊藤和夫氏	大下順三郎氏
編輯	小林清氏	錦田直一氏

（五十音順）

昭和十八年一月

日本建築協會

社團法人



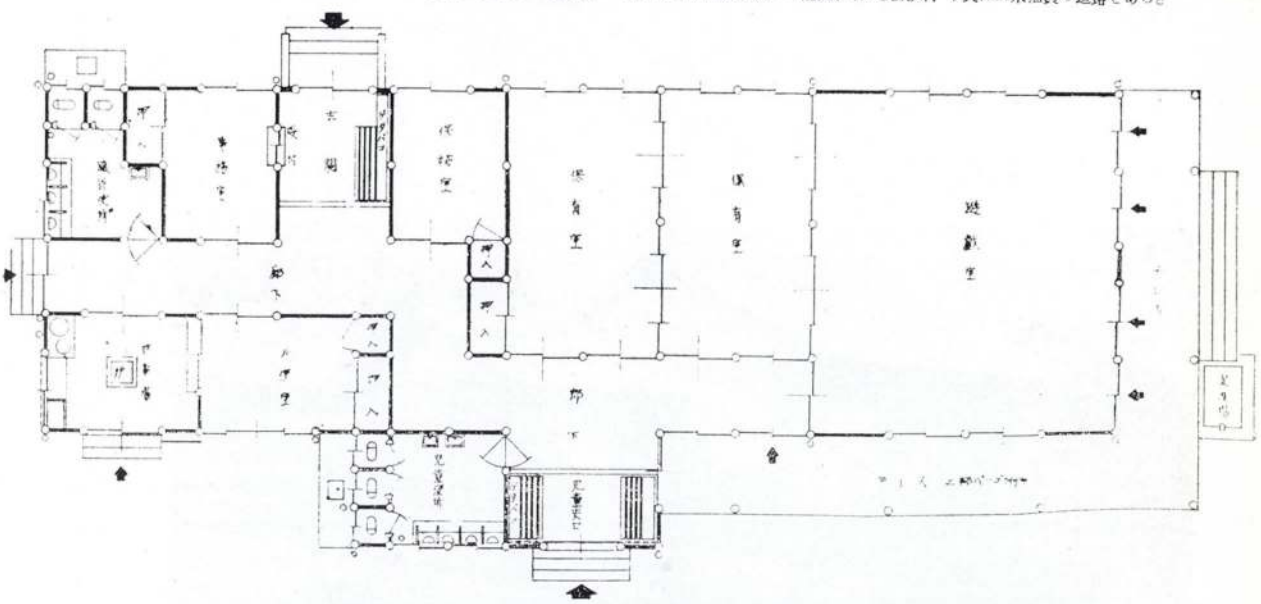
住宅營團勞務者住宅

住宅營團大阪支所が實際の建設工事に着手してから約1ケ年餘り、此の間大東亞戰爭の勃發と云ふ歷史的一大轉機に直面しながらも庶民住宅の建設と云ふ國家的要請に即應して鋭意工事を促進中であつたものが、17年7月頃から竣功し始めてゐる。兵庫縣武庫郡の八幡住宅。明石市附近の鹽江住宅。鳥羽住宅。大久保住宅。阪急沿線の園田住宅。石橋住宅。伊丹市の南野及尼寫住宅大阪市近郊の守口住宅。豊野住宅。山本住宅。京都市の一乘寺住宅等約3.200戸は已に竣功し、目下約10.000戸が工を急いで居る。

寫眞は鹽江。初芝。豊野。守口各住宅の一部である。

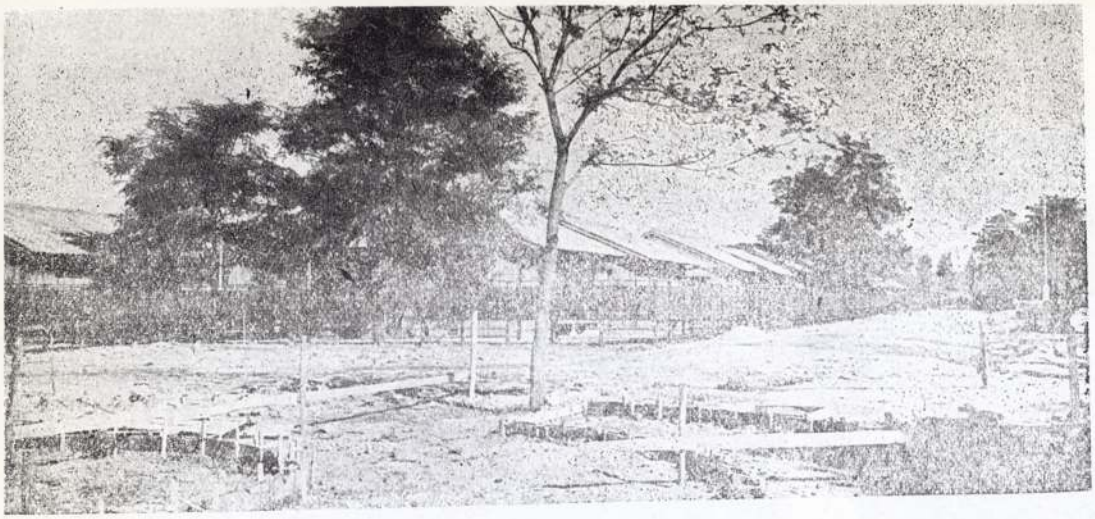
省線明石驛から西約4粁、山陽電車鹽江停留場前にある。敷地約130,000平方米上地高燥空氣清澄理想的な健康住宅地である。敷地中央に14米及 11米の幹線を交叉せしめ、戸數約700戸内1戸建及2戸建住宅の他に厚生施設として日用品配給所託兒所食堂集會所。公衆浴場。診療所。管理所。巡査派出所。郵便局（豫定）兒童遊園等を備へ、私設上水道の設備もあり、通風採光等申分なき明朗住宅として近くの○○工場へ一括分讓し産業戰士の家として國策に應應しつゝある。

寫眞は建設中の住宅地の一部で、手前は診療所の二階建、右は託兒所、中央は11米幅員の道路である。



託兒所――相當大きな住宅團地の厚生施設として設けるもので、其の用途は極めて廣い。必要に應じて産婆場ともなれば集會所にも應用せられる。此の施設に依つて子供を持つ産業戰士の兩親も安じて生産擴充に專念することが出來る。室内と室外との巨てを出來るだけ少くして明るい氣持の各室には次代を背負ふ子供達が明朗健康に育まれるのである。

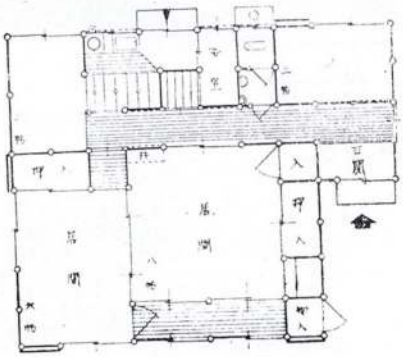
これは鹽江住宅託兒所の平面圖である。



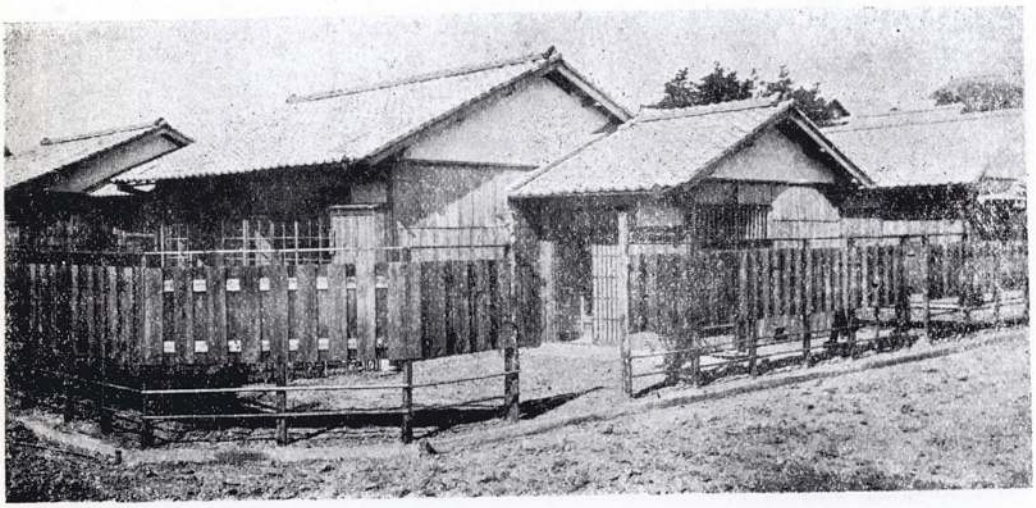
豊　野　住　宅

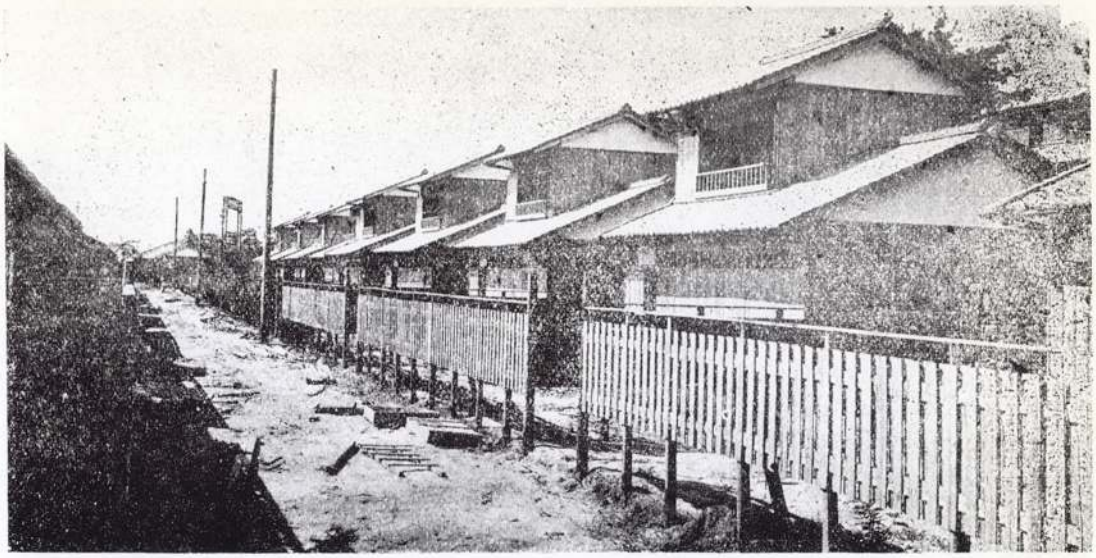
大阪府下京阪沿線で、元寝屋川運動場跡約50,000平方米の地に一般分譲用住宅、各型の平家及2階建住宅と日用品配給所及集合所等180戸餘りが竣功し、殆ど分譲契約を終つてゐる。小楠公戰死の地四條畷に程近く京阪電車へ約1丁、附近に教育機関も恵れ、上下水道も完備して田園住宅として申分なく、明朗なる勤勞者の住宅として居住者に喜ばれてゐる。

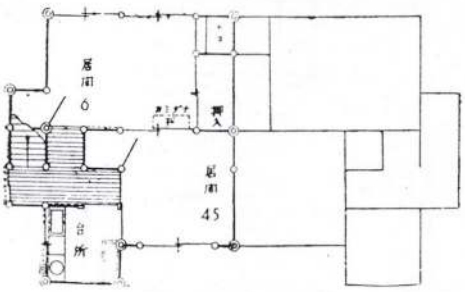
寫眞は團地出入口附近と、に型2階建（次頁上）並にほ型平家建の一部である。



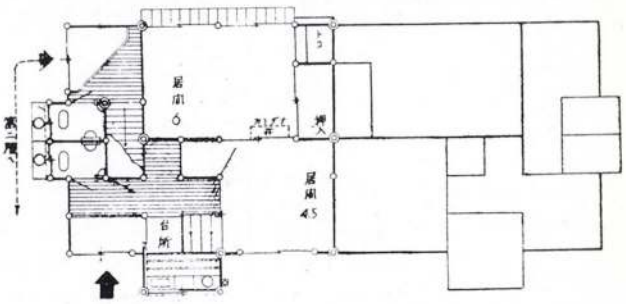
ほ型72平方米



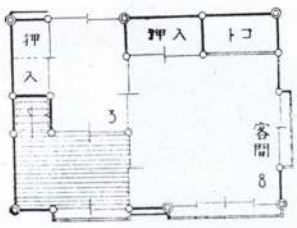


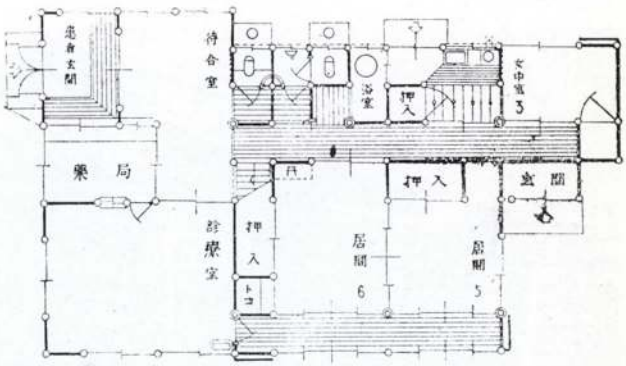


ろ型第二階　35平方米



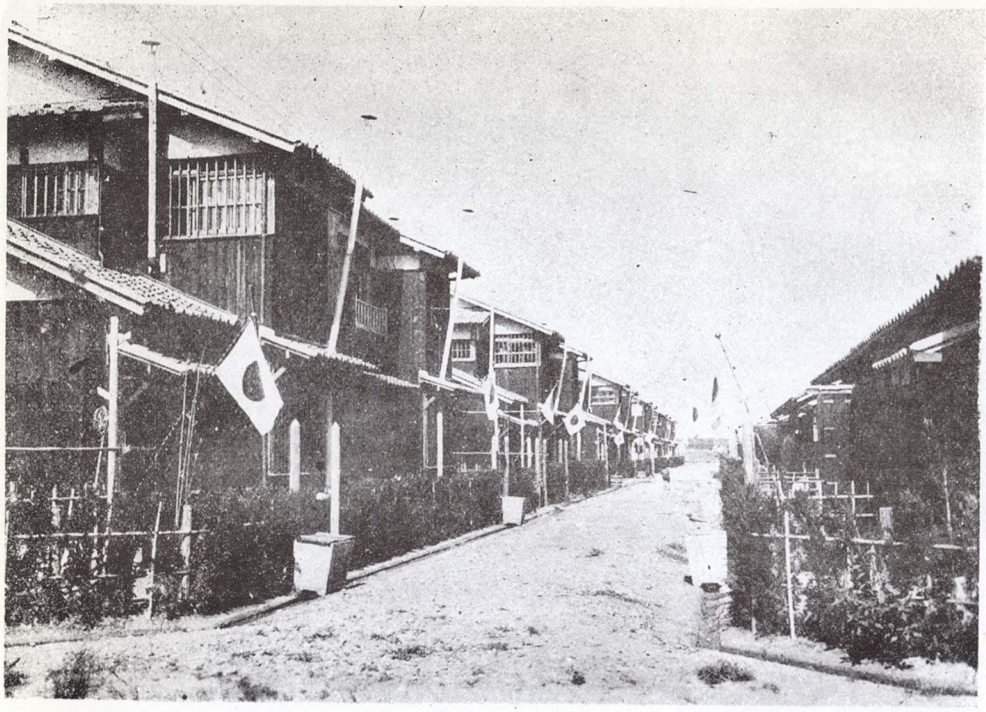
守口住宅ーろ型立喞四戸建
第一階45平方米





診　療　所

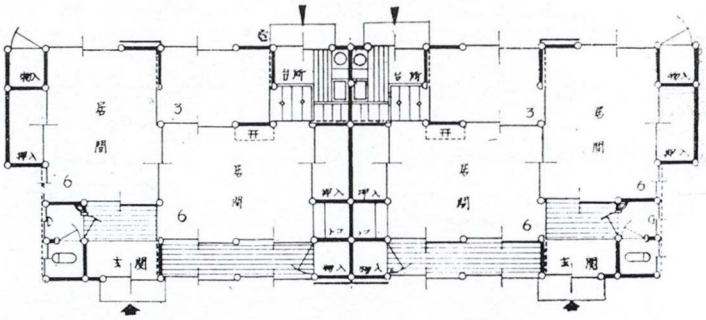
診療室を持つ醫師住宅と呼ふことが相應しいかも知れない。附近に醫療機關の少い地に設けるものである。
これは藤江住宅地の診療所平面圖である。

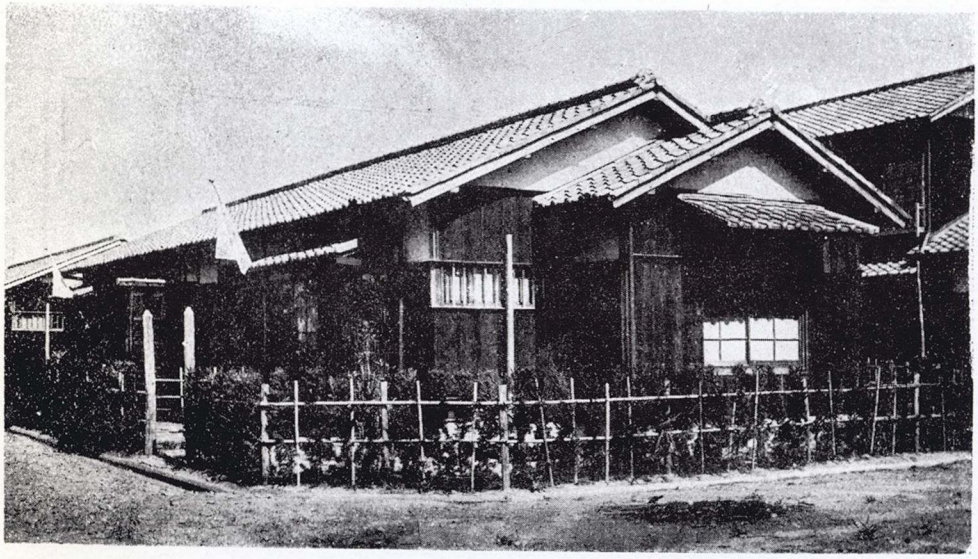


守口住宅

大阪市電守口町終點から東へ約5丁、京阪國道近くの地に守口住宅が竣功してゐる。此の住宅は大阪支所最初の試みとして一般貸用住宅の各型平家建及び2階立體4戸建始め一般分讓用の各型平家建及び2階建合計226戸21型式を網羅※

賃貸用は型
31平方米





※してゐる。市街地ではあるが、7割の空地を保有して防火建築規則も免除せられ宅地内の空地は立派な菜園として食糧増産に利用せられてゐる寫眞は賃貸用は型平家建とい型及ろ型の立體4戸建の一部である。

建築新体制成らんとす

日本建築協會 會長 片岡安

大東亞戰已に一周年を經て時局は益々深刻となり、一億一心その總力を發揮して國家の一大興隆を企圖すべき振古未曾有の決戰體制を整備せねばならぬ時機は切迫して來た、否むしろ已に其時期に突入して居るのである。東亞に於ける敵米英の據點は御稜威の下精鋭無比なる我陸海軍將士の善謀勇戰に依り悉く覆滅され、今や大東亞の輪廓は大成せんとして居るのであるが、しかし戰は僅かに緒戰を終りたるに過ぎず、眞の決戰はむしろ今後にあるのみならず、日々決戰又決戰尙幾百幾千の難關突破に成功するにあらざれば聖戰の目的は完遂されぬのである。而してこの難關突破には國民の總力を結集し、最も有効適切なる方策に依つて最大の努力を拂ふより外に途はない。

由來建築は國家の進運と常にその徑路を共にするものであり、其樣式に於て其構造に於て、更に其企畫に於て時代の文化を表現するのみならず、國家のあらゆる施設の輪廓をなし、又その內容を支配するものであることは、世界文化の歷史を繙くものゝ熟知するところである。我國に於ける最近の實情を見るに、此重大なる國家經綸の對象に就て其行政機構は中央地方を通じて指導性に一貫性なく、民間の企業は其設計及施工を通じて又何等の連絡協力もなき情態であつた。斯くしてこの大東亞戰の重大時機に到る、建築界に新體制の急要なることは必須の大勢であると考へられる。

昨年春以來、我建築界にありては建築學會を始め、日本建築士會、建築業協會及本協會は此の必須の情勢に對處すべく、新體制の確立を目ざして審議を進めて居つたのであるが、最近に至りその要綱を決定して當局に進言したのである。

今此處に其詳細を述べる餘裕なきも、要點は政府に建築企畫中樞機關を設け、建築物の計畫及實施に付き綜合的統制を最も有効適切に行はしめんとするのであつて、時局柄人的、物的資源の能率的調整をなさしめんとするのである。固よりこの新体制は國防國家建設に最も効率的に協力すべき建築界の使命を達成せしめんとすることを主眼とするのであるが、建築界の使命は新體制の確立のみにて足るものではないことを附記する。

年頭所感

日本建築協會 副會長 竹腰健造

新しい年に臨み、今こそ日本は總力を結集し、一億國民擧げて征戰完勝に邁進せねばならぬと思ふ。建築界に身を持するものは、更に緊褌一番、衆智を蒐め、凡ゆる難苦を克服して大政翼賛の誠を盡さねばならぬ事は勿論である。

生産設備の擴充には機械の設備に先立つて、建築を必要とする。是れがため軍事及軍需に應ずる爲の建築は玆數年間は迅速に進められるであらう。更に今日計畫せられてゐる建築で、資材と勞力とを大量に要すると見らるゝものに、住宅營團の住居の建築と、結核療養所の問題とがある。此等を同時に且つ迅速に實施せらるゝとしたならば之に要する建築資材と勞力とは莫大な量に達するであらう。建築技術者の問題もあるが、建築技術者の數は他の總てのものと同樣に不足を告げてはゐるが、未だ全體的に考へると、必要な方面に之れを補ふ樣に調整すれば、尙多少の餘地はある。今日の建築技術者の配置の狀況は、必ずしも戰時に於ける最大能力を發揮する態勢にあるものとも考へられない。然し資材の問題と建築勞力の問題は、眞に重大なる狀態が追りつゝあるものと觀察せらるゝのである。先づ、資材の方面に於ては、建築が數百種の資材が整つた時に始めて完成せられ、使用目的を達する事が出來る事に注意せねばならない。一部の資材に潤澤なる配給を受けても他の重要なる資材に於て缺るゝ物があれば、建築は完成しない。配給當事者にあつては、此點を一層重要視せられむ事を希望するものである。又建築資材の産出及配給の機構についても重大なる考慮を要すると思ふ。機構を誤る時は産出が停止し又産出量を減退せしむる結果となる場合があり得る。産出、配給の機構の組織化については、種々の方法があると考へられるが、建築は此數年の間は迅速に進められねばならない。縱令其方法が理論に於て正しく、永き將來に於て效果的であつても、一時でも停止又は減退するが如き方法は避けねばならない。今日の狀態は極めて必迫してゐて、其樣な豫裕は無いのである。配給の機構についても亦同樣の考慮を要すると思ふ。

建築勞力の供給については更に困難なる狀態が今後に起ると思ふ。戰時に於ては、戰爭遂行に直接必要なる方面に國民の多數が働かねばならぬ。是れが爲め建築方面の勞力が不足する事は止むを得ない事であるから、建築界に於ては、限られたる勞力を、效果的に使用する事に對する工夫と考慮とが必要である。此事は資材の圓滑なる配給と必然的に關聯して來る。資材の供給が不圓滑なるがために、今日如何に多くの勞力が所謂「手待ち」として浪費せられてゐるかを調査したら、思ひ半に過るものがあらう。建築勞力の問題を考へる時は、自ら建築施行業者の機構の問題が關聯して來る。今日請負者の統制問題が論議せられて居る。此一事は本年業界の最も注意すべき問題であると思ふ。今日請負業者の機構を改めて是れを一層有效に戰爭完遂に適する樣にする事は必要であらう。然し其方法は直ちに效果が現れるものでなければならない。如何に理路整然として合理的であつても、效果が1年又は2年後に現れたり、又は一時でも能力を低下せしむるものであつてはならぬ事は建築資材の産出、勞力の配給の場合と同一であつて、建築が生産擴充又は國防充實の先驅をなすものであるだけに、1日の能力低下も許されないのである。

請負機構の問題は、現狀が長い因習と複雜なる內部關係とを持つてゐるだけに、一步其の所置を誤れば、重大なる結果を招來すべく、愼重に對處

する要があるであらう。

茲2、3年は建築界は加速度的に繁忙を極めるであらう。然し生産の擴充こそ今日の急務であつて其設備を容るゝ建築は終局の目的ではない。從つて此繁忙がいつまでも續くとは限られない。建築界の將來に對しては今日から其場合に對處する考慮が必要であらう。年頭に當り低回久しく此等の事を思ふと同時に、建築界の新なる決意と覺悟とを要望して止まない次第である。

土建業者の將來

渡部圭吾

昭和17年度の土建界は、相當波瀾の多い年度であつたが、根本的な組織形態には變化なくして濟んだ。けれども來る18年度には變革があり、相當の紆餘曲折のある歳であることは、年頭に於て已に豫期せられる。こゝ2、3年間の業界は後年特筆せらるべき時期であると思はれることは、必らずしも筆者のみではなからうと思ふ。

兵聖クローゼウツクは「戰爭は政治の形を變へた延長であり、政治形態は戰爭形態をも變化せしむる」といふ言葉は多くの人々の記憶してをるところである。このことは直ちに吾々の業界にも當て嵌る言葉で、土建施工の業務形態も政治形態によつて變化することは歷史の示すところで明かである。氏族時代、奴隷時代、宗教時代、封建時代資本主義時代等々に於ては、夫々異つた施工組織形態で多くの建設物が施工せられた。現在行はれてゐる競爭入札の請負制度の如きは、明かに自由思想に基く資本主義經濟の政治組織時代に生れた制度で、他の時代には見られなかつたものである。

然るに吾國に於ては、大東亞戰以來、自由思想資本主義による經濟統制は次第に否定せられつゝあり、戰爭は全體思想と能力主義とを根幹とする統制を必要とするものであるから、その變革に拍車をかけ政治形態も一變せられようとしてゐる。即ち、能率を低下することなしに、戰爭遂行を第一目標として、その意圖する方向に、完全なる統制政治が行れやうとしてゐる。從つて、既に戰爭に必要なる重要産業は、全面的に統制せられ、その自由を許されざるに至つた。土建部門は凡て他の産業に附隨するものであるが、その中で重要産業に附隨するものは、これと同樣に取扱はれ、他のものは殆ど禁止的に制限せられるであらうことは、獨逸・伊太利・ソ聯等の例を見ても明かであらう。

然らば、土建築の完全なる統制は、どんな形態で實行せらるゝかは簡單に豫測することが出來ないけれども、結局に於ては獨逸に於る「ドツト」建設團の如き、軍隊的組織を有し、業者の大部分を打つて一丸とせる團體として組織せしめらるゝに至るのではないかと思ふ。然してその他の形態は、之に到達するまでの過渡的現象に過ぎないものであると想像せられる。尙地方又はある一小部分に現在の如きものが殘るのみであらう。

以上を解り易しくするために、その發展狀況を表示すれば次の如くである。

政治形態	施工組織形態		備考
自由思想資本主義經濟に基く政治形態時代	競爭入札請負制度（請負業者を必要とす）		前時代の一部が殘存す（特命請負、常備施工制度もある）
過渡時代	↓協力團體を組織しての請負制度↓業者の一部を軍等にて經營の管理をなし請負せむる制度↓	（或は）↓重要産業統制會に做へる方法によりての請負制度↓	小部分に尙競爭入札等も殘存する。（その他前項の制度も殘存することあるべし）
全體主義構造による（統制經濟）政治時代	大部分の業者を統合し軍隊式の建設團を組織して建設に當らしむる制度		尙一小部分又は片田舍等には前時代の制度が殘ることあるべし

尙備考に示せる通り、吾々が一時代の政治樣構を簡單な名稱を附して呼んでゐるが、凡ての時代が名稱通りに簡單なものではない。前時代並に後時代の關係が常に交錯してゐるものであることを知らねばならぬ。唯その主要な流れに對して名稱を附してをるだけに過ぎない。故に資本時代と稱してをる時でも、前時代、前々時代の一部が殘り次の時代の一部が浸入して來るものである。

以上は本年頭に於てヒシヒシと感ぜられる業者の將來に關して筆者の想像を記しただけで、かくなることの可否を論じたものではない。この事に對して何う處置しなければならぬか、如何なる對策を必要とするかについては、今後吾々が研究しなければならぬ課題であると思ふ。

（筆者は株式會社大林組本店取締役現業部長）

溫故知新

池田宮彦

我國の建築構造、特に鐵、セメントを主材とする方面の研究は、大正12年の關東大震火災以後急速なる發達を見るに到り、先づ構造理論の研究に建築界も土木界も華々しき有樣であつた。之れに續いて昭和時代に入りても、各種の研究論文の發表あり、又施工上の研究竝に實地指導方面も歐米の方法を移入し、之れを我國獨自の方法に改めつゝ15年頃迄に非常なる發達を遂ぐるに到らしめた。即ちセメント、コンクリートにありては化學的、物理的方面及施工上にては配合の諸研究竝に早强コンクリート、或は振動コンクリートの施工等。又鋼材を主とする方面にては鐵骨造の加工精度と速度（即ち製產量）特に電弧熔接の發達には目醒しきものがあつた。然るに支那事變の進展に伴ひ、次第に鋼材の使用に制限を受くるに至り、殊に大東亞戰の勃發に及んでは殆んど其の大部分が使用制限乃至禁止となつて、茲に一頓挫を來すに至つた事は、構造界にとつては寔に殘念なる次第である。然し時局は愈々重且つ大を加へ、建築に充てられつゝあつた大部分をも造船に差向くべ

き必要に迫られつゝある。

吾々は茲に於て重大なる問題にブチ當つたのである。即ち吾々は今日迄あまりにも鐵とセメントとを使ひ過ぎて居つた事、之れである。尤も防空防火都市の建築には鐵とコンクリートの必要なる事は判り切つた事であるが、餘りにも鐵とセメントに馴れ過ぎて居つた。何を計畫するにも鐵とセメントとが無かつたならば出來ない樣に考へて居つた事に氣が付いた譯である。此處で吾々は逆つて昔の我國の建築について今一應觀察し直ほす必要があると思ふのである。

セメントといふ物の用途の廣い事、便利で安値なること等は今更謂ふ迄もない。それだけに今之れが手に入らないとなると、一入に困難を感じ、又當惑を致す次第である。

然し乍らセメントが近年の如く思ふ存分に使へなかつた時代の事を考へて見ると、此の困難な時代を幾分でも樂に切り抜ける途を見出すことが出來るのでは無かろうか。具體的に述ぶれば昭和或は大正以前に建てられた木骨煉瓦造といふ建物が今日に至りても猶故障なく殘つて居るものもあることを考へるとき、或は大なる工場の柱の基礎が杭打の上に煉瓦造の大きな根積を設けてクレーンも走つて居る事。或は筆者の子供の頃、三州叩が床土間に今のコンクリートの代りに住宅工場等に用ひられて居つて、夫れが今猶保存せられて居ること、又はプラスターやセメントモルタル塗の代りに蠣灰や石灰を用ひた壁が、何等の遜色のない事等を思ひ返へせば、強ち悲觀するには及ばない反つてセメントよりも、用ひ場所によつては適當することに氣の付くこともあろう。三州叩を用ひ此の上に僅かのセメントモルタルを塗ることによつて、全體コンクリート造の土間に代用することも出來ると思はれる。然し三州叩に適する赤土の出來ない地方へ之れを强ふるものではない。有る所は之れを用ひてセメントを節約することを提唱するのである。又京都、奈良の如く土塀が古くより用ひられて、且つ仲々强く良いものが造られる地方ではコンクリート造や木造の塀を止めてもよいと思ふ。屋根葺材料にしても、土居葺に柿板、杉皮等を近年は專らアスファルトルーフイングに代へられて居るが、紙とアスファルトの拂底の時に於いては、之れも古への工法に立歸へつて考へねばなるまい。

塗料に就いても油脂、亞鉛華塗料（ペンキ）の極度に拂底した今日は、之れを差控へ置き戰後に塗ればよい。又雨露に曝らさるゝ木部にして塗裝する方が、其の耐久力に非常に良ろしいと考へらるゝ部分に對しては、京都方面に古來から用ひられて居るベニガラ塗を推賞したい。之れに墨を加へたものは色も防空色となり、且つ滋味があつて良いものである。

次に鐵にしても、鐵筋コンクリートの必要で無いと思はるゝ處迄用ひられた例も多くある。又面格子の如きものも可なり、無駄に鐵を用ひた例もある。構造金物にしても、木の組方を考へ直ほせば、もつと鐵の減ることもあろう。

之れを要するに此の大戰を勝抜く爲めに、暫くの辛抱であるから、主要資材を直接戰備に廻して他方之れに代るべき材料を我國古來の建築資材の中から求め、或は構造法を探究し、之れを今日の建築に應用することこそ今日の急務である。物がないから建家が出來ぬとは言つて居れぬ時代である。（17-12-8）

（筆者は長谷部竹腰建築事務所副所長）

78頁より續く

の如く考へ、曇如たる現代の史家に敢て批判を乞ふ次第である。

やばさみ研究には、神戸高工瀧澤教授の御指導御援助を賜はり、秋葉神社々司河村實氏の教示と洲原村の粥川伴六氏、加納喜右衞門氏、加納甚藏氏、古田兼四郎氏の親切な現地教授を忝うした。こゝに引きあひに出す事は、却つて御迷惑な程の小稿でしかないのであるが、記して感謝の意を表する。（17—12— 5）

（筆者は京都市營繕部第一技術課技師）

建築界の展望

本野精吾

裸形禮讃——大東亞戰爭第2年の春を迎ふるに際して私の頭を強く支配して居るものは一旦一切から離脫し、一切を清算して裸形の姿に立返へり本然の姿から新たに立直る事である。過去幾十年日本文化建設の途上に於て歐米に生育せる建築思想に根深く養はれたる吾等の內面には新らしき建設と同時に、その半面に於て內なる貴き何者かの崩壞しかけて居た姿に氣付くのである。建築に生活に文藝に一切の文化面に其の危き姿の影を認める。今新らしき文化の開拓に向つて血みどろな奮闘を爲しつゝある吾等は、一切の衣を脫ぎ捨て、洗ひ清めて新らしき衣を纏はねばならぬ。衣を脫ぎ去り、裸形の姿に立ち返つて、今脫ぎ去つた衣をふり返へる時、ソコには捨て去るには餘りに優れたる幾多の勞作を見出す。一切を整理し、一切を清算し樣とする時に、常に逢着する問題は多く此の點に存する。明治維新の當初幾多の貴き彫像が偶像として破壞され、優れたる建造物の數々が薪として賣られた如き史上に殘された事實にふり返へる時、今吾等に課せられた最大の問題は、脫ぎ去る衣の中より何れを捨て、何れを拾ふべきかに愼重の注意が拂はれなければならない事を想ふ。明治維新の當初、餘りに改革に急進せる一黨は一切を捨て去り、日本の國語を廢して他國の言葉に置き換へ樣とさへ企てたのであつた。然し乍ら又他の半面に於ては一切外來文化の浸入を否定し、固有の形骸に固執せんとして、之等急進する一黨と抗爭を爲した人々も多くある。何れも國を憂ふる一念の發露であり乍ら、其の姿に於て正に反對の方向に向つたのであつた。眞實は其の中道にある事を想ふ。今私は古の支那の高僧によつて書かれた一つの偶話を想ひ起す。一人の男が立つて居る。右は火の海であり、左は水の海である。其の中間に殘された狹き一と條の白道の彼方に彌陀の淨土が橫はる。一念發起して此の危き白道を渡り盡したもののみが彌陀の淨土に屆くと云ふのが、この偶話のあらましの筋である。吾等は今この白道を求めて勇猛精進せねばならぬ時である。眞實は常に兩極に挾まれて危き頂點に立つ。

史的展望——吾邦の歷史をふり返へる時に、吾等の前に大きく浮び上つて來る二つの時がある。其の一つは大東亞の先進文化を吸收して、東方に輝かしく浮び上つた飛鳥朝の頃であり、他の一つは世界に向つて門戶を開放し、大規模に歐米の文化を移入した明治維新の頃である。此の二つの時期は其の姿と規模とに於ては異なるけれども、其の質に於ては全く軌を一つにする。即ち前者にあつては佛敎を中心とし、一切の文化を先進せる朝鮮、支那に學び、謙虛なる心の姿に立つて一切を修得し移入し乍ら、尙且つ傳統の上に立つ魂を寸毫も侵さるゝ事なく、之等一切を溶かして日本文化の輝かしき發展を爲し遂げたのであつた。推古天皇を補佐し給はつて聖業を完遂された聖德太子の御偉業は正に此の事を如實に示す。後者にあつては全世界の先進文化に眼を開き、心を空ふして一切を收受し、而かも傳統文化の根底を寸土たりとも侵さるゝ事なくして肇國の姿に立ち返へり、新らしき發足を爲したのであつた。明治天皇の御偉業を想ふ時に、皇國日本の尊き姿に感謝せずには居られない。今此の二つの軌を一つにする史上の出來事に就て考察を進めて見度いと思ふ。

推古天皇の15年、小野妹子が國使として隨に派遣せられてより50餘年の後、天智天皇の御代となりし頃、支那には既に輝かしき唐朝の文化が其の發足をなし、國威は三韓を壓し、更に虎視耽々として日本の攻略を企圖しつゝあつたのである。其

の時に當り英明にまします天智天皇は、內は混亂せる國政を整備し、外に向つては三韓を挾けて國威を振興し、更に外敵をして寸土をも侵す能はざらしめられたのである。茲に日本文化進展の基礎が確立し、之れより50年を出でずして聖武天皇の御代輝かしき寧樂朝文化の出現を見たのである。大佛の開眼供養には其の導師として遠く印度の高僧が招聘せられ、其式典には印度風の樂が奏せられたと云ふが如き一事を見ても、如何に其の規模が宏大であつたかを想像する事が出來る。此の様に寧樂朝文化は唐制に倣ひ印度に學び、廣く大東亞の文化を移入し乍ら、而かも其の一切を皇國の魂の中に完全に溶かし盡し、來るべき日本文化發展を基礎づけたのであつた。寧樂朝文化を單なる唐制の模倣であり、外國文化への屈從であると見る事は誤まれる見解である。

飜つて想を現代に致す時、明治維新より昭和の聖代に至る迄の推移を察するに其の様相の餘りにも推古天皇の頃より天智天皇に至る間に酷似して居る事に氣付くのである。明治維新は五ケ條の御誓文を根幹として偉大なる構想の下に發足をなしたのであるが、現實の様相には新らしく移入されたる西歐の文化と、日本固有の文化の姿との間に烈しき相剋混亂を引き起したのであつた。斯る様相の間に文化の歩みが次第に高調し來つたのが即ち昭和の聖代である。今次世界戰亂の勃發する少しく以前より肇國の精神に立ち返へれと云ふ力强き叫びが擧げられ、戰爭の勃發と共に急速に總力擧げて國內體制の整備に取りかゝつた時代の姿は正に天智天皇の御代に唐の野望を制壓し乍ら混亂せる國內の整備に基礎づけられた時と全く其の様相を同じくして居る事に氣付くのである。

斯く觀じ來る時に大東亞を中心とする新文化の建設に向つて吾等の前に展開せんとしつゝある時代の様相は、明かに眼に映ずる事を覺える。吾等は今生命を堵して此の唯一の目標に向つて前進しつゝある。唯此の二つの時代を比較考察する時に其の様相に最も大いなる相違を見出す點は、現代に於ては明治より今日迄の間に世界列國の先進せる文化面の殆んど總てを學び盡し體得し終り、尙學ぶべき若干が殘されて居ると云つても、歐米の文化の一部は已に崩壞の一步手前にあるのではないかと思はせる多くの部面を發見する。今から 3 年前私は親しくニューヨークの土地を踏んで、彼の驚異に値する機械文化、物質文化の發育の中にあつて、人間其物の機能が次第に弱められつゝあるのではないかと思はせるものを見出したのである。丁度其頃ロツクフエラー研究所の中から醫學者であるアレキシス・カレルと云ふ人が「人間未知なる者」と云ふ一書を發表して、近代文化の米國に於ける發展は現時の姿に於ては人間の機能の崩壞を來すであらうと云ふ結論を詳細な例證の下に爲して居る。此の一文を私は非常に面白く讀みアメリカに此の事が實現しつゝあるかに思へる姿を發見して、文化と云ふ者が斯ふ云ふ道を辿るならば、面白くない事であると思つて歸つて來たのであつた。斯かる情勢の中にある日本の現代は、寧樂朝の文化に向つて踏み出さうとする天智天皇の頃とは餘程趣を異にする。

以上叙述したる日本の現狀を基礎として來るべき日本の建築文化に就いて考察も進める時、吾等に課せられたる課題は一切の建築の事に携はる人々が、皆國情の現實に直面し、臣道の自覺に徹して新らしき文化の建設に向つて一と役を演ずるの覺悟を以て各の仕事に從事する以外に何者も無いと云ふ事を明かに見出す。ソコから新らしき日本建築文化は自ら建設されて行くであらう。各人の狹き見解に基き、明日の様式を決定し様とする如き企ては全く生命無き建築文化の邪道に外ならぬ。今吾等は心を潛め、裸形の姿に立返へり、歷史的必然の發展に向つて注意深く見守らねばならぬ。

（筆者は京都高等工藝學校敎授）

生産擴充と建築

玉置豊次郎

茲一、二ケ月前頃から急に、銃後の生産擴充が問題になつて、色々な機會にこれが八釜しく論議される樣になつて來た。そこで我々にも意見が徴せられることが屢々である。私はこの時ぞとばかり宣傳して居ることがあるので、是非一應お聞き願いたい。

今手元に本を持ち合はさないので、何月號であつたかは、判つきり覺えないが、かれこれ一年近くも前になるかと思ふが、私は偶然外務省發行の海外事情と云ふ雜誌を讀んで居た。所が、その本のアメリカの項に、次の樣な意味のことが書いてあつた。アメリカが世界戰爭に介入して、自ら聯合國の兵器廠と稱して、莫大な豫算を組み、そして生産擴充をやつて居る。それでその後、この莫大な豫算を執行する爲めに、數百萬の勞働者を新たに必要とすることになつて居るが、その勞働者の動向を調査して見ると、大體豫定通りの勞働者が、今の所集まつて居る。そして集まつた勞働者のうち6割强が建築勞働者になつて、殘りの4割弱が造船、造兵飛行機等の工場の勞働者になつたと。雜誌の記事はまだ續いて居るが、私の必要な部分は以上の所までゞよい。

私はこれを讀んで暫く腕を組んで考へた。これは大變だ、アメリカの奴やるぞ、日本もこれでは油斷がならん、兎も角奴の頭は殘念だが組織立つて、筋が通つて居ると。

この記事が雜誌に揭載された時分、町ではまだアメリカの軍需品製造を天文學數字だといつて、頭から馬鹿にして掛つて仕舞つて居つた。所が第二次ソロモン海戰當りの時から、急に大本營や情報局邊りから、今迄とはうつて變つた樣な話が飛び出して來た。即ちアメリカは着々豫定通り生産力擴充をやつて、新らしい軍艦が海戰に續々見參し出した。彼の實力は油斷がならんぞ、我國でも大いに頑張つて、奴に負けない樣に軍需品製造に馬力を掛けねばならないぞと。

我國の計畫は總てとは云はないにしても、仲々計畫通りに進捗しない樣子である。何んでも今日では一隻の船を造るにしても、第一次世界大戰の時より今日の方が日數が多く掛るそうである、だから昨今のアメリカの狀態を見ると、氣になるのは當然である。

所が私に云はすと、生産力擴充に馬力を掛けねばならないと云ふ話は、十ケ月程遲れて居る。なぜ大本營や情報局は外務省のアメリカでは新らしい勞働者の6割が建築勞働者になつたと云ふ情報が入つた時に既に國民に呼び掛けなかつたのか。

一體全體我國は大東亞戰爭を勝ち抜く爲めに、非常な生産擴充をやらなければならないのであるが、その生産擴充は到底今迄の工場設備で賄へる程度のものでなく、先づ今迄の工場設備を數十倍のものに大擴張して、初めて可能な程度の大規模なものである。だから現在要求されて居る生産擴充には、先づ工場の大增築が必要である。然るに我國の各般の狀勢は凡そこの工場の大增築に備へられて居たであらうか。

今日では各分野共に經濟統制が擴大されて居るが、事變が初まつた最初に、この統制を受けたのは何かと云へば、それは建築分野のみであつた。鐵の使用にしても、銅の使用にしても、それは建築のみが對象にされて居つて、建築獨りだけが非常な拘束を受けねばならなかつた。資金調整法が出た時も、建築關係は一番虐待されて、セメントの製造にしても、釘の製造にしても、資金に關する限り白粉や口紅乃至チョコレートの製造と同じ待遇を受けねばならなかつた。セメントは製造業者が途中で拗ねて、政府の云ふことを聞かなくなつたから、政府もセメントに就ては全面的に待遇

を少し良くしたが、今日釘には國の上下が困つて居るのであるが、未だに昔と同じ取扱である。だから釘の增產なんか、この儘ではとても見込がないことになつて居る。建築用機械設備の製造も、いまだに全部禁制のまゝである。

徵用にしても、最初は建築技術者は入つて居なかつた。建築技術者が徵用される人の中に入つて居ない時分には、徵用の規定は一度も働いたことがなかつた。途中で建築技術者も徵用される樣に規定が改正された、改正された途端に徵用令が初めて活動した。而かもそれで最初の徵用を受けたのが、何んと建築技術者であつた。

非常に遺憾なことであるが、殆んど各方面でと申して良い程に、時局に貢獻する建築の役割といふものが無視されて居る。無視されて居る位はまだ良い方で、虐待されて來て居る。

そして生產擴充をやるのには、何よりも建築が第一であると云ふことに就て殆んど總ての日本の爲政者は無關心である。これ等の爲政者は生產擴充の問題は勞働者に配給する米の量の問題や、地下足袋の數の問題だと思つて居る。米や地下足袋の配給量を今の倍にしても、生產は1割も殖さないであらう。生產を倍にする爲めには、工場建築を倍に增築しなければならないのである。凡そ物には順序がある、その筋道は明瞭でなければ物事は進まない、その筋道を解せないで計畫を建てゝも、その計畫はうまく運ぶ譯がない。

この意味に於てアメリカは恐るべきである。彼は生產擴充の爲め新規の勞働者の6割强を建築勞働者たらしめた。そして工場を大馬力で大擴張をやつた、その大擴張された工場に於て要求されて居る生產の擴充を計つて居るのである。

日本ではどうだ。これ等工場の大增築は順調に進捗して居るだらうか、國のあらゆる政策は殆んど總てが、その大增築を阻害する樣な處はなかつたか、私は非常に危惧する。飛行機の製造工場を增築しやうとしても、隨分の日數をかけて色々の關門を通過しなければならないのだ。商船も潛水艦も、その增產の爲めの工場を增築するのに矢張色々の關所で聞き訊されねばならないのである。その手數と日數は大變なものだ、これでは戰爭に間に合ひ兼ねる。所がこの不都合を現在の所では何處へも一括して言ひに行く所がない。商工省へ行つても、企畫院へ行つても、これ等の矛盾は一度に形がつかないのである。

これだけではない。問題は外にまだ有る。今日建築勞務者は色々な原因で非常に不足して居る。生產擴充の爲めの工場增築工事もこれが爲めに、可なりの差閊へが生じて居る。そこでこれ等の勞務者の新規獲得について、職業指導所の門を敲いても、職業指導所では建築に關する限り、殆んど一顧も與へて呉れない狀態である。だから勞務者は減る一方で增さない。

又、今度の時局の要求で、高等工業學校が相當澤山新設されたし、尙增設されんとしてゐる。所がこれ等の新設や擴張の中に完全にといつて良い程に、どの學校にも建築の新學科が發見出來ない今迄から建築學科のある所で、學生の定員が增した所が少々ある位に過ぎない。だから建築技術者が將來增す見込も今の所全然ない。

これでは計畫された生產擴充は、出來樣筈がない。建築の元も子も押へられて居るから、生產擴充の爲めの礎石である建築は、到底覺束ないのである。アメリカと非常な相違だ。

今無閙と生產擴充が叫ばれて居るが、的が外れて居ることを我々は痛切に感ずる。

生產擴充の要求は眞摯なものだ。國民として是非これが具現する樣に皆が協力しなければならない。その爲めにはその障害になるものを極力除去して行かねばならない。所がその障害は決して一元的ではない。建築的障害は一番大きくて一番複雜である。

この建築的障害は一括打破出來ない。多方面から時を異にして鬪り上げられたものであるから、各個擊破でなければならない。この爲に各方面への啓蒙運動を必要とする。この啓蒙運動の精神は決して我田引水的の淺はかなものであつてはならない。愛國の志の發露でなければならない。敵國が他山の石であることは遺憾であるが、我々は負けることは出來ないのだ。昭和十八年の新年は先づこの運動から發足したい。

（筆者は愛知縣建築課長）

戰時下雜感

新名種夫

×

日常の物資に不自由しはじめてから物の有難さといふことを染々と感じる様になつた。米、鹽然り、魚介然り、野菜や青果亦然りである。

衣料切符が減るのと比例して、タオルや靴下の値打が次第に揚つて行く様にさへ感じられる。『煙草屋の店頭に煙草の見出されない所の氣持は喫まない君等には分らないよ』と、1日「光」5箱を必要とする友人が訴へたことがある。

こうした氣持は次第に物への愛着にまで發展する可能性があるのであるが、それが物に對する態度に現はれる場合2つの方向を取る。曰く節約、曰く買溜めである。

節約は現在自分の保有する物資の中で、將來への備へになるべく多くを殘そうとするものであり買溜めは將來への準備を廣く市場から獲得しやうといふのである。

愛着が物に對して發展する心理的過程は兩者共通のものがあり、自由主義經濟時代には、節約と買置貯藏とは一聯の行爲として『用意がいい』といふ言葉を以て、日常生活の心掛けの1つとして取扱はれてゐたものであるが、今日では、前者は時局的態度として推奬せられるが、後者は非時局的行爲として非難を受けなければならない。物資分配の統制を亂すからである。

同じ物を愛する心持のこの様に2つの方向に分れる原因は何であるか。國家中心か個人中心かの社會的道義心の相異である。

×

この時代になつて家を新築又は增築し始めた人が、僕の周圍だけでも數人ある。

セメントに不自由をし、釘に苦しみ、數本の柱1坪の瓦を買ふにも驚くべき高い價格と、想像以上の勞苦とを忍び、疊・建具から障子紙に至るまで、何一つ容易くは得られない。漸く苦心して得られた材料も、運搬が亦決して簡單ではない——といふ様な今日の情勢の中に、敢然として住宅を建て、又は增築しつつあるのである。アメリカより歸朝の野村大使の感想を待つまでもなく、全く驚くのほかはない。

そこで折に觸れてそれ等の人々の氣持を聞いて見ると、それには人夫々の理由もないではないがそれ等の人々には共通の氣持は大體次の様に要約し得る。曰く——

戰爭は容易に片附きそうもない。否片附いたとしても、住宅が樂に新築出來る様な時期は自分等の存命中には來そうもない。だから相當大なる犧牲を忍んでも、この際新築など行つてゐるのであると。

即戰即決の短期戰ならば辛抱もしやう。だが戰は何時果つべくもない長期戰なるが故に、自分の餘命を思ふと待つてゐられないといふのである。全くの自己本位個人主義である。

若櫻は前途洋々たる命を、蕾にして散つたではないか。餘命何するものぞと思ふ。

×

金屬回收が行はれて、臺所から不用な炊事用具が取り除かれ、押入から使ふ術もなかつた家財道具が運び去られて、家庭内がいささか重荷を下した感じであるが、それにも增して愉快なのは街頭風景の簡素化である。

屋上の看板や高い廣告塔が姿を消し、建築壁面の飾金物や面格子などのあくどいものが取外されて、簡單な木製のものに取換へられてゐるのを見ると、何となく清々しい氣持になる。

かくも不必要な裝飾を、戰前建築家達が苦心して設計してゐたことを思ふと不思議にもなる。

無裝飾の建築機能本位の建築、若い人々が呼ん

でも容易に到達し得なかつた境地であるが、戰爭は一も二もなく建築をこゝまで追ひ詰めて來た。喜ふべきことである。

序に今一つ爽快なことは、街頭に自動車の減少したことだ。

官廳の勤務時間の延長で、夕方5時過ぎの一般交通機關の混雜は近頃閉口であるが、銀座街頭に大きな青虫の樣な自動車の群りが無くなつたのはラツシュアワーの混雜を補つて餘りがある。

それであて最近は比較的樂に空車を見出し得て急場の間に合ふ樣になつたのは、人々が何時しかタクシーといふものゝ存在を忘れた爲であらう。

×

神奈川縣下に收容中の英國の俘虜が、川崎方面の工場の運搬作業などに傭はれて行くのを屢々見掛ける。髭むじやの見上げる樣な大男數十人を、5尺2寸位の紅顏の兵士が、1人で引率して行くのを見ると、何となくバランスの取れない、併し微笑しい風景である。

が、今一つ氣の附く點は、彼等が極めて呑氣なことである。飯籠を腰にぶら下げて、晴れた秋の空の下を全く朗かな顏して歩いてゐる。小面憎い程である。街頭の日本人の方が餘つ程差し迫つた顏をしてゐるのである。

長期戰下民心の弛緩は素より許さるべきではない。併し餘りに神經質なそして急り過ぎた緊迫感は、對長期戰的ではない樣に思ふ。それは永續性に乏しいからである。

長期戰下敵の樂天主義は、我々に取つて1つの强敵であることを忘れてはならないと思ふ。

×

『建築はかくあらねばならぬ』といふ問題は、戰爭特に大東亞戰爭の勃發を界として、その考へ方に劃然たる區別をつける必要がある。

建築生產の基礎條件たる材料・勞力・運搬等の完備した時代の理想的建築と、長期戰下の、あらゆる資源を戰爭目的の爲に劃愛しなければならない今日の建築とは、全く異つた根據の上に考慮せられなければならぬ。

戰前府縣の建築課に於ては、建築の質の向上を最大の目標とし、材料の一定標準以上の使用に關しては決して意見を述べなかつたのであるが、今日では反對に、一定標準以上に材料を使用せしめざることに重點を置き、國家資材の無駄な使用を制限する所に目標が置かれてゐる。戰爭に勝つといふことが、刻下の唯一最大の國家目的だからである。

英國では第一次世界大戰後の住宅政策の失敗に鑑み、今次は慘憺たる敗戰下にも、尙戰後の住宅問題に就き研究を繼續してゐるといふ。彼等の心臟の太さに驚くものであるが、こうした將來への對策の研究は、我國に於ても今日も決して忽にすべきではない。

10年先、20年先になるかも知れない戰後の建築の問題に浚頭する研究家・研究機關も當然なくてはならないが、唯現下の要求に應じて早急に建てられるべき建築に對しては、今日の情勢を基礎として、それとは全く別な立場に立つて、これが計畫に當らねばならぬ。

話が手前に味噌になるので恐縮であるが、住宅營團が建設中の1戶7坪5合の特別級1號住宅なども、前者の立場からはいろいろな意見が加へられるであらう。だが、これは飽くまで米英擊滅戰最中の今日、目下必要な住宅であつて、戰時下を無視した立場から、これを論議することは、その出發迄に於て既に誤りがあるのである。

話が幾分脫線し、そして幾分の關聯があるが、最近貴司山治・中本たか子・片岡鐵兵といつた一時左翼文壇に名のあつた人達の愛國の文章を指して、その豹變を笑ふ樣な口調を二三耳にした。

筆者はそれ等の人々にかく言つたものである。——この世界の相樣を變へやうとする大戰爭の眞只中にあつて、考へ方が依然として戰前の儘である樣な人は文學者としての資格がない。人1倍の敏感さを以て、この一大轉換の時代を感じ、時代の動きに目覺めるものは、我々より前に文學者である筈ではないかと。

建築に對する考へ方にも、同樣なことが言へると思ふ。

×

建築雜誌10月號所載竹腰健造氏『建築偏理の問題』は、最近設計監督の側に立つものよりも、請負業者よりも、最も材料業者に向つて要求せらるべきである樣に思ふ。

15頁へ續く

時局下世人の住宅觀

吉田信武

日本人の半數は女子である。時局下生活改善の責務は實に之等女性の双肩に懸つてゐる。其の要締を摑むには先づこんな本を讀め。と云ふ意味の廣告が、或る日市電に乘つてゐた小生の眼に着いたので、近頃或る先輩から引繼いだ女子專門學校の住居の講義に大いに參考となるだらうと考へ、早速下車停留所附近の書店で一本を買取つた。書物の名は「すまひといふく」。衣服の部はともかくとして、住居の部では、有名な文學者や小說家或は建築家がそれぞれの立場から自由に時局下の住宅乃至住宅問題に就いて述べられて居る。車中や就寢前に一寸繙いて拾讀みをしただけではあつたが、所謂斯界の專門家の論旨は別として、所謂素人筋の談論に、現下の住宅建築問題に關する數々の主張が盛られて居り、而も其の大半は小生等が常に眞劍に考察し高唱し來つた事項であり、文士一流の麗文を以て平易明瞭に論述されてゐるのを發見し、世人の說亦斯くなるやと、大いに氣をよくしたのであつた。

遇々時を同じうして、我が日本建築協會編輯部より來信あり。「時局建築工藝に關する隨想」を何か書けとの依賴。果して課題の趣旨に沿ひ得るや否や甚だ疑問とする次第ではあるが、隨想とあるを盾にとつて、其の隨想のきつかけを本書に求め、平素抱いてゐる考への一端を開陳して見たいと思ふのである。但し、決して本書構成の執筆者各位の辭句や言葉尻を促へて、徒に之を批判し、之をもてあそばんとするものでないことを、初頭に明記し、以て大方の諒承を得ておき度い。

先づ、小說家武者小路實篤氏は、自分は家のことに就いて深く考へたことがない。併し、希望を言へば、それは天災地變や盜難に對しては安全であり度いと述べ、其の構築手段としては國家經營であることを以て理想とすると結んで居られるが其の一說「僕はあまり贅澤な家は好まない。質實で、實用向きな家を好む。空襲のことを考へないわけにはゆかない。今後は國家で家を建て、適當な値で貸すやうにして、模範的な家を段々つくるやうにするといゝと思ふ。アパート式でもかまはない。個人でつくるのだと安つぽいものがどうしても出來安く、天災や兵火にあふと、見じめすぎるやうに思ふ。いくら金持でも、自分達さへよければいゝと言ふ時代はすぎつゝあるし、個人の金は知れたものだから、矢張り國民の生活に大事な住居の問題は國家が全部負擔しないまでも何とか便宜をはかつて、永遠の都を建設する百年の計をたてるといゝと思ふ。個人にまかせては完全な都市計畫は出來ないと思ふ。」と。

贅澤な家は好まない。成金趣味は眞平だ。住宅は便利で、堅牢で、快適であればそれで結構。建物の面積も普通の家庭ならば、30坪以內で充分。といふのが、現在相當以上の都市生活を營んでゐる人々の大多數が抱いてゐる住宅觀と看て間違はなからう。古來、個人的豪奢を以て人生の目標としてゐた一部の人々も、大東亞建設と云ふ國家目的達成のため、多少の不便は忍んでもといふ思想のあらはれとも考へられるが、之を以て一時的の自制的現象たらしめてはならない。生活樣式の改善工夫と同時に建築學的研究に依り、永遠に一切の無駄を省くやう導くことこそ、建築家に課せられた責務であらう。都市住宅の不良化を防止する爲、建築敷地の最小限度を規定すべしとの聲は旣に高いが、一方其の最大限度をも制定しおくべしとの識者の言は大いに味ふべきだと考へられる。

現在、防空と生活とを分離して考へることは出來ない。防空即生活の實施には、先づ住宅を防空的に改むるの着意がなければならぬ。總ての都市

建築物が鐵筋或は鐵骨鐵筋混凝土造の、所謂耐彈耐震、耐火構造物なること、甚だしきは地下都市の構築こそ眞の防空都市なることは言を俟たないが、如何に計畫し如何に建設しやうとしても、到底急場の間にあはぬ。投下爆彈の直下にあれば、之は先づ百年目とあきらめるより途がないが、其の爆片や爆風、甚だしきは味方の打出す高射砲彈の破片によつて死傷するの馬鹿を見ぬやう、適當なる待避施設築造の要は確にある。併し、我國都市の現狀を以て見れば、何と言つても防空の第一義は防火にある。全體が準耐火構造とまで行かぬにしろ、防空建築規則に定められた木造建築物の構成と、相當な空地、水、消防設備と、人的訓練とは是非必要である。單に物資が不充分であるといふ口實のもとに、徒に手を拱いでゐてはいけない。

都市建築物の一部を國家の手で建設してもらひ度いと小生等が感じたのは、既に十年程以前からのことである。其の頃はまだ防空の重要性は左程一般に喧傳せられてはゐなかつたが、日本各都市の火災による損失は年を追うて其の額を增すばかり。都市計畫の施設として重要都市の要所には、既に防火地區なるものゝ指定があり、成程圖面で見ると相當立派であるが、其の實耐火構造物は僅に三々五々點在するのみ。毎年の耐震耐火建築物の建築率から推しても、何百年の後に圖面の通り完成するか全く見當がつかぬ。自分の家を自分で耐火的に改築した場合、或る程度自分の財産を保護することになるには相違ないが、周圍に澤山の木造家屋が密集してゐて、それらが總て燒けたとき、果して完全に初期の目的が達せられやうか其の家が他人の家への火災除けになることは確であるが、それではどうも算盤が合はぬ。近頃のやうに共存共榮といふ良い思想が行渡つて居れば、こんな不平も言からうが、當時は今と違ふ。そこで、防火地區の完成は個人のためのみではない。都市全體惹いては國家の爲である。との理由を以て機會あるごとに上司からも本協會からも、當局に談じ込まれたのであつたが、種々の都合で防火地區助成補助金の交付すらも行はれなかつたのであつた。都市防空防火の絶叫せられる今日、思へば遺憾千萬である。武者小路氏に與へられた課題が、住居であつた關係上、同氏は國民生活に大事な住宅に就いてのみ語られてゐるが、防火地區の完成も、國民住宅の建設も、總て國家的事業である以上、其の構築方法に對する考へ方は軌を一にしてよいと思はれる。

又、昨年5月、政府出資1億圓を以て生れた住宅營團の現狀は、當然この話題の中に引出されずばなるまい。時局の要請に對應して、速に勞務者其の他庶民の住宅の供給を確保し、以て國民生活の安定を圖り、軍需充足生産力擴充等、重要國策の完遂に資せんとするのが、本營團設立の目的である。と其の本旨とする處を率直に表現すれば、一應同氏の希みに相當の光明を與へ得る如くであるが、實は目下の處、本營團の任務として建設戸數の量を主眼とする關係上、世間一般の專門家の批評がどうであらうとも、例へば建坪7坪半の所謂特別級の平家をも造らねばならぬことになつてゐるので、之を以て模範的住宅の準國家經營だとするには餘程の疑問がある。尤も、物資や勞力の關係上、厚生省の方針に基く斯かる一時的現狀は眞に已むを得ぬのではあるが、將來住宅營團はあくまでも日本住宅問題の指導者であり、且其の國家的遂行機關であらねばならぬと信ずる。從つて現在住宅營團の遣しつゝある實蹟が、永く國爲の爲に不利とならざるやう、悔を千歲に殘さざるやう念願する次第である。

都市計畫なる言葉の下に、所謂都市百年の計を樹て、保安、衞生、交通、防空、經濟等萬般の見地より、圓滑なる都市の發展を期してゐるのであるが、國家或は公共團體等が積極的に之に共力する分野は、主として土木事業に限られてゐる。建築事業の殆ど大部分は個人の手に委ねられ、國家としては僅にその制限を取扱つてゐるに過ぎない。總ての建物まで國の手でといふのは極端であるけれども、もう少し都市計畫の線に沿ひ得るやう、建築物の行手を見屆け得る然るべき機構なり手段が慾しい。

次に、評論家兼常清佐氏は「私の子供の頃は家といふものは土の上にあるものだとばかり思つてゐた。」と面白い切出しに續いて「今では物は土

地の上などにはない。家は家と家との間にぶら下つてゐる。右を見ても左を見ても、木らしい木など1本もない。そこはむかし幾百年の大樹が繁つてゐたところである。それを土地會社が、その土地ぐるみ只の次ぐらひな値で買ひ取つて分譲地といふむづかしい名をつけて賣出したところである。そしてそこに文化住宅といふ世にもをかしい家を建てる。これが文化人の家である。變れば變つたものである。しかしこれらも家では上等な方である。それが普通の家となると、話はいよいよ悲慘になる。家は土地と全く縁が切れる。ただ屋根と壁と床とが人間を圍つてゐるといふだけのものになる。」と、都市住宅に空地なき現狀を指適し、斯かる狀態に於ける火災の脅威と論述し、最後に「自然の中に育つた私共はよく言へば純朴であつた。しかし人間が土地から離れて人間だけの家に閉ぢ込められると、さう簡單にゆかない。私どもが子供の時、經驗した父や母といふものは、今土地のない家に育つた子供の經驗する父や母とはよほど違ふ。これが土地のない家に育つ都會ニツポンの姿である。そして、それがだんだん田舍ニツポンにまでも進んでゆかうとしてゐる。」と。土地のない家が簇出する近世の傾向が必ずしも悪いとは思はないと結んであるが、この現狀が子女の教育乃至は成人の感情に及ぼす影響を喚じてゐられるやうである。

衞生上、保安上等の見地より、都市の建物に空地の必要を感じられたのは遠い昔からであるが、輓近に至り、防空防火の懸命からも、大いに高唱せられ、愈々其の重要性が增加し來つたのである

周知の如く、我國市街地建築物法に依つて規定せられてゐる空地は、商業地域に於て敷地面積に對し僅に2割、其の他の地域に於ても4割ありさへすればよいことゝなつてゐる。立法當時、市街地建築物法なるものは大都市又は都市の中樞部にのみ適用することを建前としたが故に、斯く緩なる制限を設けたのであるが、現在の如く本法が相當廣範圍の土地に亘つて用ひられるに及んでも、世間ではこの限度が宛も空地留保の適度を示す標準の如く誤られ、何等制限のなかつた以前に比し却つて空地率が一般に低下したといふ奇現象を呈するに至つたことは殘念な次第である。

今日到底これではいかんといふので、市街地建築物法に空地々區なる規定が設けられ、必要に應じて內務大臣が指定し得ることゝなつたのである。其の限度としては、建物の床面積の敷地面積に對する比が7割乃至2割以下となつてゐるので茲に兼常氏の云はれる空地とは、これでも未だ大分開きがあるやうである。幾百年の大樹が庭になければと云はれる位であるから、何時か東京での空地地區座談會の席上或る將官が「延坪比2割以下とあるのは、2分以下の間違ではないのかと思つた。空地地區と名を打つて出る以上、もつと嚴にされ度い。」と言はれた。其の程度を望んでゐられるものだと思ふ。蔬菜自給の立場より見るも、共に大いに考ふべき言葉であらう。

空地地區の指定は、既に東京・名古屋等に實施せられた。何れ近く關西方面の都市にも指定せられることであらう。大阪市を中心とする一帶は、土地平坦で山丘少く、又地價は他地方に比し相當高く、且つ建物の樣式として、從來長屋建を多く見る等の關係上、本規定適用の頭初に於ては多少の問題が諸々に擡頭することも豫想せられぬでもないが、深く思ひを一國の防空、防火、保健、衞生上に致し、協力せられむことを望む次第である。都市建物の分散疎開は都市防空の要締であり而も就中空地の確保による手段は物質のいらぬ最も要領のよい方法と思はれる。

女流作家林芙美子氏は「京都の街を歩くと、表情のある家がまへと云ふものを隨分見かける」と冒頭し「着物を一枚つくるにも、たゞ頃合ひのものを買つてきて縫つて着るだけでは、そのひとの味はひがないやうに、家を建てるにも、たゞ人まかせで建てゝ住むと云ふのは何となく味氣ないものだ。」と論破し、ぼろ家でも、借り家でも、其處に住む人の一寸した心使ひで大變おくゆかしくなるものであることを力說。又張りぼてのボール箱のやうな所謂西洋館は、夏は暑く、冬は寒いことを指適し、最後に「これからは家をつくるにしても、A型とかB型とか一律なものしか出來ないさうだけれども、せめてその家の中に住むひとが家を大切にし、部屋のなかを愛情深く飾つてくれるといゝと思ふ。どんな家でも美しく住むやうに

消化してゆくことが、これからなほさら大切な事ではないかと思ふ。」と。專ら住宅の意匠についての心掛けを述べられてゐる。

明治維新以來、我國と西洋諸國の交通が俄に盛んとなり、當然我國住宅にも尠からぬ影響を及ぼし、從來の所謂和風住宅の他に彼地のものを模倣せる所謂洋風住宅なるものがあらはれるに至つた。彼我の長を採り短を捨て、之をよく消化吸收することは決して悪いことではないが、往々にして輕薄なる思慮より所謂西洋館をその儘採用してゐるのを見るが、實に言語同斷と云はねばならぬ。特に氣候や生活樣式を充分に考慮し、我國住宅樣式の主流を決定しなければならない。といふ事實は、專門家の間では既に常識化された事柄であるが、今尙一部市民の中にその採擇の判斷を誤り、得意然としてゐる人士あることは遺憾千萬である。

建築の工業化或は住宅の規格化の必要性を叫ばれたのも最近のことではない。滿洲國に於ては既に住宅の型が制定され、又內地に於ても前述の住宅營團にあつては、或る程度の型を指定せられてゐる。住宅の構造、平面、其の他細部計畫の規格化は建築工作の能率と、住居本來の目的との双方よりの睨合せを愼重に行つた後、之を決定しなければならぬと思はれるが、或程度の標準樹立は目下の急務であらう。

又、童話作家村岡花子氏は「私どもの幸福や樂しさは家庭を中心として築き上げられてゐる。それ故にこそ、その家庭の所在する住宅の問題は、おろそかには考へられないのである。家族の健康も氣持の明暗も住宅に依つて、支配されるところが大きいからである。家庭の常住坐臥する場所を美しく、住み心地よくする方針で住宅を營んで行きたい。」と、住宅は接客本位でなく、家族本位とすべきことを主張し、時々簡單な模樣替へ或は家具の置換へをし、氣分の轉換を行ふことは樂しいことであると述べ、「部屋は屋內のみと考へるのも窮屈なものである。殊に春から夏にかけて、庭もまた部屋として大いに役立たせることが出來る。」と、明朗な考へを吐露してゐられる。

云ふ迄もなく、住宅は生活を行ふ上に缺くことの出來ない容器であり、今では單に雨露や外敵を防ぐばかりでは、その目的が充分果されなくなつた。家族の團欒、住人の休養、子弟の養育といふやうな問題を忘れることは出來ない。これがためには、家も庭も押並べて我等が樂園と考へる氣持が必要であらう。

以上諸家の住宅に關する意見は、世人の說を代表する聲として、大いに傾聽するに値するものではなからうか。

（筆者は大阪府土木部都市計畫課、都市計畫地方委員會技師兼地方技師）

11頁より續く

請負業者は戰爭目的の第一義的工事に手一杯であるから、これに仕事を引受けて貰ふ爲には、設計者側は請負業者に賴み奉つてやつと契約を結ぶことが多いのである。

工事着工後も、その誠意ある仕事の進行を求める爲には、監督の側にある建築家は或は賴み或は讓り、請負業者の代人の仕事の大部分をまで引受けて何うやら仕事になつて行くといふ實例すら少くはない。

次に請負業者は請負業者として、材料特に販賣統制を受けてゐる材料取得の爲に、陰陽のてだてを以て、材料取扱者に如何に懇願これ勤めてゐるかは、我々の知る範圍を遙に超えてゐる樣である。

設計監督者・請負業者・材料商・この3者の關係は、戰前と今日とは全く逆の立場にあるのである。

材料の公定價格の設定と、その販賣統制との實施以來、官廳公共團體等に於ては、材料を自ら取得し、これを請負人に支給する方が、材料入手が圓滑に行くものと考へられたものが、最近逆轉して、工事費の多少の增額をさへ覺悟すれば、これを請負人に取得せしめる方が、物によつては却つて圓滑にこれを入手し得るといふ見方が生じつゝあるのは、公定價格による公正な取引の要求せられてゐる今日、材料業者が依然求利第一の自由主義的な考へ方を捨てゝゐない證據であると思ふ。

設計監督者・請負業者の倫理の確立素より必要であるが、建築界が材料業者の道義心に訴ふるところ今日より大なるはないと考へる。

（筆者は住宅營團東京支所第二工務課長）

住宅問題の研究

矢田鐵藏

貸家
居住の歴史
住宅の不足
建築費
家賃
戰時の住宅

貸家

「住宅——文化式、階上ノミ、家賃十五圓、譲二百圓也」

これは大正區内の一貸家のビラでありますが、今市内でこんな家を見出すことは實に珍らしいことであります。これは今すぐ引越の出來る空家とは違ひます。よく調べてみますと、2階が6帖に3帖で2階に昇る入口が1階に別にあり、2階に臺所、便所があります。現在この2階に住んでゐるのは子供3人に夫婦の5人暮し、階下には又別の家族が住ひし家賃は16圓であり同じ6帖と3帖があります。すべて家主は子供のある人にはあまり好んで貸しませんが、この場合は再々家族の新生の傾向にあり、これ以上はこの2階では手狭のため、尚又1階の住人や家主の希望もあり、疊建具を200圓で賣つて、他に家を求めてゐる所で、1ケ月の豫告を以て申込めば借りることができます。つまり敷金45圓を外に要する譯であります。

文化式とは果してこれでせうか。大正區内は最近特に重要工場が多く、從つて住宅難どころではなく過剩群居の樣相を示してゐます。2階の天井高7尺5寸とし6帖と3帖では11.25立坪になり、今成人1人當り3.3立坪、子供（12歳以下）を半分にとれば家族5人として11.55立坪を要します。しかし之は最少限でありまして、衞生上から少くとも5立坪は必要であります。それからこの家の空氣の流通如何も大いに關係があり室が狭くとも空氣の流通さへよければ構はぬとも言へます。逆に風通しが悪ければいかに室が廣くとも仕方がありません。人間は呼吸により1晝夜に400立方米（2218石）の大量の空氣を汚すことになります。

居住の歴史

「狐には穴あり、鳥には巢あり、されど人の子は枕する處無し」

キリストの言葉はまことに巧みな比喩にみちてゐます。これは動物の住居の型式と云へます。一つは地中に自ら穴を作り或は自然の穴つまり永久的の住居をもつてゐます。そして材料も木や土や石造であります。も一つは鳥類の住ひで巢乃ち木の家に住んで居ります。

殆んど毎年巢を新築しますが、燕の樣に古巢を忘れずに勢ひよく歸つてくるのもあります。或は又巢に花辨の絨毯を敷く密蜂の種類もあります。動物は衣服については心配する要はありません。それは自然に適當の被服を與へられてゐます。しかも環境によつては立派な迷彩が施されてあります。

人は太古の穴居の時代を經て材料を組立てゝ家を建てることを始めました。文化史上特筆すべきことであります。然し最近亦空を防ぐがために再び昔なつかしい穴居の生活に歸らんとする人もあります。そして人の衣服は昔動植物が着てゐた古着を材料として作つてあります。皮革にせよ織物にせよ皆動植物の着用してゐたものです。

これら二つの文明の中、洞穴より生じたものと鳥の巢より發したものと、乃ち石造と木造と何れがうまい考へでありませうか、木の家、東洋の家は一時的な事、鳥の巢同樣であります。値段も安く誠に經濟的且つ衞生的であります。地震にも相當耐へる事ができますが直ぐ燃える事が缺點です。

日本は石造即ち歐米の風を移入して多年今や鐵骨、鐵筋、耐震の獨特の研鑽に於て遙かに群をぬいてゐます、しかし冒頭キリストの言葉が物質の世界を眼中に置いてゐないとすれば、日本的な建築を作り出すべき組織を先づ構造することが吾人に殘されたる崇高な仕事ではないでせうか。

住宅の不足

需要供給の不均衡は統計上明かに認められる事實でありますが、以下數年前に溯り詳しく論じて見ませう、わが大阪市には一體どの位家屋がありませうか。

昭和7年にはまさに戸數にして529637軒、しかも空家が 28655軒ありましたから、實住宅としては500982軒となり、人口が 2586300人でありましたから一軒5.16人の割であります。

家屋總數は昭和7年には529637、昭和13年には610199、結局6年間に80562戸の增加であります。從つて年平均 13427戸宛增加した譯であります。

さて右6年間に市の人口は昭和7年の 2586300より昭和13年の3321200になりました。乃ち6年間に734900人の增加で、年々122500にあたります。從つて人口10人の增加に對して1軒の家が建つ譯であります。

結局家の增加は人口の增加よりも遙かに後れて居つたのであります。再々茲數年に入りますと戰爭により事情が大變にかはつてゐる事が想像されます。

1戸4室の家は勞務者に對して最少必要限度であります。兩親が1室、男の子に1室、女の子に1室、食堂兼臺所に1室、之であります。從つてこの種の家は少くとも窓が4つに入口が1つなければなりませんが前記の50萬餘戸の家の中にはまだまだ改善を待つ不衞生な家屋が相當あります。然るに又獨身者にして數室を占領し中には數軒に住んでゐるものさへあるのであります。或は都會に自宅を近郊に隱宅を高原に山莊を海濱に週末の家を有ちたがる豪勢な人もあります。その結果所有者が住むのは年に數週、數月と云ふ家も相當ありませう。蓋し一人で幾つも家を持つてゐるからであります。從つて空いてゐる家はいつも多少ある譯で中には年中空いてゐるのもあると思はれます。これらの休閑家屋の利用と云ふことも考へらるべき問題でありませう。

乃ち需要供給の不均衡は分配の不平等に由り益々激しく成る傾向がみえるのであります。

建築費

人間の慾望のうち衣服、食料については貧富の違ひは質だけの事で量に於ては同じであります。しかしこれが住宅になりますと分配が可成り不平等になつて居ります。そして何時の時代に於ても高價であります。何故に住宅はその慾望を滿足せしむるのに高價なのでせうか。建築はむつかしく云へば地面に一定の平面を持つ不動產であります。家其物がすでに土地の運命に從ふものであります。この點やゝ農業に似た特性をもつて居ます。

建築は材料を綜合して一つの空間を創ることでありますから、各種の材料の價格にも制限を受けます。住宅に使はれる木材の量は相當量になりますがこの外に石材、鐵、硝子、煉瓦、瓦等各種の材料が使はれます。この外に人間の勤勞による手間が極めて高價であります。それに更に不思議なことは建築のやり方が昔ながらの方法と大差なく少しも進歩してゐないことです。

つまり機械化された大工業に似たものは全然ありません。家の建築を自動車製造に比べる時兩者の違ひは大變なものです。自動車製造では分業が極度に行はれて居ります。且つ流れ作業によつて勞働者はその仕事をするに必要な時間は何分何秒ときまつて居ります。家の方はどうでせうか。吉日を選んで木遣の音頭も床しく鶴は千年と棟木の一本を槌音高く打ち納める洵にのんびりとした風景ではありませんか。勿論現在までに何らかの方法で建築費を安くする事は色々と考へられたのであります。

建築材料の發明、工法の工夫、標準規格の設定組立住宅等枚擧にいとまない位であります。建築費の參考として三つの貸家の例をかかげましたが木材費の昂騰は年と共に高くなつてゐます。(別表建築費三例參照)

家賃

衣食に關する支出と異つて家賃は壓縮することの出來ない定時支出であります。特に勞務者の家計上では非常に巨額の支出で殆んど總費の¼より⅓に及んでゐます。

住宅難はいつの時代にもあつたものとみえてローマ帝國の昔にもこの報告があります。

「金持はドームス(家)と稱して自分の家を持

つてゐたけれども大多數の人民は貸家に住んでゐた。之を通稱インスラ（島）と呼んでゐた。この貸家は甚だ家賃が高く建築は粗末で且つ不愉快極まるものであつた。然し適當な交通機關がなかつたので住民は市の中央に塊まつて居なくてはならなかつた。家賃が頗る高いのでこの點から言つてもローマは帝政下に於て深甚なる恐慌を體驗した譯である。而もこの恐慌たるや、種々の緩和策帝國の保護にも拘らず酷く成る計りで4世紀の終りに至つた。」

「ローマ市の人口過剩は實に甚だしく家賃は斯くも騰貴したので帝國政府は幾度も幾度も之に干渉して家賃を制限しなければならなかつた。遂には勅令に依つて年2000セステル以下の家の家賃は1年支拂を猶豫せしむるに至つた。」2000年後の今日その禍ひと救濟法は殆んど變つてゐないのであります。

住宅難は實に慢性の社會疾患の一つでありまして、何れの國に於ても爲政者の頭をなやます問題であります。これ全く需要に對する住宅の不足に依るもので、住宅以外の慾望に於てはこの不均衡は一時的でありまして、需要供給の自然の働きで不調和が消失するのを恒としております。住宅に限り何故にこの調節が圓滑にゆかないのでせうか。家屋の生産が敷地の制限と建築費の暴騰により同時に阻害されてゐるからであります。これが解決法の一つは需要供給の法則が作用する程度に迄都市の人口を疎散することも一法であります。又時計や自動車を作る場合の樣に一定の標準による規格生產の新工法の研究も考へられます。最後に强權の發動による抑制の方法、家賃の統制があります。

即ち地代家賃統制令に依つて（昭和15年10月19日勅令第678號）從來の家賃を住宅の拂底につけ込み勝手に値上する事が許されませんし、新築の際は適正家賃の規準が示されてあります。適正家賃は昭和15年12月6日附大阪府告示第2029號に示されてあります。

大阪府では次の通りで以下實例により計算をあげます。

大阪府告示第二千二十九號

昭和十五年十月厚生省令第四十七號地代家賃統制令施行規則第十一條ニ基キ同規則第四條及第七條第一項ノ率ヲ下記ノ通定ム

昭和十五年十二月六日

大阪府知事　半井　清

1 定メントスル率

イ、地代　（年分）　百分ノ4.2

ロ、家賃　（月分）　下表ノ通

構造別	普通建物 木造（木骨造鐵網モルタル塗其ノ他ノ木骨造塗家ヲ含ム）	普通建物 煉瓦造、石造コンクリート造及土藏造	普通建物 鐵骨鐵筋コンクリート造、鐵筋コンクリート造及鐵骨造（鐵骨石造及鐵骨煉瓦造ヲ含ム）
主體建築費	1.14	0.95	0.83
附屬設備費及造作費	1.55	1.32	1.27

構造別	下宿屋共同住宅及ビルヂング 木造（木骨造鐵網モルタル塗其ノ他ノ木骨造塗家ヲ含ム）	下宿屋共同住宅及ビルヂング 煉瓦造、石造コンクリート造及土藏造	下宿屋共同住宅及ビルヂング 鐵骨鐵筋コンクリート造、鐵筋コンクリート造及鐵骨（鐵骨造石造及鐵骨煉瓦造ヲ含ム）
主體建築費	1.46	1.09	0.96
附屬設備費及造作費	2.14	1.65	1.35

2 適用地域　大阪府一圓

3 前提條件

1 地代

イ 支拂方法　前拂

ロ 敷金權利金　徵收セズ

ハ 借地期間　20年

ニ 地租及同附加稅　貸主ノ負擔トス

2 家賃

イ 支拂方法　後拂、權利金ハ徵收セズ

ロ 敷金　家賃ノ3月分以內

ハ 修繕費　修繕費ハ貸主ノ負擔トス　但シ普通建物ニ在リテハ障子張替、硝子嵌替ノ費ハ借主ノ負擔トス

ニ 家屋稅及同附加稅　貸主ノ負擔トス

ホ 建物ヲ店舖、工場等ノ用途ニ供スル爲ノ特別施設（飾窓、機械設備、動力設備等）ニ要スル費用ハ借主ノ負擔トス

ヘ 普通建物ニ在リテハ電氣、瓦斯、水道ノ使用料其ノ他借家ノ使用上必要ナル費用ハ總テ之ヲ借主ノ負擔トス

建　築　費　3　例

年度	例　1（昭和15年度）		例　2（同　16年度）		例　3（同　17年度）	
概要	大阪市西區内某アパート 木造 1階 128.4 / 2階 126.9 } 延坪 255.3 敷地 218坪		兵庫縣御影普通貸家 木造 平家 13坪 敷地 27坪		大阪市西區内高級貸家 木造 1階 9.87 / 2階 9.87 / 地階 3. } 延坪 22.74 敷地 13.6坪	
費目	建築費	坪當	建築費	坪當	建築費	坪當
1 假設工事	925.86	3.55	40.00	3.08	528.00	23.22
2 基礎工事	2,223.75	8.61	124.00	9.53	1,735.00	76.30
3 軸部材料	7,143.00	27.70	465.00	35.76	1,356.00	55.20
4 造作材料	7,046.11	27.30	350.00	26.92	2,029.00	89.29
5 屋根工事	1,970.00	7.65	195.00	15.00	427.00	18.78
6 左官工事	4,561.95	17.65	230.00	17.69	701.50	30.84
7 左官下地	1,283.95	4.99	50.00	3.84	170.50	1.49
8 錺工事	569.00	2.20	70.00	5.38	126.00	5.54
9 建具工事	＊ 3,035.00	12.10	235.00	18.07	1,220.00	53.65
10 硝子工事	＊ 540.00	2.08	30.00	2.30	660.00	29.02
11 金物工事	1,444.82	5.62	62.00	4.76	143.00	6.29
12 タイル工事	948.00	3.65			180.00	7.92
13 石材工事	242.00	0.94			210.00	9.24
14 塗師工事	1,534.00	5.95	28.00	2.15	80.00	3.51
15 大工手間	4,824.00	18.80	360.00	27.69	1,630.00	71.68
16 手傳手間	1,179.00	4.56	110.00	8.46	528.00	23.22
17 雜工事	＊ 1,444.67	5.62	60.00	4.61	859.00	37.78
18 諸經費	1,868.48	7.28	45.00	3.46	280.00	12.31
19 電氣工事	＊ 1,486.00	5.70	96.00	9.38	436.00	19.17
20 給水衛生	＊ 4.220.00	16.40	130.00	10.00	772.00	33.75
21 門塀工事	＊		120.00	9.22	880.00	38.70
合計	48,489.59	188.35	2,800.00	215.30	14,951.00	652.92
主體工事費	37.763.92		2,129.00		10,124.00	
附屬設備費及造作費	10,725.67		671.00		4,827.00	

（註）

附屬設備費及造作費は費目のうち＊印のものを加算しましたが、概略全體の8割が主體工事に、2割が附屬設備費及造作費となる見當です。

戰時の住宅

回々教の教祖モハムメツドはその部下に教へて「我同胞にして戰に臨まずして其竈を堀るものは禍なる哉。爾は果して死を避け得ると信ずるや。何ぞ生死の宿命已に定まれるを思ざる」

即ち國民皆兵先づ第一線に立たしめ功を樹て歸還の勇士に先づ住居の構へを許したのでありますアラビヤ人は當時是の如き精神に鼓舞せられ中世世界史の一大勢力となり當代世界の大半を征服しました事は洵に故なきにあらずと思ひます。勿論戰爭の目的と方法を異にする今日に於ては、銃後も戰場でありまして、生産力增强のために産業戰士に快適の住居を提供することは、極めて緊要の事と思ひます。まして勞務者のうちには國家の意志に依つて經營に馴せ參じた徵用者のあることを忘れてはなりません。

戰ひに勝つためには衣食住の慾望を最少限度に縮少して、國家の企圖に從ひその理想の完遂に力を竭すことが必要であります。言ひ換へますと、物質的な贅澤を精神的なそれにおき換へる事であります。

從つて家賃の如き未前に公定し之を統制するに非んば蓋し法外の昂騰を來し建築費は益々あがつて單に新築に止らずボロボロの古家迄値上りを生じ住宅難をますます深刻にするのであります。是需要が供給より大なる時は市場を支配するものは最高價格つまり最高生産費なりと言ふ簡單な規則に從ふからであります。

も一つ住宅拂底の原因は、人手の不足に建築資材の入手困難の外に勞務者の地域的集中がありますこれが對策として供給を動かして家を多く建てることが大變結構ではありますが、土地に制限を受ㇾ通勤の時間に制限を受けますから、大多數の滿足を得られません。通勤地を考に入れた住宅の交換もありますが、個々の條件が相違してゐますから、一定坪數の居住權の如きものを定めてからでないと交換が圓滑にゆかぬ樣に思ひます。最も即効のあるのは、休閑住宅を勞務者に提供し遊休家屋を活用し更に經營不振のアパートの類を外ならぬ勞務者のために動員することは、銃後衣食住共同戰線の秋まさに率先躬行さるべき事ではないでせうか。

最近大阪府が全國に魁けて遊休家屋の活用を提唱されたところ、各方面の反響を叫び、休閑住宅はどしどし勞務者に提供し、産業戰士の憩ひの家にしようと云ふ嬉しい機運が大阪及近郊にわきあがつてきたことは、勞務者住宅の解決法として洵に即效的であります。

中でも豪華なのは、大阪府北河內郡大和田村にある大邸宅で、敷地 1200坪、建坪 80坪で、10疊から8疊まで間數14疊數77疊と云ふ立派なもの、邸內には土藏2棟や門長屋、その他附屬建物がある。女子勞務者の修養道場として更生すべく交涉が進んでゐる。

又他の例として、阪神沿線本山村住吉川畔、松籟の中に邸宅としての豪華を誇つた元久原邸があげられる。宅地面積實に25,000坪、建物延1,300餘坪が川崎第一本山寮として産業戰士の寮に轉身したことは、けだし全國隨一のものでありませう。

幾多の花やかな歷史をもつこの大邸宅の建物の一部は大食堂や娛樂室に改造されたが、露領沿海州にあつた建物をもつてきてそのまゝに建築、かつては露國皇帝が泊られたとも傳へられるロシア館をはじめ、大部分はそのまゝで使はれてゐる。事務室、娛樂室、食堂などを除いて現に戰士たちの居室にあてられてゐるものは47室あり、いづれも用材、構造ともに善美をつくしたもので、寮としては全國一大規模のものでありませう。徒らに世に埋れること8年、今や時代の脚光を浴びて新らしく示現した姿は洵に感慨深いものがあります。

（例 1）

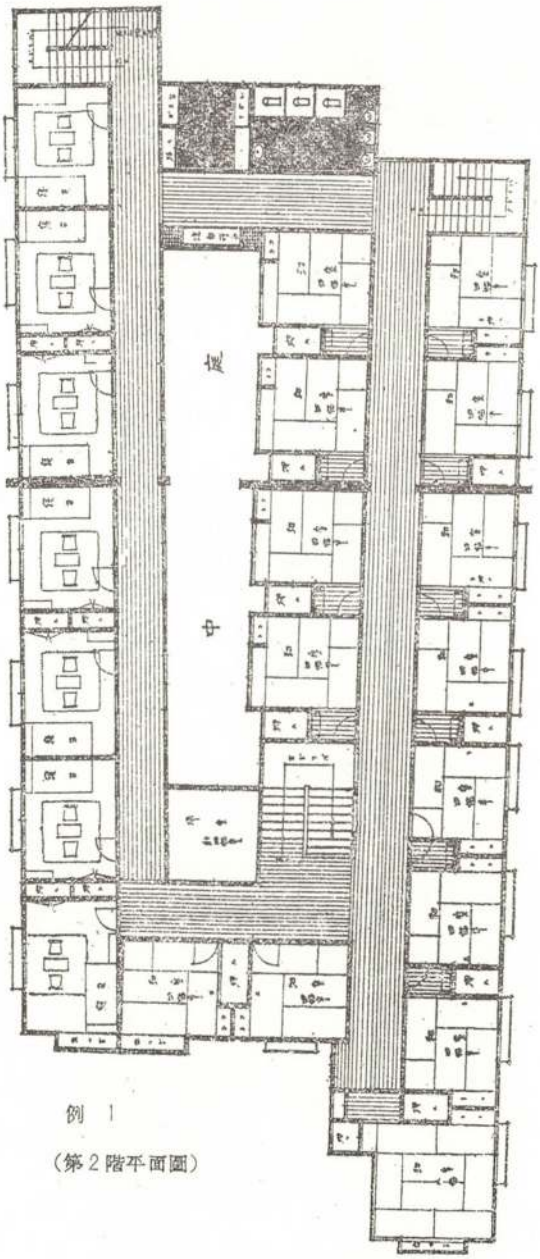
$$家賃(月分)=\left(主體建築費\times\frac{1.46}{100}\right)+附屬設備費及造作費\times\frac{2.14}{100}+\left(土地資本\times\frac{4.2}{100}\times\frac{1}{12}\right)+\left(火災保險料\right)+\left(共益費\right)=\left(37763.92\times\frac{1.46}{100}\right)+\left(10725.67\times\frac{2.14}{100}\right)+\left(218\times120\times\frac{4.2}{100}\times\frac{1}{12}\right)+\left(175\times\frac{1}{12}\right)+\left(90\right)$$

$$=963.90$$

即ち洋間も其割合に換算しますと全疊數が 208 疊ありますから一帖當りが 4,634圓となります。これにより各室の規準を示しますと

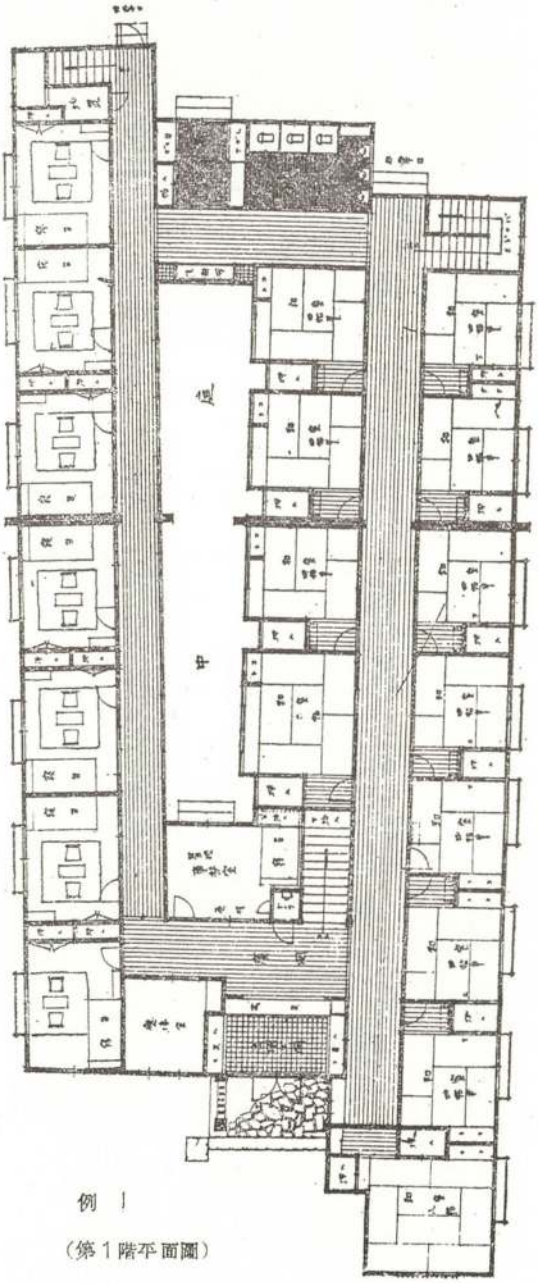
種	疊	室	賃
洋　室	6	14	27.80
和　室	4½	24	20.85
和　室	8	2	37.07

※



例 1

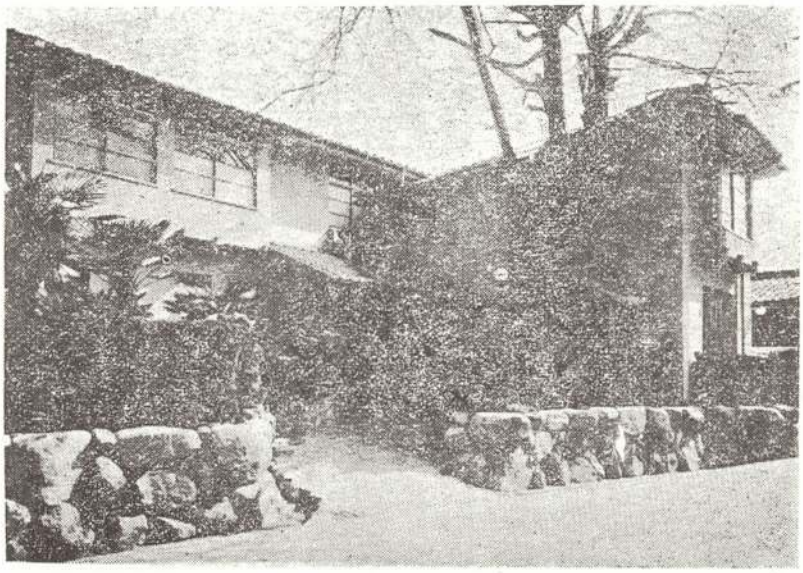
（第2階平面圖）



例 1

（第1階平面圖）

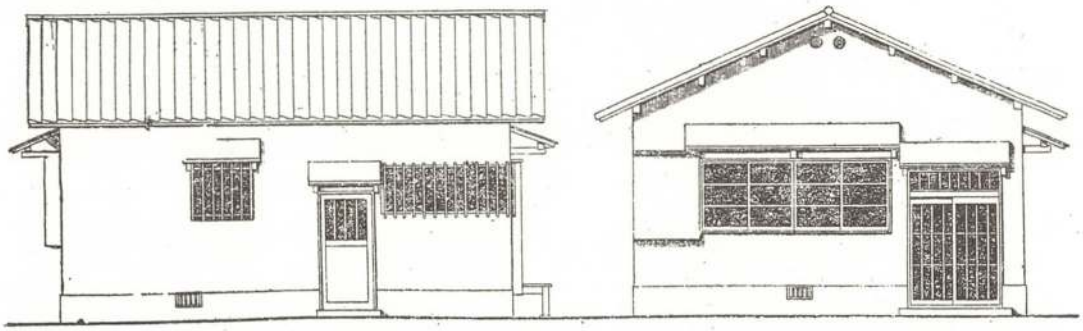
例 1 （正 面 外 觀）



※

勿論これは室の位置、日當りとか、内部の床の間、家具等の設備の如何によつても適當に加減されるべきものでありますが、家賃總額は、かわりません。

例 2



東側　　北側

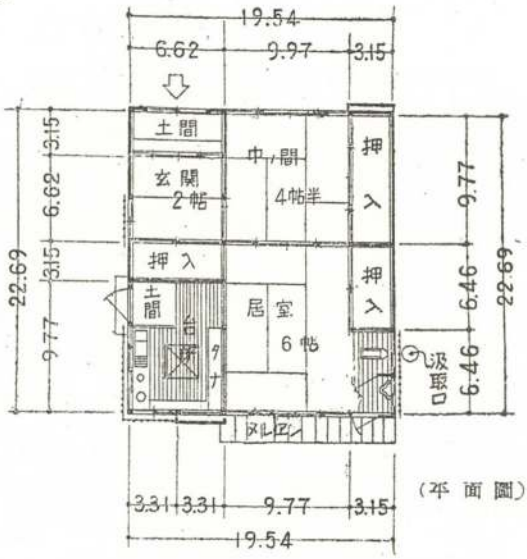
（姿 圖）

（例 2）

御影町に在る最少4室の獨立貸家の例でありますが、適正家賃の乘率は御影では大阪と同じになつてゐます。

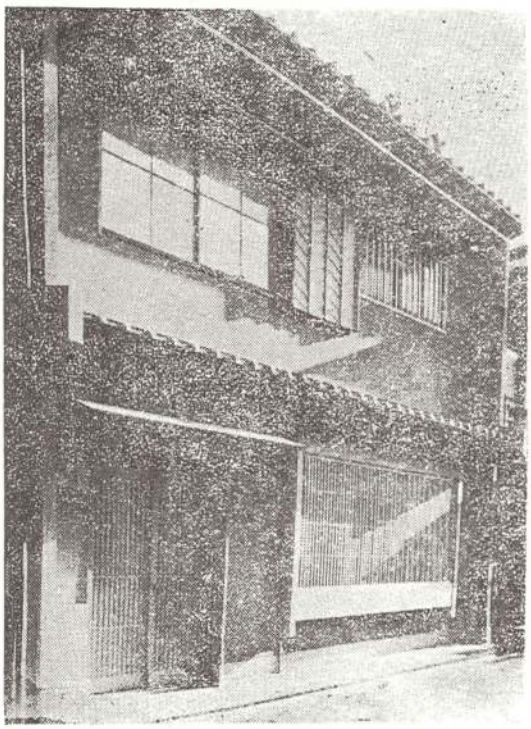
$$\text{家賃}\left(\text{月分}\right)=\left(\text{主體工事費}\times\frac{1.14}{100}\right)+\text{附屬設備費及造作費}\times\frac{1.55}{100}\Big)+\left(\text{土地資本}\times\frac{4.2}{100}\times\frac{1}{12}\right)+\left(\text{火災保險料}\right)$$

$$=\left(2129\times\frac{1.14}{100}\right)+\left(671\times\frac{1.55}{100}\right)+\left(27\times100\times\frac{4.2}{100}\times\frac{1}{12}\right)+\left(6.16\times\frac{1}{12}\right)=44.63$$



（平 面 圖）

例　3



（北　側）

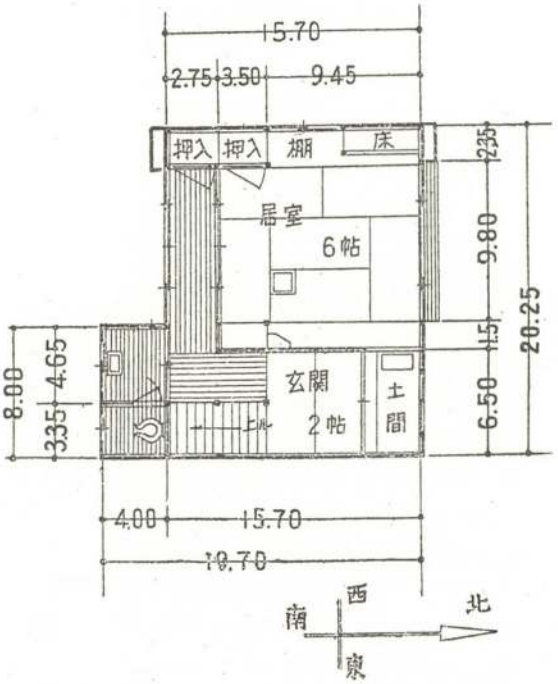
（例　3）

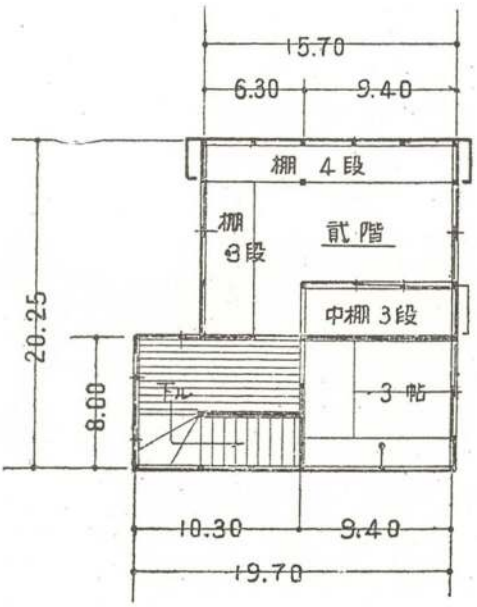
$$家賃(月分)=\left(10124\times\frac{1.14}{100}\right)+\left(4827\times\frac{1.55}{100}\right)+\left(13.6\times300\times\frac{4.2}{100}\times\frac{1}{12}\right)+\left(90\times\frac{1}{12}\right)=212.01$$

これは市内新しき町の紘歌さんざめく狭斜の巷に猫額の敷地を得て貸家を建てた例であります。建築費も内部數寄屋風の爲相當に嵩んでゐます。

家賃の構成が建築費と土地資本に大部分依存してゐますから、本例の如く場所柄、土地の高い所で建築費を相當かけた場合には所謂貸家の家賃としては、法外な値段が出ますが、これは上式の外に再に建物の利用價値と周圍環境への風致上の影響を考慮に入れて規正されることが必要と思ひます。　（17. 11. 16）

（筆者は內外木材工藝株式會社工作部長）





（平　面　圖）

工場建設計畫と防空の諸問題

新海悟郎

序

大東亞戰爭遂行上一にも二にも生產力の擴充が要求されてゐるが、この要求に答へて、工場の新設又は擴張は既に逞しい勢で各地に展開されてゐる。

然しその建設を防空上より觀察すれば尠からざる不安を感ずるのである。

この工場建設計畫は經營上、管理上より爲されるは當然であるが之と共に國土計畫的に、都市計畫的に、建築計畫的に、更に又防空的に爲されねばならぬことは、工場建設者の既に知悉してゐる事柄であらう。然るに實現されつゝある工場は餘り計畫性なく、謂はば一時間に合せ主義のものが相當あるやに窺はれる。

それは建設資材が極度に不足して居る現在に於て、急激に膨張した生產擴充の要求に答へるための拙速對策であらうが。然し戰爭が短期間に終了するといふ見通しに於ては止むを得ないとするも既に長期戰的樣相を瞭然と示し始めた今日では、長期間に亘り戰時下に於ける生產力の確保を目途として、工場建設計畫を行はねばならぬことは贅言を要すまい。

既に敵國は虎視耽々として、我が生產機關の破壞を狙つてゐる。4月18日の空襲は、被害こそ問題ではなかつたが、敵國の企圖の現れとして、このことを實證したものであつて、長期戰の段階に入ればかうした生產機關への空襲は益々執拗に繰返へされるであらうことは既に今日の常識である。

從つて工場は防空態勢を十分整へて、生產に邁進せねばならず、特に新に建設されるものは、計畫の當初より防空を織り込み、執拗なる空襲に際會しても、いさゝかも生產力の低下を招くことのないやう、十分なる計畫を立てねばならない。

從來工場の防空對策は兎角生產能率の低下を來すの誹を受けて來た。それは當初の計畫に防空を織り込まず、完成した後、始めて防空施設を施すから、工場生產上からは全然餘分なものであるばかりでなく、却つて生產に惡影響を與へることゝなつたのである。

然し工場建設計畫に防空を織り込んでかゝり工場施設に防空を融け込ますならば、生產能率に惡影響を及ぼすことはないであらう。よしんば之れがため固定資本の增大を招き、作業能率に幾分の低下を來すとしても、戰爭終了迄の長期間を對象とし、その間少くとも1回空襲を受けるものとの計算で算盤を彈くならば十二分に採算が取れることは誰しも否定の出來ぬ事實である。

この分り切つた事實が顧られずに、舊態依然として、古い型の工場建設が行はれてゐることは洵に寒心に耐えない。

工場建設計畫上の防空的要件

扨て然らば、工場建設計畫は、防空上如何なることが要求されるであらうか。

先づ第一の要件は、空襲を受ける惧のある地域を避けて、立地することである。

空襲は爆擊効果大なる地區を選んで行はれるであらうことは十分豫想される。それは政治中樞機關、軍事施設、生產機關、生產源施設、交通の要衝、通信中樞機關等々の所在する地區であり、之等が集在する地區程、空襲効率大なる地區と言へるのであつて、こうした地區は大東亞戰爭の經過中、何れの日にか空襲を受ける運命にあると覺悟せねばならず、從つて新設工場は、假令經營上難點があつても、空襲効率低き地區に立地せねばならぬことは申す迄もないことである。既に政府は防空法を改正し、防空重要地域に於て工場規制を

行ひ、この施策を遂行しつゝあることは周知の通りである。

第二の要件は、工場規模の適正なることである。

一工場が何十萬坪、何百萬坪を占め、その生産高が全國の同一業種工業の生産高の何十パーセントに該當するといふやうな過大なものは、それ自體が十分空襲効率大なる地區を構成するため、假令既成の危險地域より逃避しても、空襲を逃避することが出來なくなることは自明である。

從つて工場の建設に當つては防空、勞務管理、經營の三方面より見たる適正な規模に止めることが肝要である。

第三は、上空よりの認知を困難ならしめ得るやう、敷地の所在、輪廓、建築物の配置、形態、色彩等に僞裝的考慮を拂ふことである。

之は甚だしく消極的な方策であるが、この手段により空襲を避け得た事實を數多く知る今日、最早輕視すべき性質のものではない。

第四は、一部の破壞に依る影響が全工場に波及せぬ樣、作業工程及運轉、並に動力の施設を考慮し、工場機能の强化を圖ることである。

心臟の停止、動脈の破損により全機能の停止することのない樣、所謂不死身の態勢を整へ置くことの必要であることは申す迄もない。

第五は、不幸爆撃を受けた場合、之に依る被害を輕減或は局限するため、建物その他施設の分散疎開の配置を採り、その構造の强化を圖ることである。

最後の要件として、第六は、戰時生産力の完全なる維持を目途とし、工場自體に於て遺憾なく、防護の目的を達成し得る計畫の下に、防空施設を整備することである。

以上六つの防空上の要件に就き、些か所見を述べることゝする。

工場立地上の問題

防空上より見た我が國工業の最大缺點は、その畸形的配備にある。

それは重要工場の大都市への偏在である。即ち戰爭目的達成上中樞となるべき金屬、機械器具、化學工業がその大半の工場を大都市に集在せしめてゐる。

この政治、經濟、文化の中樞機關と重要生産機關とが雜居してゐるといふ事實は、不幸この地區に空襲による破壞を被れば、戰爭遂行上の機能が完全に喪失されることを意味するものである。

その代表的なものが京濱、阪神、中京、北九州等の工業地帶を中心とする地域であつて、これ等の地域に重要工場の集在する傾向は最近加速度的に顯著となり、この儘では防空は益々困難となるのみならず、生産擴充にも非能率的結果を招くことゝなるのである。

かくの如く危險極りなき我が工業の地理的配備を是正しない限り、我國の工場防空は永遠にその目的を達成し得ないと斷定しても決して過言ではないであらう。

即ち工場防空の根幹をなすものは工場の地方的分散配備であると言へる。

この工場の正しい立地に關する問題は國家經濟上は勿論、防空上より最重要なる課題である。

從來工業立地は自由主義經濟に立脚し、個別資本の收益性を主たる對象として行はれたのであるが、今日ではかうした考へ方は到底許されず、大東亞戰爭完遂を目途とし、國としての工業の生産性を高める樣、その立地は綜合的組織的に考へることが要請されてゐるのである。

即ち、工場は生産に必要なる自然的、交通的條件を滿し、物的人的生産要素を獲得し、生産能率を十分に發揮し得る土地に立地すべきであることは勿論、之に加へて軍事的且つ防空的に十分なる地方的分散をして立地すべきである。

然し之により個別資本的には工業資本の利潤が直接には低下する場合もあるであらうが、適正なる工業配備を行へば、國全體としての工業生産量は增大し得るものと考へられるから、之に依つて生ずる個別資本の利潤の低下は保償し得るやうな國家經濟機構が要請されやう。

この適正なる工業の地方分散配備は綜合的見地に基いた計畫の下に行はれなければ圓滑に運び得ない。即ち交通、通信、動力、原料、勞働力、食糧、敎育文化、厚生衞生等が高度の綜合計畫の下にその集中と分散とに關し適正なる按配を見なければならないのである。

この工業の地方分散に關しては本年6月2日の

閣議に於て工業規制地域及び工業建設地域に關する暫定措置を決定し、之により內地に於て工業及び人口の過度に集中してゐる地域に於ける工場の新設、擴張を規制してゐることは周知の通りである。

即ち、その地域は東京、横濱を中心とする地方、名古屋地方、大阪、神戸、京都を中心とする地方、下關、北九州5市を中心とする地方の四大工業地域であつて、この地域內にあつては、一部の例外的場合を除いては、工場の新設は禁止され、その半面急速に生産力擴充を必要とする業種については業種別に工業建設候補地を定めて立地條件の整備を圖らうといふのである。

然しこの措置は國土計畫法或は地方計畫法の制定を俟ち、綜合的計畫の下に行はれなければ、その實施に圓滑を缺く惧のあることは自明であるが、目下の處、防空法、臨時資金調整法農地等管理令等に依つて工場規制は行はれてゐる。

それ故工場が他に先んじて地方的分散立地を行ふことになるので、種々なる困難に遭遇する機會が多いが、戰爭遂行上工業生産力を確保するためには是が非でも爲し遂げねばならぬ課題である。

工場分散の實施は國としての工業生産の安泰を期し得るのみでなく、一會社としても戰時下經營に安全感を期待し得る。それは假令一地區に空襲被害を受けても、他の地區の工場で會社としての所要生産を賄ひ得るであらうから。

又小資本でかゝる分散を爲し得るだけの工場數を持ち得ぬものでは、成るべく企業合同を行ふことにより、安全地區にある工場に今後の擴張を委ね、危險地區にある工場の縮少又は移轉も圖り得やう。

適正なる工場規模

工場の規模は主として經營上の理由により過大となる傾向にある。

即ち、近代工業は大量生産を特徵とする上に、而も最近の傾向として、單獨に一種類の工場を建設する單獨立地ではなく、關聯する數種類の工場を集めて建設する集團立地がより効率的であるとされる故、益々その規模は巨大なものとなり、その敷地だけに就いて見ても何萬坪否何十萬坪にも及ぶのが普通であつて、甚だしいものになれば、實に 100萬坪を遙に超過して居るものすら相當にある。

又現下の急激なる事業擴張に際しても、敷地內空地、或は豫め用意した隣接敷地へ擴張するのが普通であつて、別の土地へ工場建設を行ふことは、敷地內に建物增築の餘地なく、且つ隣接敷地を獲得し得ない特別の場合に過ぎない。それは既設工場の物及人の容易なる融通により、生産機能を急速に發揮し得るための結果である。

爲に過大なる工場はいやが上にも過大となるのであつて、この傾向は國の全生産の何十パーセントかを一ケ所の工場に委す工業をすら生ぜしめる結果を招くに至つてゐる。

かうした過大工場は主として金屬、機械、化學工業等の軍需品を直接生産する最重要工場に多く例を見るが、之等に一度空襲を想像した際、そこに當然生ずべき國の生産力に及ぼす影響の餘りにも大なるを否定する理には行かない。

茲に工場建設に當り適正なる規模に止めることが防空上重要なる問題となる。

工場の適正規模は製鐵工場では月産何噸の規模、飛行機工場では何臺の規模といふ風に、各業種別に定むるべきもので、一律に敷地面積、建築面積、原動機馬力數のみによつて、制限すべきものでないことは明であつて、之を決定すべき第一要件は國土計畫的に考へ、或る業種の工業に就いては一ケ所に國の全生産の何パーセント迄を委し得るかに依るものであることは申す迄もない。然し工業の種類に依つては、その許容生産高の規模でも、尙防空上は固より工場管理上も不合理な場合があるのであつて、經營上、管理上より見て許され得る最小限規模を檢討し、適正なる規模を得るやう努むべきである。

それには既存工場の生産體系をよく檢討して見ることである。即ち既存工場の生産工程が如何に分離されるかを吟味し、それにより一應生産工程の整理を行つて見、その結果工場生産側からのみ見て成立し得る最小單位を決定する。それを經營上から檢討して何單位集めるならば經營可能であるか、その最小限規模を考へ、又同時に勞務管理上からは何の程度の規模が合理的であるかを檢討

し、更に之に防空上の檢討を加へて適正規模を見出さねばならない。

然し業種によつては大規模なものが要求される場合もあるであらうが、その場合には經營上は一工場であつても、作業工程別に十分離隔して建設する等の方策を講じ、防空的強化を圖らねばならない。かゝる場合現在の事務管理を以つてしては尠からず支障を來す惧は十分認められるが、防空上工場形態に大變革を要請される以上、工場の人的機構に改變を生ずることも亦止むを得ないであらう。

僞裝的考慮

從來重要工場は主として港灣地區、河川の流域、埋立地といつた最も着目され易い場所に所在し、而も規模は大きく、建物の配列は整然として居り、尙且つ白色のスレートで仕上げられてゐると言つたのが常であるから、10粁はおろか20粁否30粁以上の遠方からでも容易に發見されるものが相當にあり明瞭なる爆撃目標となる。

かうした既設工場の發見を困難にする方法、即ち僞裝は過大工場に就いても一應の効果は期待し得るが、所詮姑息な恨は免れない。

然し新設に際して、敷地の選定、建物の配列、土地の利用等設計の當初より僞裝的考慮を拂ふならば、建物の迷彩、植樹等の手段により、僞裝の効果は十二分に期待することが出來る。

即ち工場建設計畫上僞裝的考慮を拂ふ必要のある事柄は、先づ第一に上空より着目され易い場所に敷地を選定しないことである。既述の如く、港灣地區、河川の流域、埋立地等水と接する場所、特に水と界する線の人工的な運河沿、埋立地等が最も着目され易い場所であることは一度上空より觀察した經驗のある者の等しく印象づけられる點である。

然し重工業の工場にあつては、原料、製品の運輸上、海、川、運河等と絶緣することの不可能なものゝあることは申す迄もないが、かゝる場合は海岸線、川沿の特異な場所を避けるとか、埋立地の形態を考慮するとかして、僞裝的考慮を拂ふならば、着目性は著しく低下し得るものと思はれる。

第二は地形を十分利用すべき事である。

從來の工場建設を見るに一般に地形の利用を全然考慮してゐないといふ誹は免れない。即ち從來は工場敷地の境界線を繩張りし、その內にある土地の起伏を均らし、樹木はきれいに伐採し、池沼は埋立し、線の自然の地形內に四角に均らした赤土の敷地を設け、然る後に工場建物をいとも整然と建て並べるのが常である。かくすることはあたかも敵機に所在を明示するやうなものである。

土地の起伏を均らし、樹木を伐採しなくとも工場建物は建ち、工場生産は可能なのであるから、建物、道路の部分丈け樹木を伐採し、土地を均らして行くならば、自然の地形の中に工場建物が融合し、工場の所在を不明瞭となし得るのである。工場が建設されてから植樹しても、短期間には成長せず、植樹僞裝の効果は期待出來ないから、出來得る限り、既存の樹木をその儘殘し、之により工場施設を隱匿するやうにしたいものである。

又敷地の輪廓をはつきりさせないことが肝要である。都會地であれば敷地の輪廓は自ら規則形となるが、田園地、樹林地に設ける時は周圍の形と融合するやうに考慮すべきである。即ち附近の畑の區劃に習つて敷地の外劃を定め、道路は敷地の內外連絡するやうにし、樹木は出來るだけ利用して周圍との融合を計る等である。

第三に考慮すべき點は配置であつて、規則正しき配列を避けることである。

同一設計圖によるかの如き類似の建物を整然と並べるのが從來の工場配置であるが、生産能率の增進は機能的に無駄のない作業配列を得ることにあり、その規則正しき外觀によるものでは決してない。

又規模の大きな工場では數種の小工場の集として誤認されるやうな建物配置も考慮すべきである。作業上或る一定方向に採光面を設けねばならぬものもあらうが、建物の棟の方向を何等問題としない作業場も相當あるのに拘はらず、徒に道路に平行し整然と建物を建てたがる。之は防空上より見れば洵に愚かしい方策である。北向を必要とする作業場のみ東西に棟を通し、他の作業場は之と異る方向に棟を向けるならば、僞裝は甚しく容易となる。作業働線の短縮を圖るやう作業建物間

の出入口の關係を考慮すれば作業能率に左程影響を與へるものでもなく、又建物内に引込線等のある場合であるならば、主道路に棟の方向が斜に交はることにより直角に交はる際に比し輸送關係が却つて能率的となる場合もあることに留意すべきである。

工場機能の强化

既存工場を少しく機能的に診斷するならば、一ケ所の破壞により全工場の作業が停止する惧のある個所の相當あるのに氣がつくであらう。

作業系統より觀れば、例へば流れ作業の工場等で全般的にはその製造工程線が數系統に分れて並行的に配置されてゐても、或る特定の作業場では之が一つに集つてゐるといふ場合をよく見かけるが、その場所が防空的に見て弱點となることは申す迄もない。

かうした作業個所を有する工場では、何故に作業工程線を一ケ所に集中せねばならぬかを再檢討するの要がある。それは恐らく、機械設備が特種なもので餘分には入手困難であるとか、或る特定の技術者、熟練工の手を經なければならぬ作業であるとか、又は數系統に分離することにより施設、勞動力が增大して經營上不利であるとか、種々なる理由があるではあらうが、若し作業上分離し得るものは分離し、原料より製品に到る迄、多班式製造工程を得られるならば、機能的に著しく强化し得る。この點に留意して、建設計畫を立てるべきであつて、現存工場の型式をその儘踏襲すべきではなからう。

次に動力供給施設を觀ても同樣であつて、既存工場の大半は一個所の受電室、汽罐室等に依存して居り、而もその建物の構造は木造か鐵骨スレート張の樣な爆彈に對しては全然無防禦な構造であり、その動力の供給も一系路に依存してゐる。爲に工場が一度爆擊されるならば、動力供給施設の何れかの部分が破壞され、それにより工場の全機能が直に完全に停止されることは明瞭である。

從つて今後の工場建設に當つては、この弱點を除去するため、發電室、受電室、變電室、汽罐室ポンプ室その他工場の要部は數ケ所に分散して配置し、その全供給能力に餘裕を持たしめると共に、供給系路を網目式に連絡を保たしめて、一施設の破壞に依る影響を重要作業場に波及させぬやうにすべきであり、その施設の受持つ供給能力及び復舊の難易等による重要度に應じ、その防護の程度に高低をつけ、それに要する資材の節約に留意すべきであらう。

かうした工場の要部に對し、防空建築規則は耐彈構造となすことを要求してゐるが、その耐彈構造の程度も施設の重要度に應じて定むべきである。

次に又工場敷地内の輸送施設に就て觀るに、その輸送系路が相當繁雜したものがあり、夜間作業では明るい照明の下に於て始めて作業の圓滑を期待し得るものが多い。かうした缺陷は數次に亘り擴張を行つた工場に多く例を見る。而るに戰時下の今日では、夜間燈火管制の暗い照明の下に作業を行はねばならない機會が多いので、輸送施設が繁雜であつては燈火管制により著しく作業能率は低下せしめられるのも當然である。從つて建設計畫に當つては軌道、通路等の敷設を簡明に行ふべきである。

疎開配置

敷地内に於ける建物配置を考へる場合、第一に考へねばならぬことは疎開である。建物その他施設を疎開することは避爆上からも防火上からも必要な條件であつて、防空の原則である。

疎開することは直に平時作業能率を著しく低下するかの如く考へる向もあるが、それは餘り計畫性なく時の要求に應じ、その都度擴張された現存工場を對象とし考へるならば、生産體系が不整頓のため、作業の能率が低下するのであつて、作業工程が整理されるならば、工程單位毎に離隔しても、一つの一貫せる作業の工程に於て無駄なき動線配置を得ることにより、左程作業能率に影響を受けることはない筈である。又よしんば疎開することによつて平時作業能率の幾分低下する場合があつても、軍需品工場の如き重要工場の主たる役目が戰時にあることを思ふならば、戰時作業能率を十分に發揮し得るやう施設の配備を行はねばならぬのも亦當然であらう。

この意味から、工場建物は作業工程單位毎に相

當離隔して配置し、その單位內の建物にあつても對向する建物の軒高の合計以上の間隔をとつて疎開せしめると共に、隣地への影響を考へ隣地境界線より防火上有効な距離をとることが必要となる。

その結果全體として敷地內の空地割合は勿論工場の規模業種により一樣ではないが少くとも敷地面積の7割以上が必要であらう。

又動力源關係施設、危險物貯藏施設の他の作業場より隔離することの必要であることは多言を要しない。從來汽罐室等の動力源關係の施設が動力供給過程に於ける損耗を考慮し、工場建物配置の中央に位置するもの〻多きを見るが、かうした所謂工場自體の心臟部とも謂ふべき汽罐室、發變電室等の施設は成るべく他の工場建物とは隔離し同時に災害を被ることのないやう數ケ所に分散して配置し、又危險物貯藏施設の如く、その破壞に依り廣範なる周圍に危害を波及する惧のあるものは、一般建物より十分隔離する等の注意が拂はる可きである。この危險物施設の配置に就ては防空法第5條の4並に防空施行規則第1條により統制されてゐることは周知の通りである。

次に工員住居と工場との關係位置に付いても一應防空的に考慮すべきである。一旦空襲されるならば交通機關の破壞等に依り當然交通障碍を蒙るものと考へねばならないので、かゝる場合は徒歩で工場へ通勤出來るやう成るべく工場に近く位置することが望ましいのであるが、工場が爆撃される場合を考へるならば工場に近接して設けることは、その家族迄も運命を共にすることになる。この徒歩通勤の可能と爆撃危險の回避との兩者の要求を滿すならば約1粁程度距ることが適當と考へられる。その配置も一ケ所に集團せず地形を十分に利用して、不規則な外觀を呈するやう配列すべきことの必要であることは申す迄もない。

作業場建物の防空

1.建物の規模

作業場建物の防空上先づ第一に考へるべき事はその規模をどの程度にするかといふことであらう。

規模大なる作業場は被彈危險率は大きく、一發の命中彈により作業場全面に危害を受けるし、防火上も不利であり、又有効なる僞裝の實施も仲々至難であること等の防空上の不利な點を思ひ合はするならば、當然作業場建物は防空上努めてその建築面積を小にすべきであると言ひ得る。

然るに現狀は之に反し、作業場建物の規模は過大となりつゝあり、この傾向は機械工場、特に航空機の組立て工場等に顯著であつて一建物で1萬坪、2萬坪といふ巨大なものが建てられてゐる。この種の建物は製品の變化に伴ふ融通性を必要とすることは明であるが、その融通性は主として柱間により拘束されることを思ふ時、この作業場建物の規模に就いて再吟味が爲されて然る可きであらう。

2.平　　面

平面に就いては先づ中庭を持つた閉鎖型のものを避けることである。それは申す迄もなく爆破効力の增大、ガス逸散の遲延、消火の至難等の理由によるものであるから、閉鎖型の□の字型より⊐、⊏、|の字型の順に開放型がよい理であつて、このことは建物の配列に關しても言へる事柄である。

又貴重な機械設備を收藏する建物は防彈効力ある間仕切壁で細かく區劃し、命中彈を受けた際被害が建物全般に波及することを避けるべきである。然し多くの場合間仕切は作業上禁物とされるから、平時から恒久的なものを設備することの不可能な場合が多いが、戰時に防護壁で臨時に區劃し得るやう、機械配置の間隔を廣くし、通路、出入口の配置及び運搬設備を考慮して置くとか、又は同一建物內に並行式作業をなす場合は各作業系統毎に防護壁で區劃し得るやうその間隔を大きくとつておく等の考慮が必要である。

3.建 物 の 形 態

廣大な連續屋根面を必要とする場合には上空より一建物として認知し難いやう屋根形態に變化を與へるとか、長大な建物は軒高、屋根高等に變化を與へ、或は頂屋、塔狀物を附加して全長の分割を圖るとか、又は重要な施設で特異な形態を有するものは屋外に露出するを避け周圍の建物と類似の屋蓋を設くる等の僞裝的措置を必要とするであらう。

4.構　　造

建物の構造は原則として耐火構造となし、特に重要なものは一歩進んで命中彈に對しても或る程度安全な耐彈構造としたいものではあるが、それに要する資材の不足してゐる今日一般的には到底望めないことである。然し重要性の特に高い建物には構造の強化を圖らなければ、空襲を被つた際生産の維持は到底保證し得ない。

現在建設される建物の大半は木造であるが、木造には木造の防空があるのであつて、木造だから少しばかりの施設を施しても仕方がないと放棄すべきではない。防空建築規則は本年改正され、木造建物の防火構造も强化されてゐるから、規則の適用地以外に建設されるものも少くともこの防火構造となし、空襲火災の局限を圖ると共に、平時に於ける工場災害の頻發する原因を除却して、貴重なる生産資源を擁護すべきであらう。

又木造、鐵骨造等の耐彈効力なき一般建物でも外部に落下した爆彈の破片爆風に對し、作業場内の器械、工員を防護するだけの構造にはしたいものである。それには建物の腰壁を鐵筋コンクリート、煉瓦等の材料を以て破片防止上有効なる厚に造り上げ、その高を 1.20～1.50m 程床面より上げて置けば、爆彈炸裂による彈片破片の作業面に及ぼす直接の危害は免かれる。又屋根に石綿スレートを葺く場合は裏板を張り、之に防火塗料を塗つて置くとか、側壁はラスモルタル塗にするとかして置けば、在來のスレート一板張の時の様にスレートの碎片の落下によつて作業面が被害を受ける惧はなくなる。

窓に就いて言へば、從來工場建物は作業環境の明朗化を圖る爲、必要以上に窓面積を大と爲した傾向があり、その爲却つて直射光に惱まされてゐる工場さへある。防空上より之を觀れば窓を大とすることは燈火管制上、又防火上不利であることは言ふ迄もないのであつて、作業面の採光に必要な最小限の面積に止める要ありと言へるのである。氣口、排氣口を設け又天窓、鋸屋根の傾斜窓等は燈火管制、僞裝上に難色があるから努めて避けるやうにし、又最近問題になつてゐる敵潜水艦に對する對策として外海に直接面する建物の側面には窓を設けないやうにする考慮も必要である。潜水艦に對する燈火管制は戰爭中毎日繼續するものであるから海側からの採光を度外視し、他の側からの採光で滿足の行くやう設計さるべきであらう。

防空施設

既存工場の防空施設を見るに、工場施設と全然融合してゐないもの丶多いのに氣が付く。それは防空側からのみの必要條件を滿足させることにのみ汲々として、工場生産側からの檢討が不十分であるからである。

從つて防空施設を施せば施す程生産能率が低下するやに考へられ、兎角間に合はせ的なものに脫して了ふ。

だが戰爭は愈々長期戰の相貌を現はして居り、今後何回となく空襲を被るものと覺悟せねばならない。この場合、爆撃により破壞された工場の生産能率が低下することは止むを得ないとしても、空襲の危險信號に依つてすら生産能率に影響を受けるやうでは工場防空の主旨に反する。

防空設設は何處迄も生産能率と結び合はせて計畫すべきものであることを主張したい。それには此處では一般民家に行はれてゐる防空の鵜呑みであつてはならない。工場施設の一部に融け込んだ施設でなければならない。

建物自體の防空施設に就ては既に說明を終つたから、此處では一般的問題に就き意見を述べることゝする。

1.燈火管制

燈火管制は光の秘匿であることは言ふ迄もないが、この光の秘匿中にも工場作業は繼續を要求されるのであつて、唯光を秘匿しただけでは工場の燈火管制成れりとは言へない。

作業し易いやうに秘匿する點に惱がある。この惱の大なるものは火熱、ガス、煙、粉塵等の發生甚しい作業場の燈火管制である。製鐵工場に於ける高爐、平爐、骸炭爐等の作業場、又は機械器具工場に於ける鑄造、鍛造等の作業場が最も著しきものであつて、唯光の秘匿上からのみ上家をかけて隱蔽したり、開口部を隱蔽したりしたのみでは決して目的は達成されない。かくすることによりこの種の作業場は著しく作業環境が不良となるのであつて、換氣が十分に行はれ得るやう、排氣、

吸氣の爲の開口の位置、構造が考究されねばならぬことは申す迄もないが、未だ何れの工場も適切なる解決を得てゐないやうである。又爐體の構造が新しいものと古いものとでは發散する火熱の程度に著しい差異あることよりして爐體の構造に十分注意する必要があり、又かうした熱源の室內配置に就ても通風の妨害とならぬやう考慮せねばならない。

然しかゝる作業場の燈火管制施設の問題は抽象的な言辭を以つてしては解決のつくものでなく、具體的に各工場に於て十分その特異性を考慮の上研究實施すべきである。

唯茲に附言したいことは建物全體の換氣を考へることは勿論必要であるが、特に作業面の換氣通風に解決の行くやう施設すべきことである。その爲に作業面のみの局部換氣を行ふとか、クレーンマン室に特に冷房裝置を施す等の工夫も必要となる。

一般作業場建物にあつても燈火管制は窓の隱蔽を主たる方法とするから、それには窓の面積の小なるをよしとすることは既述の通りであるが、それ以外に柱兩袖、梁下端等には小壁を附し暗幕による隱蔽を便ならしめ、又高所の窓には隱蔽操作に便なる樣足場を設けて置く等の注意が必要である。

又隱蔽材料に就ては從來主として可燃性の暗幕が使用されて來たが、その燃え易いこと及耐久性乏しいこと等より、作業場の種類によつては板戸の類を使用する方がよい場合もあるであらうし、又作業照度を重要視する精密器械の作業場では暗幕の裏に白布を合せることにより、隱蔽によつて却つて室內照度を高め得る場合もあること等を考慮に入れ、作業能率の低下を來さないやう設計を工夫すべきである。

以上は作業場建物に就いての注意であるが工場全般としては工場內の統一管制がなし得るやうに配線を行ふことや、殘置燈の數を增して照度を下すこと等の問題がある。

2.消 防 施 設

火事は水の力に依つて消し止められるのであつて消防水利の充實を圖らねばならぬこと亦多言を要しない。

即ち如何なる場所に出火するとも消火栓並に貯水槽等の水利により水管延長 100m以內を以つて消火し得るやう水利施設を整備する。

消火栓の給水能力を大ならしめるため構內引込管は成るべく二本以上の幹線より送水し大口徑の鐵管を用ひ、且つ配管系統を網目式とする。消火栓は水道に依存することは空襲時斷水する惧の十分あることを考慮し、水道以外の水源に切換へられるやう設備する。又從來河に接した工場の火災に河の水の使用し得なかつた例の多いことより考へ、之に取水の設備を施し自然水利の利用を爲す等水利の充實に努めねばならない。

又工場建物の構造、規模に應じてポンプを充實し、乾燥室は引火性物品取扱室には撒水消火裝置を、油火災その他特殊火災發生の惧ある個所には窒息消火裝置を設くる等消火設備が完備して始めて火事は大事に至る前に消し止めることが出來る。

我が國の工場建物の大半が木造であり、而も之を圍繞して、木造家屋が蝟集する我が木造都市の特異性を考ふるならば、工場防空の主體は防火であると言つて過言でなく、從つて工場建設に當つては消防水利に十二分の計畫を樹てねばならない。

3.待 避 施 設

勞働力補充の極度に窮屈な今日、工場作業に從事する者は一人たりとも失つては翌日からの生產に影響することは自明であり、その防護は十分考慮しなければならない。それには敵機が爆彈を投下しつゝある最も危險な時期に一時安全な場所に待避し敵機去ると同時に飛び出して、工場作業を繼續するとか或は防空作業に從事すべきであつて、之が即ち從業員の防空行爲である。

從つて待避の方式も作業場の特異性に應じ自ら定るものであつて、今日一部に於て實施されてゐる如く、徒に施設にのみこだはる必要はない。立派な待避施設も職場より離れた位置にあつたのでは工場待避の目的に合致せず、之を利用することにより作業能率に著しい影響を受けるのである。作業能率の低下を防止するためには、待避は職場單位毎にその職場附近に待避し職場長の統率の下に行動するのが適切な措置であることは明瞭であ

り、このことより始めて之に適した施設が生れて來る。

即ち各職場に待避場所を構成し得るやう、機械の配置、作業臺、整理棚等の構造及配置、原料、材料、製品の整理方法等を考慮すればよいのであつて、待避施設としての特別の施設を造らなくても用の足る場合が多い。然し作業上地下道、ピット等を造る場合は待避の用に供し得るやう計畫すべきであることは當然である。

次に機械監視員の防護であるが、機械の動いてゐる限りそのメーター等を終始監視せねばならず、而もその機械監視を空襲時と雖へども繼續せねばならない場合があるが、かゝる從業員のためには鋼板、コンクリート、又は土嚢等によつて破片を防止し得る程度の監視所を設けてやらねばならないであらう。

4.迷　彩、植　樹

既述の如く、地形を壞すことなく、建物は不規則な外觀を呈する樣配置し、而も過大な規模のものを避け得たとすれば、工場の僞裝は建物を迷彩することにより容易に完成し得る。

迷彩は餘り近視眼的に考へることなく、工場全體、或は隣接工場ある場合は之をも合せて全體計畫を樹てゝ行ふべきであつて、一個の建物毎に考へるべき性質のものではない。

全體として分割迷彩の効果を狙ふのであるから、規模の大きな建物では分割塗裝が行はれるが、小規模のものは小細工を行ふ必要なく一色で塗裝すればよい。そして總體としての平均明度が周圍の夫に類似せしめるやう塗料の選擇をなすべきであることは申す迄もない。

又着色スレート、日本瓦等を用ひるならば迷彩を要せずに濟む場合が多い。

僞裝の効果をより增大するためには植樹によることであるが、從來の樣な敷地の周圍、構內通路等に規則正しく植樹するのでは、周圍と不調和になり、却つて目立つ場合も考へられるで、その方法は從來の工場綠化の觀念を新にし、周圍の樹木配置と融合するやう植樹せねばならない。

防空建築規則により、その適用都市に建設される工場には必要に應じ、僞裝を命じ得ることになつてゐることは周知の通りであるが、僞裝を必要とする工場は適用都市以外の土地に建設される場合も多いから、少しく規模の大きな工場は總て僞裝實施を計畫に入れねばならない。

5.其　の　他

救護所、防護監視所の施設や防衞活動に必要な防護要員の詰所並にその指揮連絡等の施設が必要であるが詳述することを省略する。

結

以上で、防空上工場建設計畫に當然織り込むべき事項に就て一應の說明を試みたが、その內容は概して抽象的であり、中には防空的缺陷のみを指摘して單に問題を提供したに過ぎない部面もあり、隔靴搔痒の感があるが、本文の企圖する處は、工場建設者は工場建設企畫の當初より防空的觀念を取り入れ、他の要求と防空の要求とを完全に合體せしめて建設計畫を進めるやう、從來の工場建設計畫に變革を要請すると共にその考へ方を指摘する點にあるのであつて、具體的方法については工場建設計畫の直接の企畫者に專門的研究を俟ち、茲に筆を擱くことにする。(17.10.17)

(筆者は內務省防空局企畫課)

70頁より續く

分野ノ一體的協力ニヨラザルベカラズ。依ツテ下記要綱ニ依リ建築各部門ノ既存團體ヲ糾合シ之等ヲ構成員トスル建築聯合協議會ヲ設置シ、以テ建築界全體ノ連絡協力機關タラシムルヲ必要且ツ適切ナル方策ト認メ之ガ實施ヲ提議スルモノトス

記

建築聯合協議會組織要綱

(1)　會　名　建築聯合協議會

(2)　目　的　建築全分野ノ連絡、協力ニヨリ戰爭完遂ト新體制確立ニ必要ナル建築諸問題ノ解決ニ當ルヲ以テ目的トナス

(3)　會　員　建築ニ關スル諸團體ヲ網羅シテ會員トナス

(4)　役　員

會　長　　1名

理　事　　名

各會ハ各々理事　名ヲ選出シ會長理事ノ互選トス

時局下の建築を語る會

（壯年者と若年者の對談會）

出　席　者

壯年者		若年者	
村野　藤吾氏	（村野建築事務所長）	小川　正氏	（竹中工務店設計部）
石川純一郎氏	（竹中工務店　設計部長）	河合喜三郎氏	（安井建築事務所設計部）
安井　武雄氏	（安井建築事務所長）	宇賀　一郎氏	（設計事務所、自營）
竹腰　健造氏	（長谷部、竹腰建築事務所長）	宮田　秀穗氏	（大阪市役所建築部技師）
堀井　啓治氏	（大阪府警察部建築課長）	山口　正氏	（京都市役所營繕部第一技術課技師）
水原　旭氏	（工博、大谷重工業株式會社參與）	中野順次郎氏	（大阪市立都島工業學校建築科長）
藪中　一良氏	（藪中建築事務所長）	吉田　信武氏	（大阪府土木部都市計畫課地方技師）

編輯幹事會幹事長及本會編輯常務	小林　清	同	大下順三郎
本會編輯常務	伊藤和夫	同	錦田直一

時　日　昭和17年11月25日（水）午後5時半より

場　所　大阪市北區土佐堀船町　白蘭

小林――一寸御挨拶を申上げます。本日はかくも賑やかに御參集下さいまして、ありがたうございました。編輯一同を代表して厚く御禮申上げます。

本日の座談會は御案內を差上げておきましたやうに「時局下の建築」について、大いに談じ語つて頂かうと思ふのでありますが、在來の座談會と趣を變へまして、壯年の方々と、われわれ若年の者との對談の形式をとりまして、若い者から先輩各位にいろんな御意見をお伺ひする、また先輩から近頃の若い者は覇氣がないから、もつと希望を大きくもてとか、或は今後、われわれ建築家は如何に進むべきか、こういふ風なことについてお教へいただき、ごく樂な氣持でお話を進めて頂きたいと思ひます。別に司會者も設けず、各位に御意見があれば、口を切つて頂く、むしろ話の亂れ飛び入まじるのを望むでをります。

處で、今日の話題としまして、時局下の建築界を見廻しますと、隨分いろいろとありますが、こゝにお集りの方々は、わが日本建築協會三千の會員を代表して、お集り願つてをるのでありますから、三千の會員の最も要望してをるところ、即ち最も聞きたい最も知りたがつてをる處の話題をとらえて賑やかにお話を進めていたゞきたいと存じます、どうぞ、どなたからでも結構です。お話願ひます。

吉田――若年から皮切りのやうで恐縮ですが、ちよいとお伺ひしたいのです。時局下あらゆるものが國家を中心として進むやうになつてをると考へますが、今迄建築といふものは土木と較べ、他の建設事業と較べてどうも民間のものであつた。民間でやつて來たところに發展性があつたが、土木の方は國家が直接港灣なり、その他種々直接手を下してをる。こういふ時局になると、建築もや

はり土木と同じやうに——同じといふと語弊があるか知りませんが——まあ國家の施設としてやつて行くやうになればいゝんじやないか。

かやうに考へてをります。たとへば大分以前でしたが、防火地區といふのが出來て、圖面も立派に出來たが、その實現は何百年後に完成するか判らないやうです。そういふ場合にも國家が直接手を下してやらないまでも、防火建築に對して補助金をやるとかすれば、非常にいゝじやないかと、都市計畫の上司の方から當局へ建言せられたこともありますが、いろいろの都合で、そのまゝ今日に及んでをります。又今日の住宅問題にしても、これは國民の住宅である。單に個人の住宅ではないといふやうに考へて、漸次國家の手で直營的にやるといゝと思ひます。

尤もこのため住宅營團といふものも出來て、まことに結構ですが、一般に計畫から更に進んで實施の方まで具體的計畫を立てゝ進んで行くといふやうになればよいと思つてゐますが、如何なものでせうか。

安井——ある程度迄國家が指導して行くのがよいでせう。

吉田——もう少し具體的に何とか出來ないものでせうか。

安井——これは文化の問題でね、大體國全體の文化の程度が上らないと駄目だと思ひます。あるものは政府で指導出來るが、おそらく大多數のものは、今迄のやうに民間で住宅は統制された團體でやるのじやないかと思つてをりませう。どうでせう。

吉田——建築行政もどちらかといへば、從來は消極的であつたが、生產力擴充增强上、何とかこういふやうにした方がよいといふ指導的方向を示すやうにしたら如何でせう。

堀井——勿論今のお話のやうに漸次進みつゝあります。唯自ら手を下すのでないのですから、どうしても一朝一夕には行かない點がありませう。

吉田——この儘だと何だ百年河清を待つやうですね。

藪中——どうにもならんようだな。第一度胸がない、ケチなことをやらず、もつとしつかりやれば、おそらく相當なものが出來たんだがね。

最初吉田さんの說明された土木は、國營といふ風でなしに、性質といふものが違ふ。

吉田——しかし建築部門もそういふ線に沿はないと具合が悪いのではないでせうか。

堀井——だんだんそうなつて來る。現に資材の配給を通じ、建築全般に對する企劃性といふものを實行に移してをる。たとへば今日工場建築のために資材といふものが非常に窮屈だが、それを補ふために結局民需といふものを壓縮しなければ、その方に充分廻らない。そのためには今日建築の大部分を占めて居る住宅と工場の內、住宅の單位の限度をぐんと壓縮しなければならないと考へられて居る。勿論それで充分だといふのじやないが戰爭に勝つ爲には已む得ない處でせう。吉田さんの考へてをられるのは、もつと地方の事情にも即した好い設計を、更に都市計畫的な考慮のもとに實行したいといふ御希望のやうに思ふ。

勿論それを實現するために、どういふ方向の下に進むか、こりや一つの大きな課題で、企畫院あたりには建築界から誰も入つてゐない、これは建築が生產工業として認められてゐないんじやないか。

山口——吉田さんの御話に關係のある事ですが私は何よりも先づ、現在の日本の建築界全般の構成を改編する必要があると思ひます。施工を擔當する部門、設計監理をする部門、更に建築行政の部門、もう一つ資材に關する部門が、別々に地位と職業的體系を持つてゐて、それが合力して一つの仕事を完成するといふ現在のやり方は、大變無駄が多いのではないでしようか。一つの現場に、施工者側の技術者と、設計者側の技術者とが擔をならべて事務室を持ち、材料業者と配給機構と取締機關とがまた幾分づつ參劃するといふ現狀、これ程人的資源の浪費はなからうと思ひます。私はこういふ人手不足の折には、殊に、誰も彼もが心を一つにして協力、國力涵養のみを念頭においてゐる時代には容易に、この無駄を排除する事が可能であると信じます。即ち、施工、設計、監理、取締、それらを一括して一人の、或ひは單一の機關が、これらの全般を處理執行するといふ方法であります、これは決して不可能事ではない、これを理論的に可能事たらしめるには、全建築家の技

術と良心とを一定の水準にまで昂めればよろしく、これを具體的に策するには、住宅營團の如き完全な機構に、全國の建築機構を合流、全國建築家一人殘らずを包含する建築營團を組織すればよいと考へます。人手不足といひ、資材難と申し、建築界のあらゆる問題は、この建築營團の結成を以つて解決し得るものと私は信じます。自らこの案を誇稱するわけではありませんが、今日の如き世情に於いては、今日突飛と思はれる考も、明日は進歩的なる案となり、明後日には既に現實となつてしまひます。皆さんが拙案に一考を賜はらば大變ありがたく存じます。

吉田——資材がないのですから狭い家になる。これは今のところ已むを得ないと思ふ。そこで將來のために、たとへば敷地をゆつたり取つておいていたゞく。そういふ風な計畫の下にやつてもらつたらどうか。われわれはこういふことを希望してをります。

藪中——今迄もう少し國家といふものが、力の入れ方が足りないのじやないかと思ひます。

吉田——目下厚生省の御方針では、大體勞務者の住宅といふものは彈丸と一緒だ、鐵砲の彈と一緒だ。そういふやうに考へて御計畫になつてをる。相當力は入れてをられるんじやないかと考へますが。（笑聲）

一同——考へ方が違ふんだ、もともとわれわれが考へてをつた住宅とはどうあるべきかといふ考へ方が違ふ。

宮田——不良住宅の改善なんか、大阪ではないのでせうか。先年大阪市におきまして不良住宅の改善をやつてをりました。大正の末から昭和6,7年にかけまして、非常にスラム街がたくさん出來その對策として不良住宅改善に關する法律が出まして、それに準據して、その頃相當建設されました。

堀井——量の點では今の營團でやつてをるのは極く小さなものだと思ふが、その點で相當の人が營團さへ住宅を作つてゆけば、住宅問題は解決するといふやうに考へてをられる人が大部ある。今日の處、矢張住宅問題の根幹は、借家建築にありそこに又色々な困難があると思ふ、只今問題にされて居るのは營團の住宅の質の點であると思ひますが、その借家建築に及す影響は非常なもので、我々の特に心配をして居る處です。

吉田——何しろ5ケ年に80萬戸といふことになつてをりますからね。

宮田——營利といふのが今までの經濟組織だから、一般にこの組織を基礎においての營利でせうから、國家がこれをやれば營利を度外視してやるだろうと思ひます。

藪中——4分7厘がどこから出るといふ話がある、今までの公債や郵便貯金の貸付の利息の範圍それだけのものを住宅營團からとらなければならんのか、そういふ利息を國家が補給したらどうかと思ふ。

吉田——住宅營團は儲けることはいらんが、結局損はしていけないといふのが原則で、つまり國家の資金でもつて、もつとこれを補ふところまでやつてゆかなければならないと思ふが、今のところそれは出來ないでせう。

堀井——段々とよいものも出來てくるでせう、今の處過渡期としてどうしやうもない、營團の人だつて決してあれでいゝとは思つてゐない、どなたか營團に働いてをる御苦心を陳べる方がないかね。（笑聲）

河合——私は營團の者ではありませんが、營團には可成優秀な技術家も澤山居られるので、一概にあれを見て、之に惡評を與へるのは當つてゐないと思ひます、恐らく營團に居られるそうした方々も、大いに不滿を持ちつゝも、今の場合あゝしたものしか實現出來ない處に、その苦衷を察すべきで、私はむしろ當局の技術家に同情してゐます。要はその上に立つ爲政者の考が間違つてゐるので、只單に早く間に合ひさへすればでは住つた人が、その中にあつて、ほんとに明日への勞働に必要な活力が培れ得るかどうか疑問だと考へます、爲政者がもつと目を見ひらひてくれる事を望むと同時に、技術家がその上に立つ爲政者を說きつけ、說伏させるだけの覇氣と手腕を持つてくれる事を切望します。技術家が事務家に顧使されてゐた時代は既に去り、世は擧げて技術家參政の時代になりつゝある時ですから、建築家もこの際奮

から抜け出でて、大いにその方面の手腕も發揮して頂き度いものと考へます。

小川——大衆にその營團の意途を正しく解るやうにしてやる必要がある、兎に角この戰時下要請されたあらゆる最低規準をかく表現して、住の問題の解決に努力して居ると云ふ様に、建築家でも判然しないのだから、一般大衆にこれが誤解をうけるのも無理はない、これらを正しく指導する意味でも、現在はこういふ狀態であるから、これは止むを得ないんだとすべてを發表してやれば、この誤解は緩和されるんぢやないかと思ひます。

藪中——これは厚生省あたりがはつきり云ふべきであらう。

安井——實際も少しなんとか知らしてやるべきでせうな。

村野——發表だけでは解決しようもないと思ふそれを實際の上にあらはさないと駄目だ。

小川——一般大衆にあれに住ふところの心構へといふものを敎込むことです、これは住居環境の不備を非常に救ふ事になるのでないでせうか、

宇賀——今の住宅營團の住宅をその施工振りからいふと、これは應急住宅に入りさうだ、又應急住宅ならば、やり様によつては、もつと厚生的なものに出來るのでないかと思ふ。

村野——買つた人はどうなるか、買つて廿年もかゝつて返濟する時分にはいたんでをる、經濟的にいつたら、あのくらゐ長い年月の負擔を背負つて行くのであるから、あの程度のものなら何も營團や當局を煩はすほどのものじやないと思ふがね。

堀井——もつと立派なものが出來ますよ。

宇賀——營團の仕事として、あれ以上のものが出來ないのは何んとしても淋しい。

村野——あゝいふ組織をやつたのが問題ぢやないですか、あゝいふ組織がなくても出來ると思ふ建物の經濟價値でも……

堀井——營團の仕事と云ふものは、あれが一種の社會標準になつて、非常な影響を與へてをる、みんなの目があれにそゝがれ、あゝいふ建築が今日國家の標準なのだと云ふ風にさへ考へる様になると思ふ。

錦田——惡いといつても、それは營團の量を云ふのではなく、質の問題ですが、なるほど材料施工その他は非常に惡い、これは營團のものも認めてをります、しかし大阪に建つてゐる借家建築に較べると、厚生的な意味から、日照とか通風その他から見て、決して惡いものではない、だから營團以外にあれ位のプランをもつて、あれ位の空地をもつたものが、どんどん出來るならば、それはたしかに結構なことゝ思ふ、しかし現在の狀態では國家の非常な力をもつて强制しない限り一寸望みがない。それが出來なければ、今のところ營團以外には出來るものではないと思ひます、さつき小川さんがいはれたやうに發表しないからいけなのです。

中野——勿論そうです、もつと對象も知らせてやるのがよい、そうすれば自然に希望なりがでてきます、先達私共の學校へ送つていたゞいた圖面を見ますと、あれはなかなかよいものですが、あの圖面をどこで實施してゐるのかわからない、建物の施工とか、或は組立工作とか、その方の能率に重點を置いてゐるのか、どうも研究の對象にしてをるものがよくわからない、今さしあたりは細かいのをやつてをるが、將來もそうなのかどうか見當がつかない。

小川——研究部の方も住居の型式、住ひ方、規格統一、技能者養成などを取上げて居るやうですが、結局當面の問題は、やはり時期の問題ですから、それらと並行して現れてゐないと思ひます。

中野——研究部といふものが他にもあるのか、それとも本部にだけしかないのですか。

錦田——研究の方は本部にだけしかないとか聞いてをります。

一同——その必要がないのじやないかね。（笑聲）

村野——私は當面の住宅問題は厚生的にやるといつても不良なものでは仕方がない、それでは經濟的意味をなさない、グレツシヤムの方則通り惡貨ばかりだと良貨をどんどん驅逐してしまふ、地價は下つてしまふ、それでは全く意味をなさない

あるひは厚生的にも少くするのが本當じやないか住宅自身が惡いのか、あるひは法律的にやれないのじやないか。

吉田——市街地建築物法を適用すると、住居地域内では四割の空地が標準となつてしまふやうです。

村野——そういふやうに取過ぎると、あるひは收益率は上るやうですけれども、それは惡貨ばかり集つて良貨は驅逐されてしまふ、地價は下る

一同——營團のことばかり出るが、いゝ話が出ない、惡いことばかりだ、この邊でやめたら。（笑聲）

安井——少し横道に這入りますと思ひますが、私は中西六郎さんなどといつしよに只今大阪府大政翼贊會の生活指導委員を委囑されてをりますが何か指導方針を示してもらひたいといふ翼贊會からの注文ですが、何かいゝお考へがありましたら伺ひたいと思ひます。

堀井——それは結構ですね、ぜひ一つ伺ひたいですね。

吉田——住宅の設計の方針とか、どういふやうに指導して行くとかいふ風に。

村野——いま民間の方でも、それはハツキリしないのじやないでせうか、これを規定するといふことは、今の經濟觀念では經濟の利潤追求でもつて考へるから決しないのじやないか、民間では結局出來ない、あるひは住宅營團は國家がやるといふことが起るだらうか、私はこれは保險會社あたりがこれをやつたらどうかと思ひます、住宅組合をそうでないと解決しない。

竹腰——住居の建築は大體に於て、國民の風俗習慣について行くものだ、建築家ひとりきばつて見ても、生活樣式を作りかへる事は困難だらう、これが國家がこう云ふ生活樣式にしろとハツキリ定める事でも出來れば、建築家の行く道も明かになる、そうでないと建築家が、ヤイヤイいつてみたところで何にもならぬ、この邊で方向轉換でもしたらどうです。

小川——今の狀態では建築物が建築家の手を離れると、直接にもう一般大衆に移つてしまふ。そうすると、たとへ理想に近いところのものを拵へても、それは無條件のまゝに一般大衆に開放されるから、大衆は依然とした舊い考へや習慣や、又全々無關心な心構へで入る。そうすると建築家が設計したせつかくの建物が——建築は人間を指導すると考へますが——それを大衆がそういふ視野が狹い無神經のために、せつかくの環境も壞はされてしまふおそれがありますね。

竹腰——そりやその通りだ。まづ大衆を指導する必要もあるね。

河合——その點で此頃建築家の隨筆集が盛に出て居りますが、一般大衆に建築に親しみを持たせ平易に建築に對する興味と認識を深めさすと云ふ意味で、大へん結構な事だと考へます。關西でもこゝに居られます諸先生方からでも、何かお出しになつては如何でせうか。又隨筆的なもの以外にも、建築關係者向なごくわかり易い技術的な本がもつと出て欲しいですね。

その點、協會で目下計畫中の「建築家必携」の發刊は誠に時宜に適したものと思ひます。

村野——大衆の生活といふものが、建築を指導するといふことになるんぢやないか。それが本筋ぢやないかね。民族を離れて建築なし。

藪中——現在實際にあの價格單位ではあの程度にしか出來ないでせう。

村野——たゞ價格を二つにする。これは大きな問題ですよ。これが現在の大問題です。一つ一つコツコツ建てるのがいゝか、あるひは平面的に建てるのがいゝか。ある程度立體的になる、ある程度材料によるですが。

宇賀——私は之からの生活樣式の見透しと云ひますか、一般社會の現在混沌とした生活樣式に、「ある指導力」が働かねばならないと思ふのです衣、食、住の各部門に於ける指導者たちは、一般社會の成行にまかせないで、機會ある毎に意見をのべて、一歩でも今の「混迷」から日本の生活樣式を拔き上げる樣心掛けるべきだと思ひます。

竹腰——洋服も着、和服も着ると云ふ今日の生活樣式では、生活樣式の指導にもなるまい。

宇賀——勿論、私も洋服も良く、又、夏の浴衣も捨て難いと思つてゐます。現在の樣な過渡期には、當然兩立するものと考へては居ります。たゞ椅子式と座式の生活調和を求めたいと思ふのです。衣食住各面の平衡も問題ですし、我々が當面

する住宅設計に當つて、此兩樣の生活樣式をどう云ふ風に日常生活面に當てはめて考へるべきか、解決とまで行かないでせうが、建築家としての此問題に對する心構へとして、何か具體的な考へはないものでせうか。

竹腰——住宅建築も着物の問題が解決すれば建築家は樂だ。國民服で民衆がみなこれについてくると、建築の問題も解決する。食物でも洋食、支那料理など、いろいろの料理があるやうでは、住居の問題も解決困難だ。今でもパンでなければ生活出來ないやうな人もあるからね。

安井——この間の大政翼贊會の指導委員會で出たのですが、衣の方が先か、食か住か、それがきまらないとまとまらない。

籔中——安井さん、それは住は從ですよ。住は先にならん、住は從だね。（笑聲）

村野——疊にきめるとか、方法をいろいろ考へることがどうかと思ふ。そういふ複雜性があるから日本だ、そこに進步性がある。日本はじまつて以來、そういふ風だから、敎育家でも、おそらくあらゆる宗敎を鵜呑みにしてゐるのが日本だ。

宇賀——活動面がふへて來たのは事實です。その活動面に對して「活動衣服」が增えて來たのも事實です。たゞ殘つてゐるのは今までの座式生活に合理的な和服がどう云ふ生活面に殘こるだらうかゞ問題ですし、建築技術者が指導的な立場に立つて考究し、設計に當つてそれに就ての考へを入れるべきではないでせうか。

竹腰——六ケ敷い問題だね。建築家が或室を洋式にしても、住む人が都合が惡かつたら勝手に變へてしまふからね。

宇賀——そこですよ。その住ひ方を補導する必要があると思ひます。

籔中——ごつちやになつちやいけない。

宇賀——又衣料の方も或る程度考へたいと思ひます。私はせめて洋服だ、和服だと分けて考へることは止めにしたい。ヨーロツパ的な洋服といふ名稱は今日の過渡期に殘つてゐると云ふ程度にして、殊更にこゝでとりあげる必要はないと思ふ。日本の服裝衣料——そのものをとり上げることです。

竹腰——けれどね、和服のごとく安易であつて仕立替へがきいて、そうして洋服のごとく活動するに便なるものが出來るかどうか。これが解決すれば、住宅の問題も自然解決する。だから、そういふ着物をつくることが根本問題だと考へる。まあそのあらはれとして國民服が出來たのだらうがそれも實際その目的を十分に達してゐない。

宇賀——われわれの住宅の原型的規模といふものは結局今營團のプランの上に出てゐる融通性のある疊式、一座式の生活を對象において考るべきでせうか。

竹腰——それだけではいけない。外に出てオフイスで活動する。それにも便利なやうな着物でなければならん。

その色がとゝのつたやうな樣式は想像がつかんでは、建築しても結局五里霧中になる。

竹腰——その時代に即應する要求、世間の一般の要求にあふといふものをつくる。これがたしかに一番みんなの希望にそつてをるのでせう。

吉田——で、住宅營團が現在やつてゐるやうな住宅の樣式がまあいゝのではないかと思ふ。先程錦田さんが云はれたやうに。

宮田——プランはいゝですな。

小林——處がプランを見るとどうして。なるほどこぢんまりまとまつてゐるが、各部屋の獨立性を考へすぎて、みんなてんでんばらばらになつてゐる。これなど歐米流の考へ方だね。我國は家族本位の國だから、我國獨自のものがあつていゝと思ふ。獨立性を尊びすぎて、各室が個立してゐることは、坪數の大きいものほど餘計あらはれてゐる。廊下の部分が多くて、こつちに3疊、あつちに4疊半とはなれてゐる。寢室には或程度獨立性が必要であるが、他の部屋はさういらんと思ふ。もつと在來のわれわれの住宅のよいところをとりいれて、部屋を融通してつかへる樣に考へるといゝと思ふ。

吉田——みな大きな住宅を縮少したやうなかたちがあるね。衞生的にはよいが。

河合——小林さんの云はれた樣に、あれだけの小さな坪數に對して未だ廊下の面積が可成り多くもう少し中廊下を減らしてコンパクトに出來るんぢやないかと思ひます。その點民家の平面に大いに學ぶべき點があると思ひますが。

小林——そうですよ。

安井——私は常に思ふのですが、日本の住宅の平面計畫は歐洲などの諸外國のものが固定的であるのに對して能動的に出來て居ると思ふのです。勿論、是れは住と云ふものに對する根本の理念が違つて居る爲に、斯樣な相異が出來たのだとは思ひますが、確かに是の點は我が國の住の特徵であつて、又他の國のものに比較して勝れて居ると思ひます。斯樣な觀點から見て、私は日本の住と云ふものは世界に冠たるものだと言へる樣に考へるのです。

竹腰——アメリカなどはだんだん日本の食堂などまねるやうになつてきたね。

宮田——私は嘗つて大阪市の不良住宅地帶と云ふべき所をまわつてみて、感じましたことは、建築家が住宅の間取を考るときには、居間とか、茶の間とか、部屋々々の用途から考へてゆきますがあゝいふ小さな家に多人數してゐる住宅においては、間取の良惡を考へる裕長な場合でなく、より多く1人當りの寢室面積をとること、これが根本的に解決出來ないで、寢室面積が狹くて非常に惡い空氣條件の中で住んでゐては、厚生に根本的に反してゐることになります。所謂スラム街は最小限1人當り2疊半あつてほしいのですが、1人當り疊數1疊半の切迫した面積で生活しなければならない一地域もあつたことを記憶しております。だから之等の人達には2疊平均を3疊か3疊半にすることが住宅として厚生的意味を含むので、かうなると、プランの良し惡しより戰時下の勞働力を健全に確保するためには、如何程の占有面積を1人に與へるべきかと云ふ住宅政策の域に這入つて了ひます。

吉田——プランの問題で、住宅營團でもやつてをるが、2階と下と全然住む人が違ふ、入口が二つになるといふ式は、木造構造の場合どうかと思ふ。

伊藤——僕はこういふ風に考へる。今までの住宅に關しては、これは都會も郊外もいつしよに考へてをる。

建築家といふものは、建物そのものだけしか考へないで、大都市との關係を考へてゐない。住む家は都市に建たうと、郊外に建たうと同じやうに庭を持たせやうと考へたら、それは個人的趣味的の考へ方である。それよりも都市に建つ住宅ならば、其の周圍に出來る丈大きな有効空地を取る事を考へなければならない。田舍や郊外に建てるものは施主のお好み建築家の趣味に從つて萬事理想的なものを作るのも良からうが、都市內に建てるものは小兒病的な趣味や習性を多少犧牲にしても先づ都市の建築だといふ事を第一義的に考へなければならない。

吉田——その點はたしかにそうですな。

伊藤——そうなれば都市の住宅としては必然的に集合住宅が考へられ、階上・階下別々の生活と云ふものも止むを得ない事になる。又そういふものをやるための材料は、建築家がもつと努力してなんとかしなければならん。ところがセメントがない、煉瓦がないと云ふと、もう木材でなんとか間にあはせやうといふ方法丈しか考へない。もつと建築家が努力して、單に建物を建てると云ふ丈でなく、之に要る材料も得られるやうに努力するし、又必要ならば生活樣式をかへさせる所まで努力しなければいけないと思ふ。都市生活が必然的なものならば、都市に建つ住宅といふものは、自ら別個のものが出來てくる筈だ。唯金がかゝる、材料がない、一般の趣向に合はないと云つて、在來の郊外や田舍に建つ住宅の類型の改善、改良にばかり專念するから、今の住宅營團のやうな建物になる。

一同——また營團が出だしたね。

小林——住宅營團のお話が出ましたが、あの住宅にいくら小さくても、從來のものと同じやうに臺所や便所が一軒々々出來てゐる。營團の目的の一つに量的解決と云ふことがあるのだから、殊に同じやうな生活程度の人が大勢住んでゐるのだから、共同住宅と云ふ意味で、共同炊事なり共同施設になし得るものを一個所に集約したらどうでせうか。

小川——日本の狹い意味の家族觀念に災されてゐるんですね。さういふことから考へると、共同炊事といふこともなかなかむつかしい事です。

小林——量的に解決ができれば、これからはさうするんですね。それになれさすんですよ。

伊藤——しかし飯を炊くとか、味噌汁をつくる

といふことを共同的にやつて、各自のお菜だけ各戸にやると云ふ風にやれば、日本の住宅の臺所はもつと小さくてもよい。またそこまで行かなければいかんですよ。唯今の人間がさういふことは嫌ひだといふ丈で、之に迎合して行く丈ではいつまでたつても問題は解決しないと思ふ。

宇賀——住宅營團などでさういふ施設を含めて計畫すれば、實行性があるのぢやないでせうか。

村野——船場あたりでは毎日御飯や味噌汁を配給してゐる。だから御飯や味噌汁は、どの家へ行つても同じです。從つて共通の施設のものは、さういふ場所が非常に省ける。

伊藤——例へば外國でもパンを一軒々々焼いてゐたら、臺所が非常に廣くなる。所が之は出來たものを配給して來るのだから、パンを焼く所だけでも狹くていい。

竹腰——しかしさうすると、日本では毎日冷飯ばかり食はなきやならんことになるよ。

村野——そんなことはないですよ。共同でやれば、その度ごとに炊くから、いつも溫い御飯が食べられますよ。

安井——農村では既に早くからやつてゐるでせう。實際上今日では所謂日本在來の家族制度は、だんだん破壞されつゝある情勢にあるにも關らず住居などの計畫が斯樣な實際の世想と云ふものを少しも考慮に容れずに無暗に過去の家族制度に執着してゐる事が根本の誤りぢやないかと思ひます。

小川——その點、今が一番よく目立つ時だと思ひます。しかもその在來の家族制度によつて建てられた家々が集つて、隣保を形成してもだへ苦しみつゝ新しい制度へ一歩々々改良に改良を加へられて、やつと運轉出來る狀態になつた所なのです。しかしこの制度がほんの一時のもので、又やがては昔のあの自由な時にと云ふ誤つた考へが未だ一般から去り切らないからです。そこで又先刻の指導の問題も、心構への問題も含まれて來ますが、吾々は住生活の各作業の性格をよく極めて見ると、明らかに共同で處理すべきものと、各家族毎に處理しなければならぬもので、分けられると思ひます。それを完全兩立せしめ、關聯せしめて計畫された共同施設を持つ住區こそがこれからの新しい戰に勝つ爲の精神を持つた、家族制度を創作するのではないかと思ひます。

安井——私の云ふのはさう云つた意味ではないのです。嘗ては我が國では一つの家族と云ふものが、一つの單位社會機構を形成してゐたのですが產業の發達や社會狀勢の變遷に伴つて、今迄の樣に一家族そのものが一團として社會組織を保つてゆく事が許されなくなつて來て居るので有ります。大體家族制度の成立と云ふものは、其ものが獨立して自給自足する事を得る時に一集團として存立する處に存在の意義が有るので有りまして、今日の樣に一家の人々の生活が離れ離れになつて各自に其生活を保持して行かざるを得ない時には最早昔の樣な家族制度と云ふものは云ふべくして行はれない事情に在る。然かも國家の體制と云ふものが、國家全體の大集團として統制されてゆかなければならない狀勢にあつては欲する欲せざるとに關らず、所謂家族制度と云ふものは、或る程度に破壞されなければ、治さまらないのであります。

斯樣な社會情勢に於て、其住居だけが依然として家族制度に停徊して計畫される事が、其處に種々の點に於て齟齬が生じるのぢやないかと思ふのです。

小川——舊體制を新體制の上に置きかへてゆくのであるから、どうしても家族制度を破壞することになります。しかし今の狀態としては、一般の住生活に對する觀念を家族單位より國家的なものに前進させる型ですから、むしろ發展的な破壞とでも云へませう。

安井——それはどちらでもいゝが、とにかく家だけが家族制度を標準にしてつくられるといふ所に無理があると思ひますね。

村野——總ては臨時措置においての住宅でなければならぬ。さう考へていゝと思ふ。戰爭に勝つためにやるんだといふ結論になる。

安井——現在はさうせざるを得ない狀態でありますね。

村野——しかし20年も30年も買つた人の負擔になるのは問題だと思ひますね。

錦田——それは仕方がないんぢやないですか。いかに20年、30年の負擔があつても、戰爭には戰

たねばならない。戰爭に負けたら20年、30年の負擔どころぢやない。問題にならないですよ。

村野——もちろんその點は理窟を言はずに何事も我慢するといふことにならなければならないがそれ以上に隨分不合理なことがあるから、議論があるわけで、理窟をいへばさういふことになります。さういふ不合理な點をなるべく少くするのが臨時措置であつて、先の先まで見透しをつけるといふことは無理です。

宮田——廣告でみましたので、確かな所から承つたことではないのですが、營團の賣出し價格は40圓から55圓といふ月割で、20年月賦でやるといふことでありましたが、さうすると相當の金額になる。昔よく建賣り屋がやつてゐたのはそれくらゐの價格のものでも、大抵15年くらゐで償却してゐた15年くらゐでつぶれてしまつて、自分の家になつた時は償却してゐるからいゝといふのが住宅會社の政策になつてゐた。さうすると、今の勞務者が45圓乃至55圓の金を20年出すといふことは、それだけの餘裕があるでせうか、又それ迄に家が半つぶれになつては……

堀井——今の勞務者はそれくらゐの餘裕はあるかも知れませんよ。

宮田——京阪の京都に近い所に營團の住宅が建つてゐるが、大阪附近まで出るには、交通費が相當かゝりますが……

小林——營團の住宅の對照は必ずしも勞働者ぢやないよ。勤勞生活者、即ち我々月給取りとあるよ。

宮田——さうすると割合に社會的意義が少くなりますね。

吉田——寢屋川の場合は、別として普通は工場の傍に立つてゐます。

宮田——國から資金を借りて營團がやる以上、社會的にも價値あるやうに、もつと收入の尠いサラリーマンとか、勞働者を標準にしてやらなければ、本當の使命がないといはれても仕方がないですね。

竹腰——それは營團の性格をはつきりさせないから問題になるんだよ。

伊藤——應急的に急場の間に合せるといふ事が第一眼目ならば、二戸建にして一々庭をつけるといふことは疑問だと思ふ、それならばむしろ集合住宅でいゝと思ふね。

村野——政治の貧困だと思ふね。

宮田——大阪の不良住宅改善時代に、集合住宅として中廊下のアパート式のものを初め建てまして、次にアパート式はどうも一家の家族が住む住宅として具合が惡るからうといふので、各自獨立性をもたせて、上は上、下は下といふ具合に、二階への一つの階段先を上ると、右、左二軒の玄關があるものを造りました。所が長廊下式の所謂アパート式の住宅の方がうんと人氣がよいのです。住んでみると、長廊下式の方が人數も多く住めるし、殊に住む人々の意見でも好評なのです、さういふ點において生じるか、妙な無理をした獨立家屋より長廊下式の方が成績がいゝと思ひます。

安井——ある程度集めた方がよいと思ふ。30年程前に社宅をやつたことがあるが、入口も一つにして二階も二軒、三軒が階段を一緒に使つてみると、馴れゝばなんでもなくなる。

竹腰——さういふのが滿洲にありますね、しかしあちらは煉瓦だからいゝが、日本は開けつ放しだから困る點もありますよ。

安井——さういふ點はあるが、馴れゝばなんともなくなる。

宮田——營團の住宅は相當菜園らしいものがついてゐますが、あまり使はれてゐない、使つてゐる家は、一ぱいに使つてゐるが、忙しい勞働者の家族はさういふ閑がない、さういふことを考へますと、一々菜園を區別するよりも、休閑地のやうに一ケ所に集めるか、住宅の裏にベルト式に連續して隣組が協同して耕やせるやうにしてはどうでせうか、そうすると隣組の協力精神も自然養はれて……

河合——そうです、理想を云へばあの燒板の塀や、竹の柵などもむしろ無い方が見た目にもよく開放的であり、それだけ經費の節減にもなると思ひますが、未だそこまで一般の要求が共同的になり得ない狹い敷がくつついてゐるのは歎はしい次第ですね。未だ粗末乍らも一軒の構へと云ふ心念から拔け切れないのでせう、從つて連續長屋式住居を嫌ふ人が割合多いのも、そうした古い心念からの現れの一つだと思ひます。

小林——村野さん、大東亜記念營造物の懸賞設計の審査に關係されましたが、應募作品を御覽になつてどう云ふ風にお感じになりましたか、それらを通じて、これから共榮圈内でいろいろの建設をやることになるのでせうか、それらの指導理念と云ひますか、我々建築家の建設方針とでも云ふことについてお伺ひしたいと思ひます。

村野——實はそのことについて學會から10月一ぱいの期限で、原稿30枚ほど書けといはれたが、少し身邊多忙で斷つたのですがね。これは非常に六ケしいが、私としてはこれは別に急ぐ必要はないと思つてゐます。私もどういふ指導方針によつてやつて行くかといふことについて、我々が考へる必要があらうと思つて、最近いろいろジヤーナリズムの方も氣をつけてみてゐるが、私はその他一般技術方面でも急ぐ必要はないと思ふ。只私が應募作品について氣がついたことは、まだ昔のやうな行き方をしてゐるのが大多數であつた、大部分がさうだ。その中で一等當選の榮には大多數の審査員が賛成した非常に感心しました。指導理念といふことについて、この作品が今後行くべきある徑の方向を示すのではないかと思ふ。そして總ての方面が日本的なものになりはしないかと思ふ。一等當選の作品も多分さういつた意味において出來てゐるのではないかと思ふ。そして今自分の描いてゐる指導理念は建築の形の上の大きな岐れ方の一つではないか、もちろん構造法の關係、資材の關係についても、それが言へると思ふ、その點一等當選のものにはそれがよく現はれてゐる。これが私の一つの考へであり、審査した上で私の頭に殘つてゐる印象の一部でありますが、これで多分お尋ねの中のある方面をお答へするのではないかと思ひます。一等當選作品は今度ばかりでなく、最近の懸賞募集作品の中でも、いろいろのレベルからいつても、非常に高いと思ひます。

河合——學會の懸賞のお話が出ましたが、最近の一般懸賞應募案の中にも、未だにコルビジエー式のエレベーションがチヨクチヨク見受けられますが、もうさう何時迄もコルビジエーの時代ではないと思ひますが。勿論コル氏の平面、構造、都市計劃案、製圖及びスケツチの描出法等、劃紀的アイデイアには大いに啓發され、その非凡なる計劃案は今日も尙時代をリードしてゐるものと考へますが、外觀スタイルの問題では、我々日本人には、もつと良い或ものを持つてゐる筈だと思ひ、又それを生み出さなければならない、いや生まなければ相濟まない時代に今なつてゐると考へます、そしてこの頃我々の期待してゐるものが、少しづゝ出かゝつてゐる樣に見受けられるのですが。

村野——そうです、今度の懸賞にも大分コルビジエー式のものがありましたが、私は入選には入れなかつた。

村野——それから私はさういふ形でなく、もう少しマツスグな形になるが、國家主義的な形を現はしたのを二等と思つて推薦したが、二等にならなかつた。

河合——その點、一等の丹下君のは（私は未だ見てゐないのですが）一つの新しい型を表出した樣に聞いて居りますが。

村野——そうです、最も都合のよい形をとつてゐるが、他のものに利用することが出來るかといふことになると、少々問題だが非常によい。いかにも合理的で、自分の主張と建築がぴつたりしてゐると思つて感心した。しかしうまいにはうまいが、言はば建築にはもう一つ距たりがあるやうに思ふ。

宇賀——私近ごろ痛感してゐることですが、このごろ大陸のあちらこちらに記念建築物が盛んに出來てゐるが、現在の大陸に「あゝ云ふもの」が建つていゝのだらうか、昨日も上海から最近竣工の或る記念塔の寫眞を送つて來たが、私は現在永久的なものゝ計畫は餘程愼重でないといけないのではないかと思ふのです。

村野——新潮で川端龍子が面白いことをいつてゐる、昭南島へ行つて記念碑があるのをみて「この記念碑を建てるといふ技倆は、山下將軍以上の技倆を要する」といつてゐたが、非常にいゝ文句だと思つて感心した。

宇賀——昨日送つて貰つた寫眞のものなどは、當代一流の彫塑家の作と聞きますが、表現が餘りに露底して、どうも我々にはピツタリしさうにありませんでした。もつと含蓄のある突き詰めた簡素美と雄渾美を表現手法として築いて欲しいも

のです。

安井——繪でもなんでもさうであるが、東洋美術は其凡てを具體的表現してしまわないのです。表現或る程度停止して背後にかくして於いて夫れを見る人が、だんだん見てゐるうちにはじめてそれを見出してゆくといふのが、東洋美術の特長ではないかと思ふ。その點西洋の美術は露骨に凡てを具體的に表現してゐる。これでもか、あれでもかといふやうに表現を具體化して居る樣に思はれます。東洋美術の特長は、日本畵などを見ても分るが、表現を出來る丈少なくして背後に大なる表現を隱して置くのです、さういふ點は西洋の油繪等にはありません。さういふやうに西洋のものはすべて表現を出來るだけ露骨に出してゐるが、東洋は出來るだけ後に隱してゐる。さういふ點は大いに我々職域と申しますか、建築を考へる上に參考になると思ふ。といふのは我々建築家の行方がどうも東洋的眞髓を沒却して西洋かぶれしてゐるこれでもか、これでもかといふやうなやり方を我々自身がやつてゐるやうに思はれるのです。

山口——「建築が藝術である」といふことばも只今の如く色々と談じきたつて、「やはり建築は藝術だ」といふ風に云はれた場合には非常にしつくりと聞へて、別に異議をさしはさむ氣持ちにはなりませんが、建築は藝術であるといふことだけを切りはなして考へてみますと、大いに異議があるのであります。即ち「建築は藝術である」といふ氣持ちで、制作を致しましても、少しも支障は無いのでありますが、建築は決して藝術ではないといふ事を申しあげてみたいのであります。

建築が藝術であるとか、ないとかの古くからの論じあいに於いては主として、建築を用に即した形としてみる立場、機能的合理や構造的眞が美に通ずるといふ思辨——それには、うまい料理は美しいとか、よく合つた靴ははいてゐるか、ゐないかわからないとか等の說明、飛行機や發電機が美しい等の例證が用ゐられましたか——と、建築制作の立場を感覺主義的に考へる立場との對立であつたようであります。こういふ考へ方の對立に於いての建築の本質探求に於いては、結局、建築に關しては藝術と非藝術が宛かも黑いか白いかの如くに對等の位置を以つて論じられたのでありますが、私は、建築の本質は藝術でない、建築は藝術以上のものであると、そういふ風に考へるのであります。

私は、こういふ風に說明してゐます。つまり山川草木、人體等の自然、及び、人間の作つた機械道具、建築などには、その何れもに、各々の構造的理法が存在する。手や足が胴や頭と共にあり、骨や肉や皮が、一貫せる構造の理法に從つて結合されてゐる。翼があり、胴體があり、プロペラがあつて、寸毫ゆるがせにならぬ構造の理法がある。建築に致しましても、基礎があり、柱や梁があり、壁や床があつて、構造の理法が全體を支配して居ります。ところが、藝術と稱せられるところの繪畵や彫刻には構造の理法がない。藝術はすべて、構造の理法を持つ自然であるとか、建築であるとかいつたものを眺めて、摸倣し、描寫し、可視的にし、感覺的にし、作者の感情の移入といふ事が行はれます。音樂にしましても、舞踊にしましても、同樣の事が申せるのでありまして、自然の音、自然の人體の姿を摸倣し、描寫し、可視的にし、感覺的にし、作者を移入する事によつて出來るのでありまして、何れもそれ自身に構造の理法がない。布と繪具の間には何等構造的な關はりがなく、又、彫刻はどの部分を切斷いたしましても單に素材の斷面をみるにすぎません。そこで、建築と繪畵彫刻との相違は、構造の理法が今造られつゝあるところのものそれ自身の中にあるか觀照自然中にあるかの點にあると考へます。あらゆる藝術は、自然の構造の理法の把握表現をたくらむものであり、建築はそれ自身に於いて、構造の理法を持つて居ります。藝術は建築に假遇し、建築は藝術を包含するといふ事は出來ましても、建築の本質が藝術であると申します事には異議があるのであります。

宇賀——最近の記念建造物はたしなみといふものが全然ない、あまり露骨過ぎる、餘りに興奮的である。あれこそヨーロツパ的ではないかと思ふ明治以前の我が國ではあゝ云ふ記念建造物はなかつた樣に思ひます。

村野——これはコムマーシヤリズムから出たものですが、コムマーシヤリズムが無くなれば、自然さういふ傾向も無くなると思ひますね。

安井——建築の技術といふものは、やはり藝術でゆかねばならない。だから「建築は藝術ではない」などといふ人は、建築家の資格はないと思ふ。

河合——先日、南方から歸られた海軍の或軍人さんから聞いたのですが「南方、特にジヤバのバンドンあたりの敵產建築には、なかなか良いものがある、何と云はうか、何處となくのんびりと造つてゐる」とごく簡單にアチラの建築を批評して居られましたが、私はこののんびり建てゝゐると云はれる軍人さんの言葉に、大いに味ふべき、今迄日本人に見られなかつた或ものがある樣に感じます。此頃の言葉で云ふ雄渾性と相通ずるものがある樣で、今後我々、今迄の島國根性を清算してもつと、のんびり建てると云ふ點、學ばなければならないと思ひますね。

安井——西洋の建物は餘韻がない、そこへゆくと日本の建物、殊に茶室などは實に餘韻がある。

小川——自然との調和と云ふ事ですね、東洋思想の特質は。

安井——自然の中に溶け込むと云ふ所まで行くべきでせうね。

小川——南方の建物でも向ふの自然的條件と民族的條件とをはつきり摑んで、その中に吾々日本の正しい創意を普通化すれば、樣式の問題など必然的に解決するでせう、政治的意途は別としても

小林——水原さん、構造の最近の傾向について何か御意見を聞かせて頂きたいと思ひます、構造法が變つてきてゐるし、今後も變るべき運命にあるのではないかと思ひますが、さういふ方面の御經驗を……。

水原——私は20年ばかり警視廳にゐたが、その間構造方面に非常な變化があつて、まづ最初は大震災の時、そのつぎは昭和12年の支那事變の時と二回變轉があつた。震災前は簡單な構造のものが多かつたが、震災後は全部鐵筋コンクリートの丈夫な耐震耐火の建物に變つた。それから支那事變を機會に、それから後は工場建築が主になつてきた、それまでは事務所建築が建築界の主位を占めてゐた、そして工場建築が盛んになると同時に鐵骨の構造が大きくなるとか、建物の面積が大きくなるとか、20年前に比べると、非常に大規模なものが澤山出來るやうになりました。しかし鐵骨構造は多くなつたが、鐵筋構造は非常に減つて（工場にもあまり鐵筋はなくて）無筋コンクリートの建物が一時盛んにつくられた、その後極く最近のことはよく知らないが、鐵材の使用が出來ないために、木造建築が發達してきたやうに思ひます。これは鐵筋や鐵骨の代りにもなる。又木造の構造が變つてきてゐます。これは理論的に考へられるやうになつたゝめだと思ひます。

安井——私は構造の方の專門ではありませんが最近の傾向として小さいピースで組立てゝ結構を組立てると云ふ樣に見えますが、如何でしようか。

水原——さういふ傾向があります、木造に於ても長材が入らないので然うなつたと思つたが。

安井——鐵骨でもダイヤモンドトラスなんか小さいピースを集めて大きなものをつくるといふやうに考へられるが……。

水原——たしかに細かくなつてゐます、鐵骨材でも小さいアングルで組立てゝ居る樣なのが多いです。

富田——もう一つの細かいピースになつた理由は、ダイヤモンドトラスもその一例ですが、工場生產が可能ならしめることであります、少さいが故に工場內で完成し得て、且つ運搬に便であることで、今日迄のトラス材では工場生產は考へもつかないことです。

水原——その點組立ては非常にうまくなつたやうです。

安井——私は將來さういふもので組立てるのが有効な方法ではないかと思ひますね。

堀井——今日急速增產に伴ひ、急速な建設を進める爲の各種の技術的方策、又重要資材を出來るだけ節約する爲の工夫といふものは、益々要求を深められて居ると考へられます、先程日本的性格の建築といふお話があつたが、工場方面に就て特にそう云ふ樣な問題が考へられる、今日生產能率を上げなければならないが、資材も人も仲々得られない、そこで現在の施設を如何改良して生產能率を上げるかといふことが眞劍な問題として、何處の工場でも、その爲ならば金を惜しまないといふ態度がはつきり見られる樣になつた、さういふ

方面の改造は、生産擴充の强調されてゐる今日、我々建築家の大きな問題であり、使命であると思ひます。

河合——この頃必要にせまられて、つくづく感じてゐるのですが、建築材料方面でも、もつと優れた代用品等が、どしどし出來ていゝんぢやないでせうか、どうも未だ之ならと思ふ樣な良い代用品が見當らない樣に思ひますが。

堀井——我々建築家にケミストリーの知識がないと云ふ點も大きな原因でせうね。

籔中——材料のお話が出てゐますが、我々は材料屋に材料を要求するよりも、我々が生み出さねばならぬと思ひます、現在では建築屋の考へた材料はないでせう、さういふ所に我々の行くべき道があるのではないか、どうも現在の建築屋は人手を待つやうな傾向があると思ひます。

河合—— 航空機製作、造船その他兵器など可成日本の技術も進歩してゐる樣ですが、ひとり建築技術のみが資材難に禍されてか、未だに昔乍らの技術を踏襲してゐる點が多いですが、もつと發明改革を要する時期と考へますが如何でせう。

宇賀——現在の建築界は材料が非常に追ひつめられて、その日暮しのやうな扱ひ方をしてゐるが我々はこのまゝ追ひ込まれていゝのか、それとも將來のためにもつと廣く自由に材料の使ふべく努力するのがいゝか、その邊先輩方々の御意見を聞かせて頂けませんか。

堀井—— やはり我々のほしいものをつくり出して行くべきでせうね。（安井氏退席）

宇賀——石川さん、何か御意見を……。

石川——私は口重もで、それに指名座談會ではないから、皆さんの御意見をゆつくり聞いてゐましたが、さつきからのお話は非常に面白いと思つて聞いてゐました。只今お話が出ました住宅營團の問題と、記念建造物でありますが、住宅營團について、いろいろ批評があつたが、住宅營團の根本的考へ方に疑問を起す、その結果からいふ皆さんの批評になつて現はれると思ひます。それはどういふことかといへば、住宅營團のやうな大きな組織をつくつたのは日本の住宅問題を解決するといふのだつたら、良い住宅を多量に安く提供するといふ多量生産の考へ方になつてこなければ嘘である、それであればこそ住宅營團は「い」「ろ」「は」といふやうな規格をつくり、安く多くつくるといふことを原則として決めたのだと思ふ。それだつたらあれはあゝいふ大きな組織だから多量生産の本質に合ふやうに工場生産にしなければならぬ。それにもかゝはらず、タイプをつくつて澤山つくるのはいゝが、あれでは多量生産の意味になつてゐない。單に下請業者につくらせて提供するといふのでは澤山つくるといふ意味はない。製造する方法が簡單だといふくらゐでは同じものをつくつても効果がない、結局高いものになる。さういふ根本的な問題から考へて、あゝいふ大きな團體をつくつてやるなら工場生産をして、それを持つてゆけば現場では叩き大工でも出來るといふことにしなければならぬ筈です。皆さんの御意見では、あれは衣裳的なものであるといふお考へもあり、また營團の性格を表明しなければならぬといふ御意見もありましたが、やはり「戰爭中だからとにかく間に合へばよい」といふやうに考へるのがすでにいけないのではないかと思ひます。住宅營團の問題は考へ方が結局そこへ歸着するのではないかと思ひます。

記念建造物の問題は同感ですが、記念建造物を云々するといふことは悪いとはいはない、よく考へねばならぬが、そこに相當問題があるのではないでせうか。それはどういふ意味かといへば、今日の狀態で私どもの考への基礎になるのはどういふことかといふと、日本は現在戰爭をしてゐる。これは動かし難い事實です。或る人は、例へば歡樂街の殷盛を見て、或は遊興稅、飲食稅が稅率を上げても、だんだん多くなるのを見て、日本は戰爭してゐないといふ人があるが、私はさうは思はない、戰爭してゐる事實があればこそ、さういふものになつて現はれてくる、戰爭があつて通貨の流通が多くなればこそ、さういふことになるのであつて、これが戰爭してゐる事實です。それからもう一つは、これは日本人として誰でも考へてゐることゝ思ふが、どうしても勝たねばならぬ、戰爭の勝利、これは日本人の理想です。さうすると戰爭してゐる事實と、日本の勝利といふ理想を結びつけたもの、それがわれわれの考へ方の根本ではないか。さうするとこれは大阪からマニラへ行

くにはどの道を通つてどう行くかといふやうな簡單なものではなくなる。つまり具體的なものと抽象的なものを結びつけたやうな考へ方が却つて本當の進み方かもしれない、一見理想に向つてゐないやうな進み方が、却つて理想に進んでゐるのかもしれない、マニラへ行くのに支那へ向つて行くといふのは理想に向つてゐないやうに思へるが、それが理想的な進み方かもしれない。建築技術もそれだと思ふ。只勝てばいゝといふのでなく、廻り道のやうでも、それが結局理想の道ではないかと思ふ、文化の問題も同じことだと思ひます。さうすると、あゝいふ記念建造物をつくるといふことも、あれでいゝといへるかもしれない。つまり記念建造物をつくるといふ考へ方は、目標に向つてゐる間の——何といふか——いはば一里塚といふやうな簡單な意味しか出て來ないと思ひます。本當の意味の記念建造物は、もつと先に考へられる。とに角、我々は今ある目標に向つて歩いてゐる、その途中で記念建造物をつくるといふことは丁度お寺の記念スタンプを貰ふのと同じで、本當の記念建造物はもつと先である。つくるのもいゝが、今つくつてゐるのはどういふ道程を通つて歩いて行つたかといふ一里塚的意味しかないと思ひます。

それから資材の問題ですが、資材の問題は我々として現實的に非常に困る問題ですが、これも結局今いふやうに戰爭してゐる事實と、戰爭に勝つといふ理想を大きな意味で結びつけて考へてみる。この際政府あたりの指導方針が理想的なものから非常に離れた所に目標が立てられてゐるやうに思へて、非常に迷ふことがあります。政府は戰爭に勝つために、途中で幾つもの道標を立てゝゐる、貯蓄しろといへば貯蓄が一つの道標になる、或は生産擴充といふ目標を掲げるといふやうに、勝利のために途中の道標を掲げてゐるわけです。資材を統制するといふことも、結局途中の道標であつて、これはすべて戰爭に勝つためにはさうするのがいゝと考へた國家の考へ方によつてやつてゐるわけであります。元來、物の考へ方には、我々の考へによつて動かし得る側面とどうしても動かない側面があります、これは歷史の成り立ちがさうであつて、いくら考へても歷史は一夜にして變へることは出來ません。先程着物と住宅のお話が出てをりましたが、これも面白い問題ですが、この問題も一つの歷史であつて、これは我々が幾ら考へても、一夜にして變へることの出來ない側面であります、材料の問題も幾ら考へても如何ともし難い問題であります。かういふこともいはば國家の方策として建てられたといふことは所詮人間の考へたことではあるが、戰爭の事實に立つて政府が決めた生産擴充といふ中途の目標に向つて歩いてゆくには結局さうしなければならぬ。そしてそれによつて歸結されたものを良いとか、悪いといふことは許されない。材料に對する考へ方も全然入らないものを手に入れることは出來ないがその間に新しい道があるのではないか、或は我々の要求からは非常に離れてゐるかもしれないが、消極的な面からいへば、材料も大きなものがなければ、小さいものを使ふといふやうに、未だある一部分でも材料があるのではないか、我々の自由性と束縛性をごつちやに考へて歎聲を洩らすといふことはいけないことであつて、未だ我々の工夫によつて解決し得る部面もかなりあるのではないかと思つてゐます。

河合——御尤な御說です、例へば代用品（又代用品を引出しましたが）などでも此はチヨツト幼稚な案かも知れませんが、今思ひ付いた處でドアーチエツクなども竹のベニヤ式を工夫して出來るのではないかと思ひますね。

安井——まだまだ種々考へるべき澤山範圍があると思ひますね。

小川——今後はいまゝで例へば鐵材3トンで完成したものを、2トン或は1トンで完成させるといふことも考へていゝと思ひます。さういふ點で年寄りの方々は御經驗がお有りになると思ひますが、その經驗の範圍で、若い者が考へた創意を無批判に取り捨てるといふことのないやうにして頂きたいと思ひます。設計でも施工の場合でもさうですが、折角伸びるべき技術をもつてゐる青年が最近は伸びないといふのが現實であります、戰時下だからこそ新しい技術の檢討と實踐が必要となります、その點でよし失敗しても、決して無駄にはなつてないのですから、新しいアイデイアを提示した場合は官廳關係でも指導に當られる先輩も

その點ゆとりをもつた批判を以て實驗的にでもやらせてみるといふことをお願ひしたいと思ひます。これは當面マイナスの樣です、決してさうでなく來るべきプラスの基になるのですから。

堀井——さうですね、殊に代用資材は中には缺點があつても、育成し育てゝゆかねばならんと思ひますね。

河合——その中で優秀なものは國家なり官廳なり、或は當協會學會などで表彰してやり、場合に依つては、研究奬勵資金を出してやるといゝですね。

小川——悪いものをけなすといふことは誰でもやるが、良いものを助長するといふことはなかなかやらない、建築にかゝはらず、總ての方面にも良いものを伸ばすといふ樣なゆとりが缺けてゐるやうに思ひますね。

中野——只今のお話で、私が聞きたいと思つてゐたことを伺つたやうに思ひます。實は今建築家になつてをられる方、或はこれからやらうとするものゝ向上になるやうなもの、勉强の對象として必要なものがないやうに思ふ、折角勉强しようと思つても、さういふものがないために、十分勉强が出來ない、また今の建築家は次の建築家を育てゝゆくといふことになるが、それも見てみると、どうも當座に間に合へばいゝといふやうな傾向が見える、次の建築家を育てるといふ努力が足りない樣に思ふんです。安井先生がお歸りになつて淋しいが、安井先生は「工業の問題も結局は藝術の問題だ」といふ意味の話があつたが、かういふ時代だからこそ、さういふことを特に教へてゆく必要があるとも思はれます。私は毎日生徒の顔を見てゐるが、現在の生徒は「先づ勝たねばならぬ」といふことを深く考へてゐる、だから先づ戰場に立つことを考へてゐる。こういふ場合に、今迄の樣な態度で建築の勉强をさせることは見當はづれになりはしないか、この點に附いて皆さんのお考へを教へて頂きたいのですが。

河合——兵役問題がありますからね。

中野——そうです、生徒は第一に兵役關係のことを考へてゐる、建築よりも、兵隊になることを考へる、技術とか、材料の問題なぞのことは考へない、そして兵隊に行つて2.3年經つて歸つて來ると、前に教へられたことを、すつかり忘れてしまつてゐるから、それを又再教育するといふことになるのですが、この問題についても學校に關係のない方も、やはり考へて頂きたいと思ひます。こういふ際だからこそ勉强はうんとやらせたい、今の樣に建築の方向が移動したら、それに即應して矢張建築としての基本的なことは確り修養せなければならないと思ふんですが。

小川——特に時間の短縮は大きな問題ですね。

中野——一般に卒業設計は殆んど出來ないやうな狀態です。

伊藤——中野さんのおつしやつたやうに、學校を出て5.6年やつてくると、今までのことを殆んど忘れてしまふやうな事になる、折角鐵筋や鐵骨の計算を習つたが、歸つたら又改めてやり直さないと、當分役に立たない、僕はそういふ意味からいつても煉瓦建築を再認識していゝのぢやないかと思ふ、理論的にいつて、煉瓦が完全な材料でないといふことは確かだけれども、二階や三階位の相當間仕切のある建物なら地震があつてもこわれない位のものは充分出來ると考へられる、も少し煉瓦でもつて二階や三階のものをつくれるやうにしたいものです、今後とも木材にばかり賴つて行くことは資源の點からも、防空の點からも疑問があると思ふし、それかと云つて都市の凡ての建築をコンクリート建築丈でやると云ふ事も困難な問題ぢやないかと思ふ、むしろ煉瓦といふものを此の際もつと考へなほす必要がある、私はこのことについて一ぺんみなさんの御意見を伺へたら結構と思ふのですが。

堀井——震災の時には煉瓦は弱はかつたね、まあ部屋を小さくして、鐵筋で要所を補强すれば、煉瓦でも强いものが出來るが、も少し鐵筋をつかはないと。

伊藤——震災の時に倒れたのは煉瓦建築も有つたでせうが、木造建築もコンクリート建築もあつた煉瓦で倒れたのは工場みたいな非常に壁の面積の長い間仕切りもないやうなものが多いので、これは材料ばかりの缺陷ではなく、寧ろ設計や施工が悪かつたんだと思はれる。

宮田——構造的な缺陷もあつただらうと思ふ。

伊藤——あれはコンクリート建築のまだはじめ

の時分で、あの時分學校のえらい先生方があまり極端に煉瓦をけなして鐵筋コンクリートでなければいけないやうに云ひすぎたものだから。

宇賀——地震に對してもろかつた煉瓦造より殘つた煉瓦造をとり上げてはと思ひますね。

伊藤——煉瓦建築はもつと奬勵してもいゝと思ひますが、如何でせうか。

堀井——施工が全然違ふからね。

水原——部屋が小さければ良いと思ひます。

村野——横須賀あたりも殘つてゐました仕事がいゝんでせう、昔の人の仕事は全然違ひますよ。

村野——條件が苛酷ですから。

伊藤——堀井さんの方なんか、何とかもう少し煉瓦建築に對して考へていたゞきたいですね。

堀井——實際の教育に關して私はちよつと氣づいたことを申し上げます、私が建築へ來るそもそもの動機は、化學がきらひだつたと云ふことが消極的な一の理由だつたのですが、とにかく學科目に就て專門學校もみな同じやうな型で教育が施されてをる樣に思はれます、これはひとつ專門學校は專門學校に適する考へ方の下に、大學は大學に適する考へ方の下に教育するといふ方法があり得るのぢやないかと思ふ、いづれも大學を標準にすれば、その型を小さくしたやうな型にはめて教育されて居る樣に思ふ。

中野——工業學校ではないが、中學校、國民學校などそうですが、既に溫度や濕度の測定をやり物象方面の取扱ひが變つて來た工業學校で、まだ取扱へないものを中學校なり、その他でどんどんやつてをるが、この樣に實際必要なものは建築の方でもどしどしとりいれたい。どうもむつかしいことばかり考へてしまつて、本當に役立つ基礎的な大切なことを殘してをつたやうな狀態で、今日までやつてまいつたやうに思ふ、とにかく今のところ建築に關する教材をみると、きまらない非常に澤山なものを集めて、これをすきなものをとれといふやうなやり方になつてをるが、もつと本當に必要なもの基本的な方面からだんだんきめてゆく必要があると思ふ、最う學問としての形は想はなくてもいゝから、これはといふ極く大切なものに重點を置いて教育する時代です、學問の縮圖は必要ありませんな、極端に云へば前後の關係なぞ問題でなく、必要なものを並べる態度でいゝと思ふんです。

堀井——もつと文化を高めてゆく必要があるね

水原——コレクションのやうな考で、まだどうもしないと思ふ。

伊藤——今建築屋の間で問題になつてをるのは大都市の中に作る建築をどうするかと云ふ事で、郊外や田舍に出來るものは大した問題ぢやないと思ふ、都市に作る建築が一番問題になる以上、建築家がもつと都市そのもの都市計畫と云ふやうな問題に關心を持たなければならないし、學校に於ても、そう云ふ問題を充分取り入れて欲しい。

村野——都市について教へる標準といふものが出來てをるかどうか、都市は彼樣なものだとか、いろいろ住宅問題が出たが、私考へるのに日本は昔からの習慣とか、氣候狀態歷史といふものを考にいれることが現在必要だといふことゝ合理的の考へ方、この二つあると思ふが、その兩方をとりいれたところの都市は、こういふやうにすればよい、その基本を與へるところのものが、まだ建築家の建築界の中に確立してゐないやうである、私どもはもつと勉强する必要があるかも知れない。

錦田——都市といふものは、日本では奈良朝か平安朝に考へられただけで、それから後は都市といふものは考へられてをらぬやうに思ふ。

宇賀——お尋ねします、都市を中心にして建築技術を教へろといふお話が出ましたが、それに對して御意見は。

村野——これは建築の本質を示さないといけない。

錦田——僕はそう思ひませんがね、今日の建築の8割は都市中心ですから。

村野——建つには建つでせうけれども、建築と云ふ本質を殘してゆく、都市に建つ建築とは何ぞや、第二段の話になると思ふがね。

錦田——僕はいまゝで建築といふものゝ目標が都市といふものでなしに、建築そのものだけでよくしやうとだけ考へるからいけないんぢやないかと思ふ。

村野——言葉をかへすやうですが、農村にしても、都會にしても、ある意味では都市ではないかと思ふ、現在の都市も今後は衞生都市と新興都市

と同じやうに理想化されたものに改造される運命にあるのぢやないか、そうすると都市とは郊外市街とかいふやうな考にいれることは、これは二の次の問題ぢやないでせうか。

錦田——さきほど村野さんは高層建物が平家建かといふ問題について仰言つたやうですが、それに對して宇賀さんは生活の構成が根本問題といふやうに仰言つたのですが、その前にやはり都市はどういふやうにつくるべきかと云ふ事が問題だと思ひますが。

村野——むろん生活様式の問題に關係しやうと思ひます、まあ今日の線を引くと、日本でいふと支那事變あるひは滿洲事變か判りませんが、都市の動きの政治的重要な要素は經濟ではなかつたかと思ふ、過去は經濟が政治をリードして來たものであるが、今日では政治といふものが、すべてをリードするかたちである、經濟が政治を指導した時にも、都市は高層化する運命にあつた、用地を集約的に使へば、建物は高層化するのが當然である、アメリカその他の歐米諸國ばかりじやない、日本でもそうだ、ところが今度はかたちを變へて政治が經濟を指導したものが、經濟が政治をリードする場合、都市は當然高層化される運命にある。たとへば衞生交通、あるひは國家自體の能率といふことを考へても高層化される、都市に空地を殘して土地使用の經濟理念を度外視しても、政治的にそれが必要になつて來る、そういふ表現の形成は變るでせうが、高層化されるといふことはそういふ運命になる、私はそう考へますが、しかし、これが住居の問題になつて、自ら性質は別問題になりませうから、また都市の如き住居は、別の郊外や衞生都市になるが、働かく場所を離れて住居といふものは出來やうが、それらは環境により生活様式がだんだん錬成されて來るのじやないか、今迄の生活様式を置守する、置守しやうとすれば、それに惱みが生じ、免倒さが起るけれどもただ變化することは當然の話だが、まあ今日のものを墨守する必要はない、從つてある程度の高層化するといふことは已むを得ない狀態になるんじやないか、私はこう考へてをります。

錦田——吉田さん、將來の都市の問題についてのお考は——防空防火人口の問題など——

吉田——大問題ですな。將來の都市については交通、衞生、保安、經濟等の見地以外に、先づ防空の問題を考へなければ成立たぬのじやないかと思ひます。で、われわれが平ぜい考へてをるやうなことを一寸申上げて御批判願ひます。一番初めに、特に大阪とか東京とかいふやうな大きな都市について、もつとも警戒すべきことは、徒らに都市が過大化するといふことで、最近暫定措置として工場規制といふものが出て實施されてゐますが膨脹要素となるべきものを根本的に引拔くやうに考へることが大事で、之と平行して綠地帶を考へる。たとへば大都市の近郊に幅約1キロぐらゐのグリンベルトを敷いてやる。それから何を措いても宅地内の空地を十分にとらないといけない。私は高層化することも結構ですが、高層化するだけで、空地がなくなつてしまふといふことになると非常に困ると思ふ。一方また宅地内の空地を十分に取ると同時に、積極的に國や自治體の手で公園とか廣場とか云ふ自由空地をどんどんとつて行くといふやうな方法にしたいと考へてをります。また例の火災に對する豫防も重大であり、全部の建物が理想として鐵筋コンクリートをもつてする、また爆彈に對しては全部地下に入れてしまふといふやうな極端な議論も出てをるやうですが、それはなかなか一朝一夕では出來ない。それでどうしても市街をある適當な間隔に區劃して、完全な防火地帶を構成する。こういふ考へ方が必要じやないかと考へてをります。それから防空的の見方でこれは非常に出過るか知りませんが、重要施設といふものは、なるべく分散させる。一ケ所に集めない。昔はよく集めたものです。たとへば官廳街といふやうな名前をもつた所も相當ありますが、それでは具合が悪い。なるべく分散し、しかも相互直經を緊密にする。軍事施設に對しても行政施設に對しても、工場施設や交通施設、電氣、瓦斯水道、市場などの如き供給施設、其の他通信施設や厚生施設など、いろいろ重要な施設はみな分散する。支那の南京では故意か偶然か、この點全くうまく行つてをります。大體こういふやうに考へてをります。結局實現方法は一番はじめに申上げたやうに全部の建築物は國家の手でやるといふのが、あるひは行過ぎかも知れませんが、もつと國

家が都市計畫に對して最後まで見屆けるといふやうにしたい。かやうに考へてをります。

小林　山口さん、市役所へおつとめですが、何か御感想を……

山口——どうもガソリンが廻り過ぎまして、矇朧としたものですから。

錦田——その問題ですが、都市計畫を道路計畫と考へ違ひしてゐるのではないか。建築計畫がない、建築計畫は與へられた土地に、與へられた坪數に計畫を立てることはあつても、始めから都市を造ると云ふ風には考へられてゐない。

村野——サゼツジヨンがないと考へないといふ傾向がありはしないか、都市計畫と一緒に建築はもつとこちらからサゼツションがあつても進出して行かなければならぬと考へます。

錦田　そうなんです、府下の南の方に今度人口〇〇ぐらひの町が出來ますが、その土地に工場の勞務者の住宅を〇〇つくるわけですが、この時は道路計畫といふものはこの次だと思ふ、まづ第一に勞務者に對する家をつくるといふのが主目的ですから、それが先に來て、そして道路の計畫なり町割といふものがつくられなければならぬと思ふ、ところが現在ではどうも道がつくられて住宅敷地がつくられて、それから家を考へるやうになつてをると思ふ。

村野——周圍の人がやらせないのでせう、むしろ建築の方はやる方ですよ、喧嘩を買つて出て引下ることもあるが、ちよつと考へると、やつてをるやうです、職業建築家がたのまれても、なかなか理想通りに實現しない、そこの營繕部の人が、われわれのいふことを大分チエツクする場合も大分あります、そういふことで困ることもあります、むしろこの頃の建築家はやる方ですよ、やり方が足らぬかも知れぬが。

吉田——土地區劃整理が成立し、立派な敷地が出來上り、こういふ建物が出來ればいゝと、われわれの方で考へても、たとへば何時のまにか間口を狹くされてしまふ。建築家の方でいふのか、素人がいふのか、都市計畫と建築といふものは、どうもピツタリまだ行つてゐない。だから最後迄國が見屆ける必要があると思ふのです。餘計儲ける方では利潤を追求するために、間口を少くして人を集段的に入れやうとする。

村野——政治の指導理念からいふと，そういふこともどうも舊態依然たるもので、規則通りに善意に解釋する人はそれはやるが、今日は極端に討義に解釋すべきではないでせうか、事實と違つたのが今日の都市計畫のやうで。

小川——ドイツの建築統制の爲に施行經濟は勿論ブロツクからプラン、フアサードのデザイン迄が國家的な規準に置かれて、初めて吉田さんの理想が實現するのでせう。

村野——こういふことになつたらどうかと思ふ私は日本の都市は木造だから、中心地でもやはりそこは改修する部分が起つて來る‘外國の都市のやうに建築が出來たら、非常にひまがかゝる、ベルリンの如く郊外に新しい住宅が出來ると、今迄の住宅よりよいから、中心地がどんどん郊外へ移つて行く、これが本當の發展經過じやなからうかところが日本の郊外の方は、中心地の住宅にしても、構造なり居間からいつても、建物からいつても性格が變らない、これが缺點だと思ふ、郊外に新しいものが出來れば、いや應なしに移動地帶に發展して行く、政治的にも改造されてゆく運命になる。これが日本の都市と外國の都市との違つた性格ではないだらうか、これを何とかしなければならぬと思ふ、だから日本の都市のやうな木造で充たされた土地に對してさう無理矢理政治的にやつてもいゝかどうか分らないと思ふ。

村野——その點防空とか、防火の問題でも百年河清を待つやうなもので、いくらやつても駄目だらうと思ふね。

伊藤——僕は關東の震災がなかつたら、今の東京でも大阪でも恐らく半分以上煉瓦建築になつてゐただらうと思ふ。そしておそらく現在のやうに防空々々と大騷ぎしなくてもよかつただらうと思ふ。

村野——煉瓦建築は規則でやかましく縛られてゐるからね、規則でもつと大事に取扱つてゐてくれたら煉瓦建築は確かに發達してゐただらうね。

伊藤——だから一般の人も今では煉瓦はいけないものだと思つてゐる。

堀井——今では煉瓦はどうも仕方がないでせう今煉瓦をやらうといふ何か目安がありますか。

伊藤——今のまゝでは石炭が供給出來ないといへばそれまでですが、これが日本の將來を左右するといふことになれば、建築家がもつと「石炭を煉瓦へ廻せ」といふべきだと思ふ。

堀井——それならばセメント煉瓦でもいゝでせう。

伊藤——それでもいゝでせうが、煉瓦の方が手取早いでせう。

村野——コンクリートの許可はやかましい、煉瓦の方が簡單です。しかし煉瓦も鐵筋でなければならぬといふところが困る、これがもし木でいゝといふことになれば煉瓦でやれる、さうすれば燃燒速度は三分の一、四分の一になると思ふ。最近私は規則にはまらない建築をやりました、これは建物と建物との間の防火壁を規則通りやらなかつたのです。それでこれではいかんといつてきたが私はどつちみち木造の家だから燃える、只燃燒速度を遲くして二階にゐる者が非常の場合に避難出來るやうに木骨に煉瓦を詰めて行つたらどうか、防火壁でなくても要するに燃燒速度を遲くすればいゝではないか、木造の家がどんなことをしても安全に殘るとは思へないといつて意見を述べたらそれで宜しいといふことであつた。とにかく少くも壞れないといふことを考へなくても、少しくらゐ壞れてもいゝから、またゝとへ燃えても燃える速度が遲ければ、そのうちに消防夫が來て助けてくれる、その點規則を變へてくれゝば少くとも煉瓦で三階までは出來ると思ふ。

伊藤——事務所建築は別ですが、都市の一般住宅は三階以上つくる必要はない、また三階くらゐのものは煉瓦でつくれるやうにならねば嘘です。これは非常に極端な話ですが、上海あたりの戰禍をうけた所へ行つてみると、燒けたものでも煉瓦建てのものはそのまゝ屋根床をつけたら家が出來る、壞れた家でもその煉瓦を使つて直ぐ新しいものが建てられる。その點木造ではどうすることも出來ない、鐵筋コンクリートでも壞れたものは捨てるよりほかない。煉瓦はすぐそのまゝ利用出來ます。

堀井——規則については建築協會の方でまとめられた場合に出しました。その時「現在の市街建築物の規則は全面的に廢止してくれ」といふ意見も出した、そして我々もさういふ意見だし、內務省でもさういふ考への下に、住宅營團が7坪半の戰時型をつくつたやうに、その他に戰時型に適するやうに法令を改廢するといふことに着手してゐます。尤も本年の議會には間に合はないから、さらに1年延びますが、來年の議會には提出する運びになつてゐます。現在は十分さう云ふ機運になつてゐる。なほ當局でも規則だから扞げられないとはいつてゐないのです。

藪中——內務省令の方は議會にまたなくてもなんとかならないかね。

堀井——なんとかなりますね。

藪中——その五月蠅いところを內務省令でやつたらどうか、極めて簡單ですからね。

小川——話が變りますが、これは建築家の弱點をさらける樣になるかも知れませんが、建物を快適に活用するために使ふものゝ心構へを要求するとゐますか、或は理想的にいへば今の修養道場とか錬成道場といふやうな建物に入つて生活すれば精神的にそこに一つの心構へが出來、これは建物本來の目的と使ふ方の目的とがぴつたり一致する事で、そこで初めて快適な環境が生れると思ひます。それが戰時下といふ事情のために資材の不足とか、豫算の不足とかといふことで、勢ひ不備になる、そこでそれを補ふ意味で、使ふ者にその心の在りかを要求する權利はないが、さうすれば同じ建物でも使ふ人の心構へ一つで非常に快適な環境が現はれるし、建築本來の性格もその心構へ一つで非常にはつきりして來ると思ひますがね。

堀井——建物に日本精神を現はす、或は日本建築を理解する、さういふ運動ですか。

小川——さうぢやないのです、その話になりますと、一例をあげていへば、住宅營團が神棚を置きさへすれば、精神的方面は解決せりといふのでなく、その中に入る人が、その一家族は勿論のこと、隣組の者全體に和の精神を强調して住はせれば、そこには美しい精神的な環境が生れるのではないでせうか、又家族制度の話に關聯しますが。

堀井——私共翼贊會の方でも强い形ではないが戰時下の生活の內容に多少それを含めてをります。

小川——たとへば共榮圈がだんだん廣くなると

ともに、どんどん轉出してゆかねばならぬ、その場合與へられた20坪の住居でもさういふ心構へで住んでをれば、それが本當の故郷である、鄉土であるといふことになる、その精神が强ければ强いほど心安らかに轉出が出來る、それから同樣に第2、第3の精神の故郷が出來るなれば、吾々民族の心のつながりによつて力强い生活がかりそめのあばらやにも充分に展開出來ると云ふわけです。

中野——翼贊會の「住」の問題は「衣食住」を含めた生活指導ですか。

堀井——さうです。

中野——さうすると建築家だけでなく、他の方面の人も入つて綜合的にさういふことを强調する必要がありますね。

宇賀——翼贊會が住宅の問題を取上げた際、私たちが一ばん迷つたのは「神」「佛」「床の間」の問題です、自分たちとしては、そのうちのどれを中心にすべきかといふことが問題になるのです。住宅營團の住宅を見ると、恐らく床の間が第一で神棚が第二ではないかといふやうに思はれますがその點をもつとはつきりして貰はねば國民がそれ等の取扱ひに困るんぢやないかと思ひます、此の問題の明示は翼贊會としてコボレタ問題ではないかと思ひます。何んとかそれ等の在り方を指示して欲しいものですね。

小林——山口さんは日本の民家の隱れた研究家で、各方面を歩いて研究されてをりますから、何かその方面について御意見が伺ひたいと思ひます。農村の住宅はどういふ風になつてゐるか、或は今の神、佛、床の間の扱ひ方でも何でもいゝですが……。

山口——農村ではこのごろ家庭神棚が流行つてゐるが、佛さんが主になつて、神樣が第二に祀られてゐるやうな形になつてゐる樣に見へる、しかしよく考へてみると、やはり神樣が第一になつてゐるのであつて、佛樣とは全々別の觀念で考へられてゐる。その證據には、神樣は大抵「オイエ」即ち最も主要なる居室に祀られてゐるに對し、佛樣は民家にとつては後世の附加物であるところの「ザシキ」の部分に祀られて、日常の生活とは一應きりはなし、典禮義式の便を第一として居る。こう考へてくると、神樣を主要居室の外主要住や棟上などに祀つてゐる例もあるから、日常神に仕へて生活するといふ日本精神を如實に物語るものとして、現在の日本の民家をみることが出來る。

村野——神樣は御利益を對象にしてゐるからではないですか、祖先を崇拜するとか、皇祖皇宗を崇拜するといふ意味でなく、即ち利益が中心になつてゐるからだと思ひますね。

堀井——今までさういふ風に敎育されなかつたからね。

村野——私らは小さい時から宮地岳と伊勢神宮の札をうけて、それを床の間に揭げたものです、1年中かけて信仰の對象としてをつた宮地岳神社といふものは故郷の神だといふのでね。

籔中——私はお祓ひをやつてをつたが、僕らの親爺時分は朝起きると天照大神や澤山よび並べたよく覺えておつたが今は覺へてゐない。

宇賀——神祇院の方で家庭用神棚の規格を出して欲しいと思ひます。市場品の雜多な種類、粗惡な造作をみるにつけ、この放任が不思議なんです。然も昔のものと較べて、最近は型がくづれて神社型式の有つ美しさが壞はされ樣としてゐます。

小川——それは形式でなく、精神さへあれば柱に紙が張つてあつても、それでもよいんだが。

宇賀——それはそうだ、形式云々はといふことになるが、翼贊會の方でどうと云ふ問題でなしに各自の家庭に敬神崇祖の形式として必らず神棚があると云ふ點で、その形式をどういふやうに取扱ふかを指示して貰ひたい。住宅建築に重要な事柄と思ひますから。

村野——そりやそうです。

錦田——營團では佛間がありますか、ないでせう。

小林——住んでをられるのを一度拜見しましたが、半間の床の間が佛壇の置場になつてをる樣でした。

宇賀——プランを見ると、一番重要視されてをるのは床の間だが、敬神崇祖が强調されてをる今日、住宅に於ける神棚の問題は相當むつかしい問題だと思ふ。

村野——壁掛が多いからどこへでもかけたらいゝでせう。

宇賀——神佛と床の間といふものゝ均衡が非常にむつかしい。

村野——一つの部屋においてありますね。

村井それでいゝでせう。

河合——宮田さん、住宅の應急的退避所ですがね、防空讀本や新聞などで室の隅にタンスや本箱等を置いて、その中に入つておれと圖解入りで說明して居りますが、何時もあゝしておいては使ひ勝手が惡いし、そうかと云つて、いざと云ふ時に運ぶのに人手のない處では困ると思ひますが、もう少し良い案は無いものでせうかね。

宮田——ふだんからあゝしておけと云ふ譯でないでせう。今は警戒警報が出ておりませんから、差當つてその必要もないでせうが、警戒警報が出ればやる必要はありませう。そうしないと、いざといふときになつても早急に出來ませんから。

村野——空襲といふ場合には弱い者が全部そこへはいるのですか。

錦田——敵機來襲の場合はすぐさま防空擔當者も皆がはいる、そして爆彈の破片にあたつて怪我したり、死なゝいやうにする、それから彈が落さてしまへば、擔當者はすぐ活動するのです。

河合——實は、私の近親の家庭で老人と子供だけの家族なのですが、その場合、あの退避所の設備をするのに急の場合、間に合ふかどうかと思つてゐるのですが、何かもう少しか弱い手で簡單に出來ないものか、タンス等でも車でも付けてやつて可動式にしてやつたらと考るのですが。

錦田——あれは緊急措置のものでないかと思ひますが、將來防空即ち生活といふやうになつてくれば、もつと完全なものを造つたらいゝでせうが今のところ資材を新に用ひないでは家財道具等で考へたらあれより仕樣がないでせう、たとへ何も持つてゐないときには、伏せの姿勢をするのと同じで、出來るだけ被害を少なくするといふ意味で今のところでは一番よいだらうとそういふ程度のものです。

宇賀——〇〇の爆發に遇つた人の話ですが、ガラスが爆風で中へ飛散したと同時に屋根が飛んだ。その時の話を聞くと、桐のタンスだけは何ともなく、完全に殘つてゐたが、洋服タンスはメチヤメチヤになつたといふのです、そこに何か面白いことがあるやうに思ひます。

錦田——それは和タンスにいつぱいはいつゐたからでせう、洋服タンスはガランドですからね。

小林——桐のタンスは濕氣をよく吸收しますね此間の阪神地方の水害のときにもタンスが水につかりながらも、タンス自身が水を吸收して、引出のスキ間がかへて密着して、なかのものが安全だつた樣です。

宇賀——日本では桐のタンスは是非殘しておく必要があるでせう。

吉田——爆彈の破片に對しては効果がありますが、火災にはもろい。

宇賀——とにかく桐のタンスが水害にも爆風にも無事だつたといふことは、たいへんおもしろいそれからも一つ敎へられたのは、昭和九年の風水害の時と、〇〇の近所で爆發に遭つて、その兩方も一貫して下見板張であつた家は、他の家が飛んでしまつたのに殘つたと云ふことです。

錦田——その代り火災には目もあてられぬ、〇〇は主として爆風の被害で斷片ぢやなかつたのでせう、たゞいま待避所をつくるなどみな爆風をおそれてゐるが、斷片の方が怖い。

河合——爆風によるガラスの破片飛散防止に紙やセロフアンを貼つて居りますが、あれは直きに剝れてしまつて駄目ですね、あれよりむしろ蠶を簾式に上からぶら下げておく方が有效だと思ひます。

村野——田邊さんのに書いてありましたが、セロフアンは駄目だといふことです。

河合——ドイツでもあれは餘りやつてゐない樣に書いてありますね。

錦田——殆んど効果はないといつてをります。

小川——そういふ點で、今夕の樣な建築家の代表の方々の集りですから、何等徹底して統一されたものがないのは困つたものですね、待避所にしても、ある町では床下に堀れと强制し、ある町では行過ぎると云つて叱られるし、指導方針に根據がないのが一番困る樣ですね、これは權威の問題になりますからなあ。

錦田——警防團が掘れ掘れといふのはあれは行きすぎですが、たゞ自分がお掘りになるといふことはゆきすぎぢやない。

井——府の方針も一つの大衆運動を急速にしようと思つても、警防團がそれに加はつてをり、その方針などもずつとかわつてきたりすることがある、そういふ意味で大衆運動といふものは、まあ非常にむつかしいものです。

宇賀——今、堀井さんがおつしやつたやうに、先日協會が爆彈の實驗をやりましたが、その結果檢討の後の指導を待たずに勝手な對策を街でやつてゐるのをよく見受けますが。

堀井——それは困つたものですね。(速記中止)

小川——この戰時下なればこそ、それぞれの家を守る、我々の建物を可愛がる、建築愛護といふ意味で、防空防火施設をするといふだけでなく、もつと公共建築、或は施設を大切に使用する、精神を養成する必要を感じます。例へばドアーなんかも亂暴に開けたり閉めたりすれば、10年保つものが、5年しか保たない、鐵路愛護の運動と同じやうに建築愛護といふことをもつと强調してもよいと思ふ。一般建築も取扱ひ如何で非常に影響があると思ふ、かういふ戰時下であるが故に、既存の施設を特に大切に扱はねばならぬと思ひます。特に公共建築施設等々に於て公德心以外に建築自體を敬愛すると云ふ樣な精神です。

宮田——例へば最近は酸化鹽などのペンキの材料が少くなつて、ペンキが拂底するために金物が腐つて、修繕が多くなつたといふことであるが、金物を愛護するために必要なペンキなども適當に考へてもらつて、もつと潤澤にする必要があると思ひます。(大下出席)

宇賀——いや、小川氏のいふのは潤澤とか、不足といふ意味でなく、大衆が建物を取扱ふのにもう少し丁寧にやつて貰ひたいといふのですよ。

小川——ドアでも、エレベーターでも階段の上り下りでも現在有るものをもつと愛護してもらひたいと云ふのです、不思議なもので、或る單價以上をかけたいはゆる高級なものは、もちろん手入れもいゝからよく保持されてゐるが、ある限度から僅か仕上の程度が下つたために、非常な被害をうけてゐるものがある、使用する人の種類にもよりますが、豪華なものは一般大衆もあまり亂暴な取扱ひをしない、そして手入れも行き屆いてゐる。安ものといはれるものは管理する方も心を入れないし、使ふ人も無神經と云ひますが、亂暴ですぐ惡くなる。好い例とは思へませんが、その點南海の下の食堂は比較的双方共に考慮されてゐて便所なども故障がない、それが北の阪急あたりでは僅かの建物から受ける感の違ひで連日故障です。全部を完全に使つてゐるといふことは、ほとんどない、これは僅かな建築家の意途、又は仕上材料、施工程度の違ひで大衆の心理的影響が違つて來るのだと思ひます。その點どんな建物でもお互ひに氣をつけて取扱ふといふことを强調すべきだと思ひます。

宇賀——同感ですね、小さな差込錠まで愛護心を及ぼして貰ひたいですね。特に學校教育をして貰ひ度いものです。

小川——學校の窓ガラスでも、公園生垣でも同樣です、かういふ際だからこそ、特にかういふ運動が必要だと思ふ。〃建築愛護〃運動です、建築協會あたりで。

錦田——翼贊會でもさういふことをいはれてゐるが、建築協會でさういふ運動をしてよいと思ふね。

小川——一般の住宅は自分の家だと多少は氣をつけるが、借家だとこれは家主のものだから、疊など切れてもよいといふのが普通の觀念ですが、公共建築物でも個々の建築物でも「國家の建築施設」といふ點では同じであるから、資源愛護には變りない砂糖を大切にし出したり、軍用機獻納運動とも同じ意味です。

錦田——その點、今はいゝ時節ですね、住宅難で、大分借家人根生が是正されてゐる。

小川——支那では、華北交通あたりで、一般民衆に徹底した教育をして線路を守らせてゐる沿線の部落を鐵路愛護村と云ふ名のもとです、列車が通る前後には、それぞれの定められた位置に、その當番は自分達の與へられた區間を護るのです。異常があれば、直に各警備屯所に通告する事になつてる樣です、旅行して居つても住民の子供等が腕章を卷いて竹槍を持つて直立不動で列車を見送る姿には全く頭が下ります、やはり無事故の部落には、賞狀等を出してねぎらつて居る樣です。

堀井——非常に良いことですね。

河合——田邊さんのお話によると、ドイツでは

政府が住宅を建てゝ借してやり、借りた人の手入れがよいと建物年數より早く自分のものにさせるだから借りたものも非常によく手入れするさうです。

村野——これは恐ろしい習慣になつてゐるからね。もう一つは建築に對する知識がない、われわれが事務所建築等をやつてもさうです。建築して引渡すと、管理者の方ではかういふ建築は手入れは要らないと思つてゐる人がある。だから故障が起ると、これは建築が悪いといつて文句を言つてくる、我々としても憤慨にたえないから「それは手入れが悪いからだ、どんなものでも手入れしないで放つておいたら20年保つものでも10年しか保たない、手入れさへよければ5年しか保たないものでも10年保つ」といつて逆に言つてやるのですが、建物は手入れの良い悪いで非常に違ふ。

小川——床なんかが自然磨滅するといふやうなのは別ですがね、だから一方には吾々が計畫をやる時に、その平面、仕上材料等に愼重である事とその建築自體が大衆に及ぼす精神的効果を常に考へるべきだと思ふ。そこはドイツでは建築と云ふ物と、この効果を可成高く評價して政治的に盛んに建築を利用して居るあたり學ぶべきでせうね。

村野——瓦斯ビルの地下室には植木が入れてあるが、非常にいゝことだと思ふね、だから機械のランニングパートも5年のものが10年も保つことになる。

村野——今では使つてゐる者にも良い建物と悪い建物の區別が分らない、一般の人がそれを見分けることが出來るやうになればいゝですね。

河合——此はうちの事務所で設計した尼ケ崎の或公共の建物ですが、何時行つても圓い電燈のグローブの上が眞黒く埃りが溜つてゐるので、小使さんに「もう少し手入して掃除してくれたらどうか」と云つた處が小使氏の曰くにですね「それなら尼ケ崎にある工場の煙突から出る煤煙を止めてくれ」と逆に捩ぢ込んでくる始末でお話にならないのですが、煤煙の多い處なればこそ、餘計掃除が必要なわけで、小川君の說の通り、大衆の建物を可愛がると云ふ點が非常に缺けてゐますね、その點瓦斯ビル等は何時行つて見てもよく掃除が行屆いてゐて、安井先生としても氣分良く思つて居られることゝ思ひます。

宇賀——私は編輯の人にお願ひしたいんですが記事をもつと分り易く、入り易くしてもらひたいと思ふ、そして「建築と社會」の名の下に建築知識がもつと普遍化するやうにして頂きたいと思ふ、何も六ケしい言葉を苦心して使つて高く止つてゐる必要はない、もつと平易な言葉で、今日の建築觀を普遍化させるといふ處に「建築と社會」の使命があると思ふ、「圖解科學」などに教へられる點はないか。

籔中——大下さん、あなたが來られたから、また蒸し返したいのですが……（笑聲）今までに相當議論があつたのです。實際建築家、つまり建築を勉强して建築に從事してゐるものが、今まで學校で勉强したり、机の上でやつてゐたことを本當の庶民住宅によつて腕試しするのは今度がはじめてであるが、今まで叫んで來たことを營團が實踐された、いはば我々建築家の中のチヤンピヨンであるから、相當奮闘して頂きたい、いろいろ意見があるんだが、我々の一人として大いに努力して頂きたい。

大下——御尤もと思ひます、出來るだけ努力しなければならぬといふことも十分考へられるのですが、とにかくいろいろの條件を克服して限られた經費と極限の材料で、しかも急いでやれといふことです、いろいろと不評があつて、誠に技術者としても不滿足な點もあるのですが……。

籔中——仲間ですからね、我々も他所事には思へないですよ。

大下——あまり皆さんの攻撃が多いので困つてゐますよ。（笑聲）

小林——いろいろと有益な御意見を拜聽出來まして、ありがたうございました、豫定の時間がたちましたので、此で閉ぢさして頂きます。（完）

建 築 新 体 制 要 綱

建築聯合協議委員會
建　　築　　學　　會
日　本　建　築　協　會
日　本　建　築　士　會
建　　築　　業　　協　會

本委員會は、時局に對應する爲建築界の体制問題を研究協議する目的を以て、建築學會、日本建築協會、日本建築士會及建築業協會の四會聯合の下に昨年3月設置せられたもので、爾來佐野利器博士を委員長として會を重ねること11回、其間建築行政、營繕、建築設計監理、建築施工、建築技術者團體の五部門に分つて夫々專門部會を設け、研究すること前後延79回に及び、去る11月5日の本委員會に於て成案を得るに至つたのである。

本成案の取扱に於て、所謂「建築新体制要綱」と別冊一及二とに分けたのは、別冊の方は其內容が「建築新体制要綱」に對比し、一つの中間的方策と見らるべきものに付、之を別冊として添付するに止め、以て建築界以外の諸方面に對しては單に「建築新体制要綱」のみを發表することゝしたのである。

尙、本成案の實施は時局下建築焦眉の急務であり、且重要問題であるに鑑み、「建築新体制要綱」は速に關係筋へ建議せらるゝ樣慫慂すると共に、別冊一及二に關しても急速具體化の必要を力說希望して置いた次第である。

因みに、本聯合協議委員會の經過に關しては、既に本年4月號建築雜誌へ詳細記述した所である。

昭和十七年十一月

建築聯合協議會委員會

要　　領

建築ハ國防國家ノ建設ニ於テ、軍事防空、生產擴充、民力培養等國家樞要ノ諸計畫ニ隨伴スル必須施設タルニ拘ラズ、未ダ之ニ關スル時局的措置ノ實施ヲ見ズ、之ガ爲建築事業ハ其ノ企業、技術、勞務、資材等ノ相互ノ調整ヲ缺キテ甚ダシク遲滯シ、之ガ國家諸重要事業ノ遂行ヲ阻害シツヽアル事實ハ憂慮ニ堪ヘザルモノアリ

抑々現下建築事業ノ遂行ガ多大ノ困難ニ逢着シツツアル根本原因ハ建築事業ノ多クガ官民ヲ通ジテ凡ユル企業ノ一部トシテ計畫セラレ、之等ヲ集約スル建築事業トシテノ綜合的統制ヲ缺クガ故ニ外ナラズ、即チ企業自體ノ輕重緩急ノ調整ナク、又此ノ企業ト技術、勞務、資材ガ互ニ遊離跛行シ、爲ニ施工見込ノ立タザル工事ノ亂立ト人的、物的ノ效率低下ヲ惹起シツヽアルニヨルモノナリ

建築界ノ現況ヲ通鑑スルニ建築行政機構ハ中央地方ヲ通ジテ各部局ニ分局シテ之ニ一貫性ナク、官公民諸營繕機關亦隨所ニ分散シテ連絡、協同ヲ缺キ、民間設計監理業ハ企業者ト施工業者ノ中間ニ各個散在シテ甚シキ技術能率ノ低下ヲ來シツヽアルト共ニ、更ニ施工業ハ其ノ施工能力ノ基礎タル資材勞務ノ獲得ニ何等ノ成算ナクシテ過大ナル發注ヲ背負ヒツヽアリ、然モ建築勞務者ハ工場勞務者ニ比シテ著シク不利、不安定ナル境遇ニアルタメ、近年急激ナル減少ヲ來シ、ソノ不足ハ今ヤ建築工事ニ對シ致命的問題トナリツヽアリ

依テ之等建築ニ關スル各般ノ缺陷ヲ除去シ、其ノ總力ヲ擧ゲテ國家ノ要請ニ應ゼシムベキ方策ヲ要約スレバ次ノ如シ

1. 企畫院ニ建築企畫中樞機關ヲ設ケ、官民ヲ問ハズ總テノ建築事業計畫ヲ此所ニ集中セシメ人的資源ニ基ク綜合的統制及實施ノ能率的調整ヲ計ルコト
2. 內務省ニ建政局ヲ設ケ、前項建築企畫中樞機關ニ關聯シテ建築行政ノ一元的中央執行機關タラシムルコト
3. 地方廳ニ建政部局ヲ設ケ、地方廳ニ於ケル建築行政事務ノ一元的執行機關タラシムルコト
4. 各省ノ營繕部局ハ省單位ニ統一シ（地方團體ノ營繕亦之ニ倣フモノトス）共通普遍的ナルモノハコレヲ大藏省ニ於テ取纏メ實施セシムルコト
5. 民間設計監理業者ハコレヲ適當ノ能力ヲ有スル單位ニ整理シタル上業務統制體ヲ組織セシメ、建政局ト關聯シテ其ノ業務ノ受囑、割當ニ當ラシムルト共ニ建築士制度ヲ設ケ、建築士ヲシテ建築法規上技術ニ關スル規定事項ニ付責任ヲ持タシムルコト
6. 施工業者ヲシテ重要產業團體令ニ依ル統制會ノ如キ統制體ヲ組織セシメ、施工業者ノ事業經營ニツキ統制並ニ指導監督ヲ爲サシメ、建政局ト關聯シテ各業者ヘノ業務ノ配分ヲ爲スト共ニ、材料生產部門並ニ別ニ設置セラルベキ勞務統制機關トノ連繫ニ於テ資、材勞務ノ需給ニツキ必要ナル措置ヲ講ゼシムルコト
尙各施工業者ハ大工、左官等ノ熟練工ヲ相當數ニ直屬セシムルモノトス
7. 建築技術者ノ必然加入ニヨル建築技術者團體ヲ組織シ、全科學技術者團體ノ一部門トシテ技術院ノ指導ノ下ニ學術技藝ノ研鑽、建築技術者ノ指導、統制及建築國策ヘノ奉仕、協贊ニ關スル事業ヲ行ヘシムルコト

前記各項ニ基ク諸機關ノ相互關係ヲ圖示スレバ第一、二、三圖ノ如シ

之等ノ諸方策ニ就キ建築行政、營繕、建築設計監督、建築施工、建築技術者團體ノ五部門ニ分チテ詳述スレバ別紙ノ如シ

追テ本案ニ於テハ主トシテ建築ノ立場ヨリ之ヲ考察セルモ、建築ト密接不可分ノ關係ニ在ル土木ト一括シテ考察スル場合ニ付テモ亦略適合スルモノト思料ス、例ヘバ建設工業統制機關ハ土木建築ヲ含ミ、又內務省內ニ建政局ト土木行政局ト併置セラルヽガ如キモノトス

第 1. 建築行政部門

1. 建築企畫中樞機構ノ設置

要　旨　國家全般ノ建築事業ニ關シ、人的並物的資源ニ基キ計畫ノ綜合的統制及實施ノ能率的調整ヲ計ル爲メ、企畫院ノ機構ヲ整備擴充スルコト

說　明　建築關係部門ノ全能力ニ付常ニ大綱ヲ掌握シ、以テ國防計畫、生產擴充計畫、人口計畫、國土計畫及物資、勞務並資金ノ動員計畫等ノ重要國家計畫ニ之ヲ反映セシメ、其ノ適正化ニ資スルト共ニ之ニ基ク建築事業ノ實施ヲ調整シ、建築施設ノ利用ヲ有効適切ナラシムルハ時局焦眉ノ急務ナリ

仍テ企畫院ノ機構ヲ整備擴充シ、建築企畫ノ中樞機關ヲ設置シ、官民關係者ヨリ成ル委員會ヲ併置シ、以テ下記事項ヲ急遽實施スルヲ緊要トス

記

（1）建築事業ノ綜合計畫ニ關スル事項
（年度事業計畫、四期別事業計畫、地方別事業計畫、官民別事業計畫等）

（2）建築事業ノ實施ノ調整ニ關スル事項
（物資ノ配合、工事發注受注ノ調整技術者、勞務者ノ需給調整等）

附　記　建築企畫ニ關聯セル下記事項ハ技術院ニ於テ實施スルモノトス

記

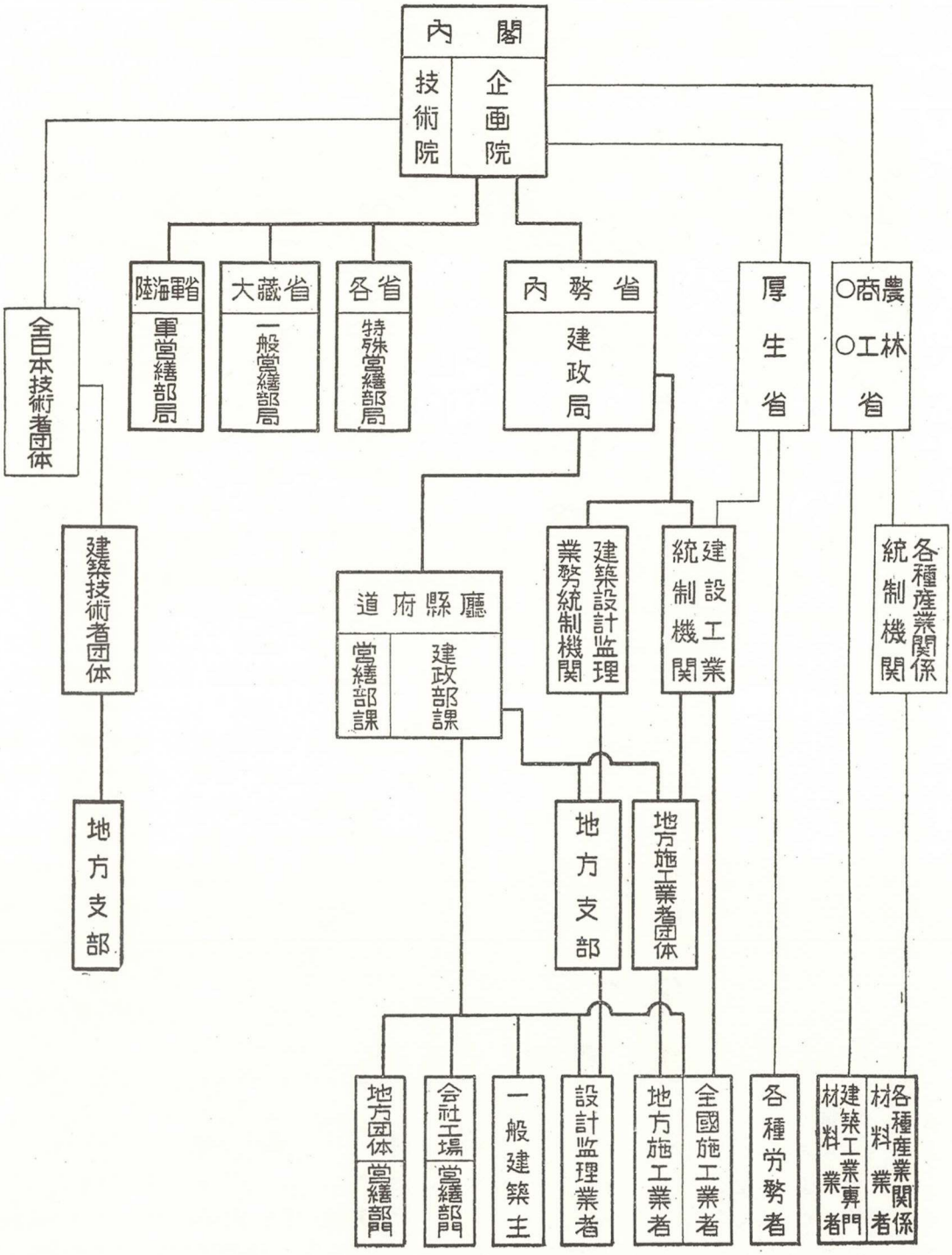
（1）建築ノ基本的規格並價格ニ關スル事項
（材料、構造、用途等ニ依ル規格、規格別價格等）

（2）建築ニ關スル基礎的調査及研究ニ關スル事項
（基礎的調査、研究ノ統制等）

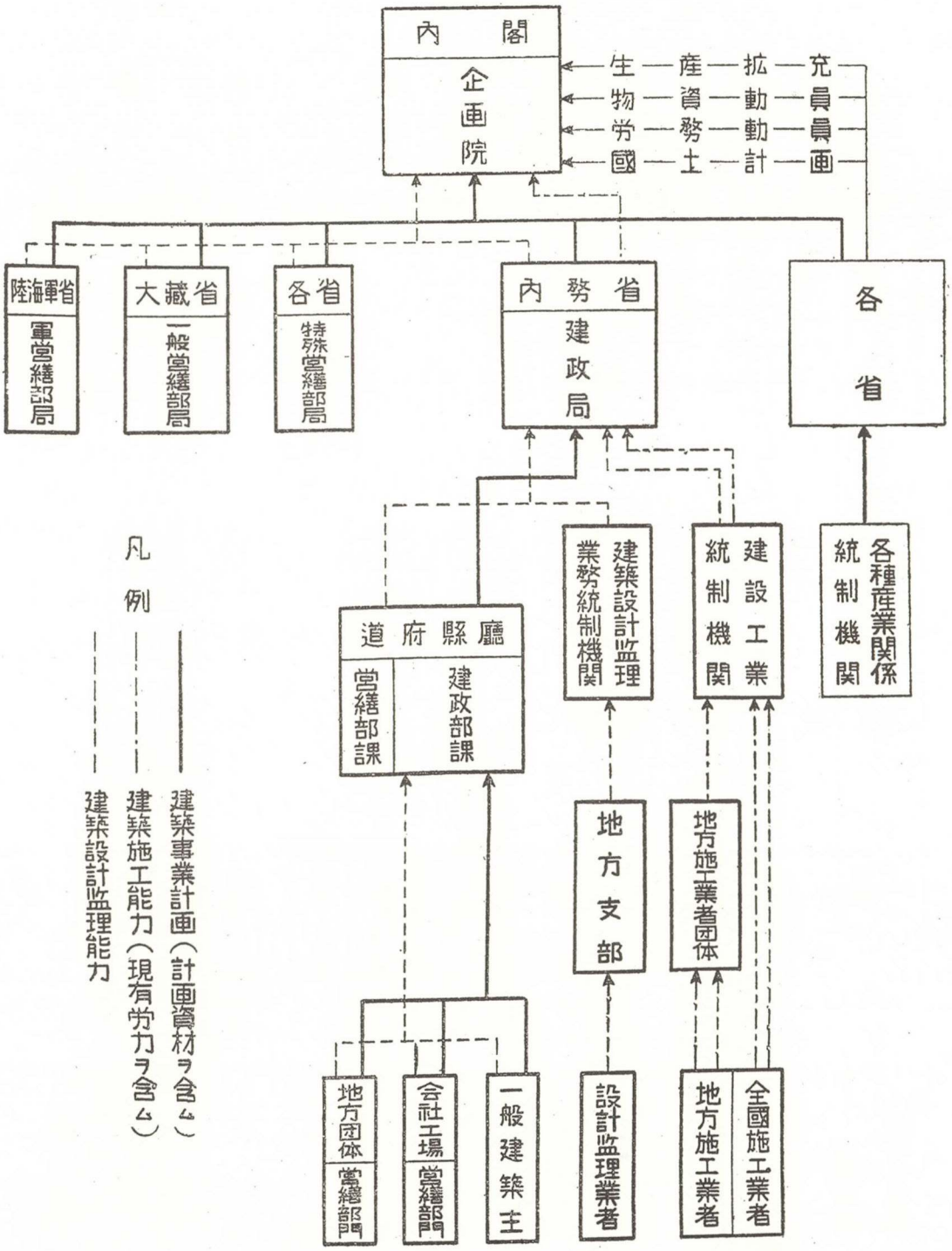
2. 中央官廳ニ於ケル建築行政機構ノ整理統合

現在內務、厚生、商工、文部ノ各省ニ於ケル建築行政事務ハ相互ニ密接不可分ノ關係ニ在

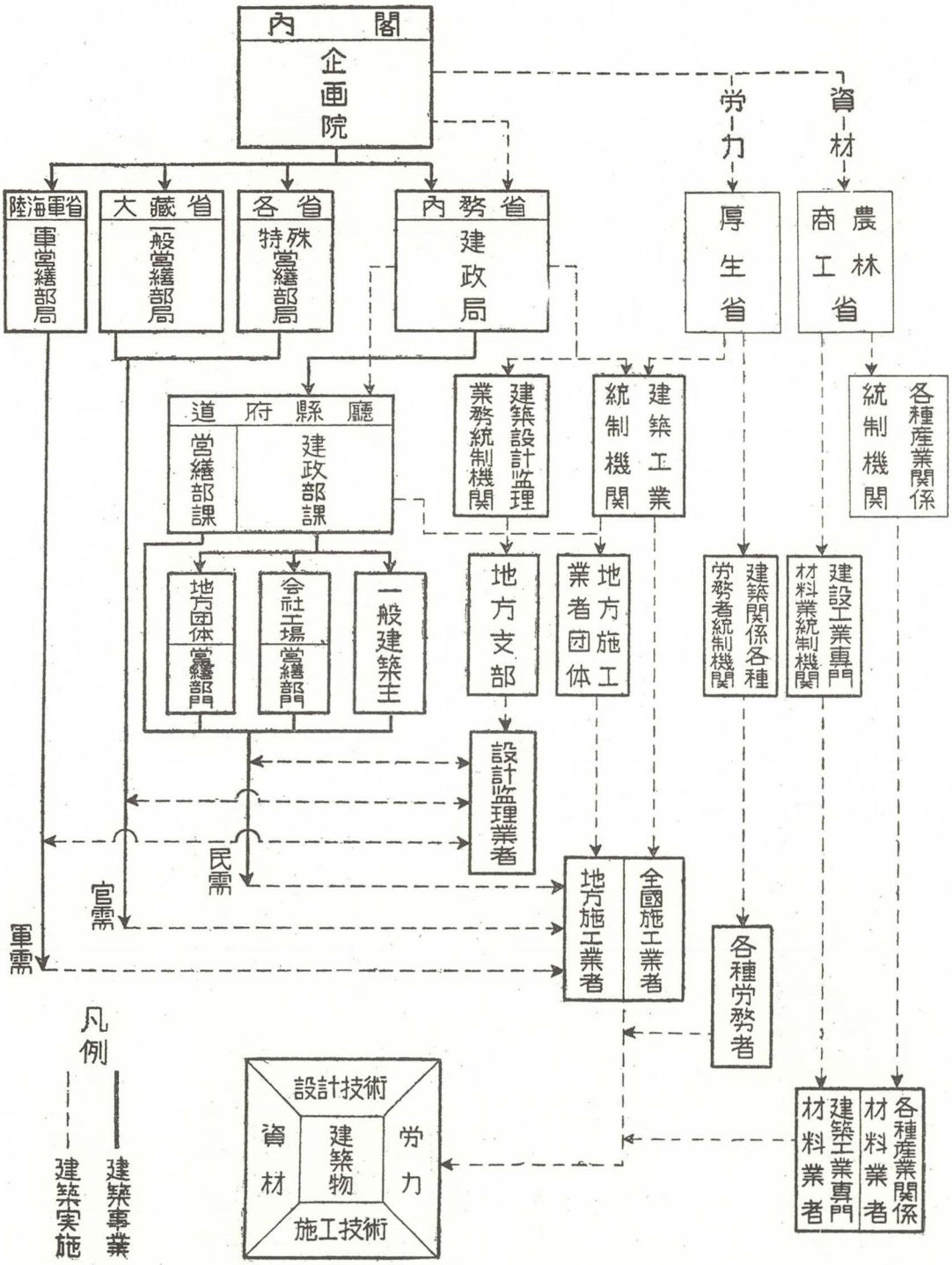
第一圖　建築各部門ノ組織系統及監督關係要圖



第二圖　建築綜合計画樹立ニ必要ナル関係資料ノ蒐集系統要圖



第三圖　建築綜合計画ヨリ建築工事実施ニ至ル調整系統要圖



リ、而モ時ニ指導統制ニ綜合一貫性ヲ缺キ必要建築物ノ適正敏速ナル充足ヲ阻害セル事例勘カラズ、依ツテ之ヲ整理統合シテ内務省ニ建政局（假稱）ヲ設ケ、次記事項ヲ總括的ニ實施セシメ、以テ建築企畫中樞機構ニ關聯セル建築行政ノ一元的執行機關タラシメ防空、生産擴充、體位向上等高度國防國家建設ニ遺憾ナカラシムルコト

記

（1） 都市政造並ニ市街地造成ニ關スル事項
（都市建築形態ノ改造、一團地住宅經營、危險地區ノ整理改修等）

（2） 建築ノ需給調整ニ關スル事項
（住宅等ノ供給並ニ管理、建築資材ノ統制並ニ配給、建築技術者勞務者ノ需給調整等）

（3） 建築各般ノ指導統制ニ關スル事項
（建築敷地及ビ一般並ニ特殊建築物ノ規制、建築設計者、建築施工業者ノ指導監督等）

參考

（1） 建政局ノ組織
建政局ニ數個ノ部課ヲ置キ、別ニ技能者及ビ資材ノ配給ニ關スル官民關係者ヨリ成ル委員會ヲ設クルモノトス
例ヘバ各課ノ分掌事務ハ大要次ノ如キモノトス

第一課
1. 建築設計者及建築施工業者等ノ指導監督ニ關スル事項
2. 建築資金ノ補助、助成並ニ融通ニ關スル事項
3. 宅地建物ノ價格、地代家賃、賃金ニ關スル事項
4. 建築統計並ニ調査ニ關スル事項

第二課
1. 建築敷地及建築物ノ規格統制ニ關スル事項
2. 集團的建築形態並ニ建築開發地ノ統制ニ關スル事項
3. 建築用資材ノ需給統制並ニ配給ニ關スル事項
4. 建築技術者及勞務者ノ需給調整ニ關スル事項

第三課
1. 建築物及建築工事ノ指導監督ニ關スル事項
2. 建築地區及建築地ノ造成並ニ指導監督ニ關スル事項
3. 危險地區及不良地區ノ整理改修ニ關スル事項
4. 防火改修及防火地區ノ造成ニ關スル事項

第四課
1. 住宅ノ供給等ニ關スル事項
2. 住宅供給機關ノ指導監督ニ關スル事項
3. 住宅ノ改善等ニ關スル事項

（2） 建政局ニ整理統合スベキ建築行政事務
現在各省ニ於テ分掌セル建築ニ關スル行政事務ニシテ建政局ニ整理統合スベキモノ概ネ次ノ如シ
1. 市街地建築物法ニ關スル事項（内務省防空局）
2. 防火改修ニ關スル事務（同）
3. 住宅供給ニ關スル事務（厚生省生活局）
4. 地代家賃ニ關スル事務（同）
5. 不良住宅地區ノ改善ニ關スル事務（同）
6. 工事場ノ安全衛生ニ關スル事務（同　勞働局）
7. 木造建物建築統制規則ニ關スル事務（商工省化學局）
8. 土木建築請負業者ノ組合ニ關スル事務（同）
9. 鐵鋼工作物築造許可規則ニ關スル事務（同　鐵鋼局）
10. 宅地建築物ノ價格統制ニ關スル事務（同　物價局）
11. 學校建築ノ指導監督ニ關スル事務（文部省普通學務局）

3. 地方廳ニ於ケル建築行政機構ノ一元化
地方廳ニ於ケル建築行政事務ハ數多ノ部課ニ

分掌セラルヽ爲メ、建築手續頗ル煩瑣ナルノミナラズ、時ニ指導方針ニ一貫性ヲ缺キ民衆ヲシテ歸趨ニ迷ハシムル事例勘カラズ、依テ建築手續ヲ簡易ナラシメ、指導方針ヲ常ニ綜合一貫セシメ、事務ノ能率ヲ增進シ、必需建築物ノ實現ヲ容易ナラシムル爲メ、地方廳ニ於ケル建築行政事務ヲ整理統合シ、一元的機構トシテ建政部課ヲ設ケ、下記事項ヲ一括處理スルモノトス

記

（1） 建築敷地ニ關スル事項
（2） 建築物及建築工事ニ關スル事項
（3） 建築資材ノ配給統制ニ關スル事項
（4） 住宅ノ供給並ニ管理ニ關スル事項
（5） 建築ノ價格統制ニ關スル事項
（6） 建築設計監理業者並ニ建築施工業者等ニ關スル事項

參考

地方廳ニ於ケル現行行政事務ニシテ建政部課ニ整理統合スベキモノ概ネ次ノ如シ

1. 市街建築物法ニ關スル事務 （警察部）
2. 建築工事場ノ取締ニ關スル事務 （ 同 ）
3. 建築施工業者、勞務者等ニ關スル事務 （ 同 ）
4. 警察令ニ基ク各種特殊建築物ノ取締ニ關スル事務 （ 同 ）
5. 住宅ニ關スル事務 （學務部）
6. 地代家賃ニ關スル事務 （ 同 ）
7. 學校建築ノ指導監督ニ關スル事務 （ 同 ）
8. 建築資材ノ配給統制ニ關スル事務 （經濟部）
9. 倉庫ノ取締ニ關スル事務 （ 同 ）
10. 都市計畫法ニ基ク建築取締ニ關スル事務 （土木部）
11. 其他中央法令、地方廳令中建築ニ關スル事務 以上

4. 建築行政ノ運營上必要ナル諸方策

前記中央地方ノ建築行政機構ノ整理統合ト平行シ建築士法ノ制定並ニ請負業者ノ組織化ヲ圖リ、建築調査機構ヲ整備スル等建築行政ノ運營上必要ナル諸方策ヲ講ズルヲ要ス

（1） 建築士法ノ制安並ニ建築施工業者ノ組織化ヲ圖ルコト

建築設計監理業者並ニ建築施工業者ノ技術的水準ノ向上ヲ圖ルト共ニ建築技術ニ關スル規定事項等ハ建築士ノ責任ニ於テ行ハシムル爲メ建築士法ヲ制定シ建築施工業者ノ組織ヲ法定シ以テ建築設計並ニ施工ノ能率ヲ增進シテ兼テ建築監督行政ニ人的餘力ヲ生ゼシメ他ノ綜合的指導統制ニ充ツルモノトス

（2） 建築調査機構ヲ整備スルコト

建築監督行政ノ圓滑ナル實施ニハ常ニ建築ノ動態並ニ靜態ヲ掌握スルヲ要スルヲ以テ調査資料ノ現狀ニ鑑ミ企畫統制ニ必要ナル調査ヲ爲ス機構ヲ整備スルモノトス

（3） 建築行政ノ運營ヲ完璧ナラシムル爲メ次ノ諸方策ヲ講ズルコト

1. 國土全般ニ建築ノ指導統制ヲ爲スコト

地方ニ於ケル建築物ハ建築技術ノ進運ニ伴ハズ、概シテ舊態依然タルモノアリ。保安衞生上看過スベカラザルモノ勘カラズ、依テ國民ノ建築ニ對スル認識ヲ更新セシムルト共ニ基本的事項ニ付地方ノ實情ニ則シ、規格ヲ定メ最小限度ノ規制ヲ爲シ以テ健全ナル建築施設ノ効用ヲ發揮セシムルモノトス

2. 密住木造都市ノ改造ヲ爲スコト

密住木造都市ノ無統制ナル膨脹及各種都市施設ノ偏在ハ都市防空上將來市民ノ保健上憂慮スベキ現象ナルニ鑑ミ、都市建築ノ形態、構造配列等ノ規制ニ重點ヲ置キ都市改造ノ具現ヲ圖ルモノトス

3. 市街地ノ建築開發統制ヲ爲スコト

郊外地ノ建築開發ノ現況ニ鑑ミ、其ノ合理的發展ヲ圖リ、圓滑ナル綜合的利用開發ヲ期スル爲メ、建築開發地區制ヲ設ケ諸般ノ都市施設ノ實施ト關聯セル建築開發統制ヲ爲スモノトス

第2. 營繕部門

1. 營繕機構ノ統制並ニ整備

（1） 營繕機構ノ統合、統制

1. 官廳ノ營繕ハ一省內ニ於テ分立スルヲ避ケ省單位ニ統一スルコト、而シテ共通普遍的ナルモノハ大藏省ニ於テ取纏メ取扱フコト

2. 地方團體ノ營繕ハ團體單位ニ統一スルコト

3. 官廳以外ノ營繕ハ國家ノ指導統制下ニ置クコト

說　明

營繕機關ガ各部局ニ小サク分立シテ從屬設置セラルヽモノアルハ、能率經費等ノ點ヨリ見テ遺憾勘カラズ、須ク省又ハ地方團體毎ニ整理統合スルヲ要ス、尙官以外ノ營繕ハ之ガ適正ナル運營ヲ圖ル爲メ地方長官ノ指導統制下ニ置キ、建政局ヲ通ジテ企畫院ニ於ケル建築企畫中樞機關トノ連絡ヲ計ルヲ要ス

（2） 營繕機關ノ整備

1. 營繕ヲ伴フベキ各種事業ニ付當初ヨリ之ガ企畫ニ參畫スベキコト

2. 建築物ノ設計、監理、經理等ニ關スル事務ノ外其ノ維持管理ノ事務ヲモ併セ行フベキコト

說　明

從來營繕機關ノ事務ハ殆ンド建物ノ建築ヲ主トシタルモ、各種ノ事業企畫ニ當初ヨリ參畫セシムルコトハ事業ノ適正化ヲ計ル爲ニ最モ必要ナリ、又一面建築施設ノ維持保全ヲ常ニ完璧ナラシメ他面之ガ供用、徵用等ニ關スル事務ニ具フル爲メ維持管理ヲ行フヲ要ス

2. 營繕事務ノ是正並ニ簡易化

（1） 會計法規ヲ改正シ適正價額ニヨリ隨意契約ヲ爲シ得ル條項ヲ擴張スルコト

說　明

從來會計法規上最低價格ヲ以テ落札ト爲スヲ常トスルノ結果種々ノ弊害ヲ生ジ居タリ、而シテ時局下建築施設ノ敏速ナル充足ヲ要スルニツレ一般競爭入札又ハ指名競爭入札ノ時宜ニ適セザル場合多キヲ加フルニ至レリ、依ツテ速ニ會計法規ヲ改メ特命ヲ爲シ得ル條項ヲ擴張スルヲ要ス

（2） 營繕機關ニ於テ行フ建築設計ニハ出來得ル限リ規格ヲ統一シ設計書ハ大綱主義ヲ採リ、詳細書ヲ要スル場合ニ在リテハ差支ナキ限リ之ヲ建築施工業者又ハ建築設計監理業者ニ委託スルコト

說　明

營繕機關ニ於ケル建築設計書ハ大綱ヲ明示スルヲ主眼トシ、詳細書ハ規格ノ統一ニ依リ省略スル方針ヲ採リ、必要已ムヲ得ザル實施設計書ハ建築施工業者ヲシテ之ヲ製造セシメ、又ハ建築設計監理業務統制機關ノ整備ニ伴ヒ之ニ委託スルコトハ設計並ニ施工上ノ能率ヲ增進スルコト大ナリ

第3　建築設計監理部門

1. 建築設計監理業務統制機關ノ設置

要　旨　建築設計監理業務ハ高度國防國家ノ樹立、大東亞戰爭ノ完遂ニ即應スル爲、各々適當ノ能力ヲ有スル業務ノ單位タラシメ、之ヲ統制シテ業務統制體ヲ組成スルモノトス

說　明　一切ノ建築ヲシテ國家ノ計畫、規制ニ即應シ國防、經濟、厚生、文化ノ領域ニ於テ、其價値ヲ最高度ニ發揮セシムル爲ニハ、設計監理業務ガ國家的義務ヲ擔フト共ニ、國家ノ支援ノ下ニ立チ且其業務單位體ハ充分ナル技術ト經驗ト並ニ適當ナル規模ノ組織トヲ有スルモノタルコトヲ要ス

又建築行政ノ運營ニ協力シ得ル爲ニハ業務單位體ハ職能的條件ヲ具備シ且ツ技能ニ於テ國家ノ規制スル基準ニ適合スル者ニ依ツテ指導統率セラルヽコトヲ要ス

上記ノ如ク業務單位體ヲ以テ建築設計監理業務統制體ヲ組成シ、下記要領ニ依リ本業務ノ總力ヲ集約シテ國家動員ニ即應センコトヲ期ス

（1） 建築設計監理業務ノ規制

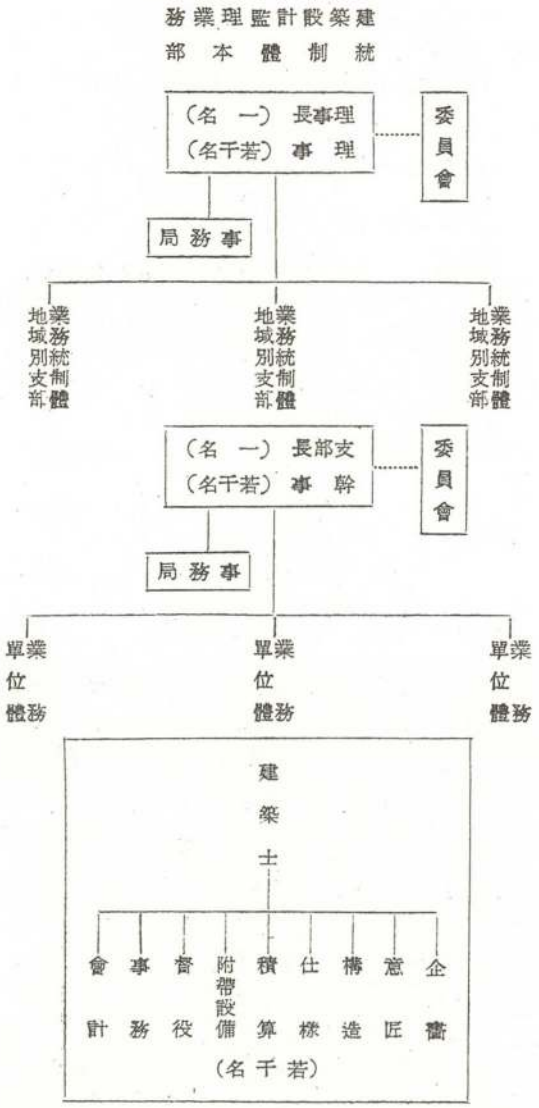
建築ニ關スル國家ノ企畫實現ニ協力セシメ法規上技術ニ關スル規定事項ニ付責任ヲ持タシムル爲、國家ハ建築設計監理ヲ行フ技術者及之ガ業務ニ關シ、適當ナル規制ヲナスモノトス

1. 建築士法（假稱）ノ制定
建築設計監理ヲナス爲ノ技術者資格ヲ規制シ且之ヲ適當ノ技術的等級＝分ツコト

2. 建築設計監理業務統制法ノ制定
建築設計監理業務＝付單位體及統制體ノ構成並＝運營＝關シ業務法ヲ制定スルコト

（2） 建築設計監理業務統制體ノ組成

1. 建築設計監理業務統制體ノ構成
建築設計監理業務統制法＝基キ建築設計監理業務統制體ヲ構成ス
構成ノ狀況ヘ次ノ如クスルモノトス



2. 建築設計監理業務統制體の事業
建築設計監理業務ガ國家動員＝即應シ得ル體勢ヲ整フル爲統制體ヘ次ノ如キ事業ヲ行フ

建築設計監理業務ノ受囑、割當
建築設計監理業務單位體並＝構成員ノ資格認定ト其ノ登錄
建築設計監理業務單位體構成員ノ調整並＝遊休能力ノ管理
建築設計監理業務用資材ノ配給
建築設計監理業務單位體構成員ノ錬成援護
建築士法＝基ク資格詮衡＝關スル協力

第 4 建築施工部門

1. 建設工業統制機關ノ設置

要旨 重要產業團體令＝依ル統制會ノ如キ施工業者ノ强力ナル統制團體ヲ組織シ、施工業者ノ事業經營＝付適確ナル統制ヲ行ハシムルモノトス

說明 建築施工業者ガ國家ノ要請ヲ充足センガ爲＝ハ左記要領＝基キ之ガ强力ナル組織化＝ヨリテ事業ノ統制ヲ圖リ、他種產業ト完全ナル連繫ヲ有スル新體制ヲ確立シ、施工業者ノ事業經營＝付統制並＝指導監督ヲ爲シ、各施工業者ヘノ業務ノ配分ヲ爲スト共＝資材、勞務ノ需給＝付適切ナル措置ヲ講ズルヲ要スベシ、斯クテ現行請負制度及競爭入札制度＝起因スル施工界ノ積弊モ同時＝解消スルヲ得ベシ
猶施工業界ノ實狀ハ其機構眞＝複雜多岐＝亘リ之ガ改編ハ容易ナラザルモノアルヲ以テ其ノ運營＝當リテハ組織ノ改革＝依リテ運營ノ發展ヲ阻害スルガ如キコト無キ樣留意シ必要＝應ジ漸次廣汎＝亘リ之ヲ實施スルモノトス

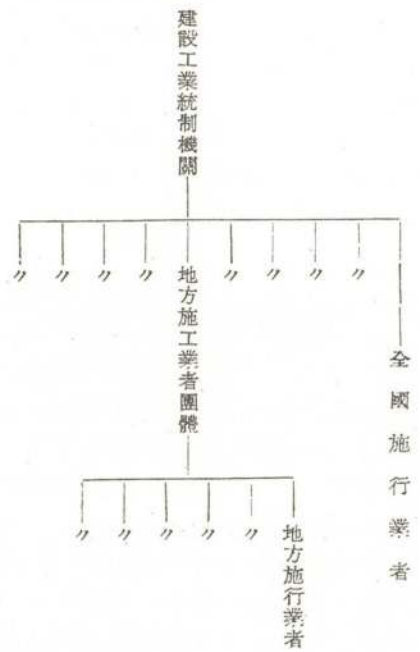
（1） 統制機關ノ組織
施工業者ノ能力ヲ調査シテ資格ヲ設定シ、統制機關ヲ設ケテ全國的＝統括ス。而シテ全國施工業者ト地方施工業者トヲ區分シ必要＝應ジテ業者ノ整理統合ヲ行フモノトス

其ノ要領次ノ如シ

尙大工、左官等ノ熟練工ハ統制機關ニ所屬セシメ漸次施工業者ニ直屬セシムルモノトシ、以テ施工業ヲシテ建設施工機關タルノ本質ヲ確保セシムルモノトス

1. 全國施工業者ノ數ヲ適當ニ定メ全國的施工ニ當ラシム
2. 全國施工業者ハ各々單獨ニテ直接統制機關ニ所屬セシム
3. 地方施工業者ハ主トシテ其所屬道府縣內工事施工ニ當ラシメ必要ニ應ジ統制機關ノ指令ニ依リ所屬外地方ノ工事施工ニ當ラシム
4. 地方施工業者ハ道府縣別ニ依リ道府縣施工業者團體ニ統括シソノ團體ヲ統制機關ニ所屬セシム
5. 府縣單位ノ地方區分ハ漸次可及的小數ブロツクニ統合スルモノトス
6. 業者ノ整理統合ニ對シテハ適當ニ之ヲ指導スルモノトス
7. 現存施工統制團體ハ本組織ニ吸收スルモノトス

以上ノ組織ヲ圖示スレバ次ノ如シ



附　記

1. 關係業者

建設工業統制機關ハ鐵鋼、セメント、木材運輸等建設工業以外ノ他種產業ニモ關係アル各業種別統制機關ニ對シテハソノ統制ニ參畫スルモノトシ、瓦、左官材料等ノ如キ建設工業專門ノ材料業及ビ部分工事業者ニ對シテハ夫々ノ業種別統制機關ノ設立ヲ圖リ之ト密接ナル連絡ヲ爲スモノトス

2. 勞務者

勞務ノ圓滑ナル配分ヲ期スル爲厚生省ト密接ナル連絡ヲ爲シ、特ニ建設工業所屬ノ勞務者ニ付テハ厚生省ヨリ其ノ權限ノ一部委讓ヲ受クルモノトス

（2）統制機關ノ事業

建設工業統制機關ノ目的トスル處ハ建設工業ノ綜合的統制運營ヲ爲シ以テ全國的建設計畫ノ立案ニ參畫シ、其遂行ニ協力セントスルニアリ、之ガ目的ヲ達成センガ爲メニハ工事上ノ委任ヲ受ケ次ノ如キ事業ヲ行フモノトス

1. 施工業者ノ統制指導監督

施工業者ノ事業經營ニツキ統制並ニ指導監督ヲ爲シ、コレニ要スル資材、資金、勞務ノ需給ニツキ必要ナル措置ヲ講ズルモノトス

2. 工事ノ割當

指定セラレタル優先順位ニ依リ工事ノ所要資材及ビ勞力ト睨ミ合セ、施工業者ニ對シソノ能力ニ應ジ工事ノ割當ヲ行フモノトス

3. 資材ノ配給

工事ノ割當ト共ニ所要資材ノ適正ナル配給ヲ爲スモノトス

4. 勞務者ノ配分

工事ノ割當ト共ニ所要勞務者ノ適正ナル配分ヲ爲スモノトス

5. 共同施設ノ運營

材料ノ共同購入、假設材料及ビ工事用機械器具類ノ共用並ニ補給及工事用共同施設ニツキ適當ナル措置ヲ講ズルモノトス

6. 價格規準ノ作定並ニ適正價格ノ判定

材料價格、勞働賃金並ニ工事單價等ノ規準ヲ作定スルト共ニ積算形式ノ統一ヲ爲シ原價計算ノ形式ヲ定メ工事價格ノ適正化ニ資

スルモノトシ、契約不調工事ニツキ適正價格ノ判定ヲ爲スモノトス

7. 不可抗力保險制度ノ設定

工事上ノ不可抗力又ハ不測ノ原因ニ依ル損害ヲ補償シ工事費ノ適正化ヲ圖ル爲メ適當ナル相互保險制度ヲ設定スルモノトス

8. 技術者ノ敎育並ニ補充

建設工業部門ノ要スル技術者ノ確保ヲ圖ル爲必要ナル方途ヲ講ジ且施工上必要ナル敎育ヲ施スモノトス

9. 其　他

施工業者ニ對シ施工ノ指導監督ヲ爲シ勞務者ノ養成ヲ圖リ其他勞務遊休時間ノ活用勞務者ノ厚生福利、産業報國精神ノ昂揚等ノ方途ヲ講ジ猶調査研究統計等建設工業ノ統制運營ニ必要ナル事業ヲ爲スモノトス

2. 建設工業統制機關ノ運營上必要ナル諸方策

（1） 片務契約ノ是正

建設工業部門ニ關スル工事契約ハ明治初年以來官廳會計法規ヲ根幹トシ官民共注文者ノ一方的主張ニ基ク片務契約ノ形式ヲ墨守シ來リ、其弊害尠カラズ、依テ會計法規ノ改正ヲ爲シ双務契約ニ改ムルヲ要ス

（2） 工事監督制度ノ改革

工事施工ノ監督ハ施工業者ノ責任ニ俟ツヲ本旨トシ、從來ノ如キ監督制度ハ之ヲ改メテ必要ナル指導其他ノ連絡ヲ主トシ施工ノ簡捷ト技術者ノ能率增進トヲ圖ルベキモノトス

第 5　建築技術者團體部門

一元的建築技術者團體ノ設置

要　旨

以上記述シ來レル建築各部門ノ機構ヲシテ良ク其ノ機能ヲ發揮シテ國家ノ要請ニ應ズル爲ニハ其ノ活動ノ中樞ヲ擔當スベキ建築技術者ガ優秀ナル技術的資質ヲ有シ、擧テ動員配置ニ就キ良ク協同ノ實ヲ擧グルヲ要ス

依テ建築技術者ノ資格ヲ考査シ之ガ必然加入ニ依ル單一建築技術者團體ヲ組織シ、全科學技術者團體ノ一部門トシテ技術院指導下ニ置キ次記事業ヲ行フモノトス

（1） 建築學術技藝ノ研讃

（2） 建築技術者ノ指導、統制

（3） 建築國策ヘノ奉仕、協贊

即チ前記行政、設計、施工等ニ關スル諸機構ヲ國家ノ縱割機構トスレバ、建築技術者團體ヘ之等ヲ橫斷スル橫割機構ニシテ、技術ノ研讃ト建築技術者ヲ通ジテ國家ノ建築事業ヲ內面ヨリ推進、高揚セシムベキ機關タルベク、次ノ組織要綱ニ依リ之ガ設置ヲ計ルモノトス

建築技術者團體組織要綱

（1） 目的ト事業

目　的	事業（特ニ强調スベキ）
1. 建築學術・技藝ノ研讃	調査、研究
	研究ノ企畫、綜合、奬勵補助研究ト實施ノ連絡
	建築部外ノ研究トノ連絡協力
2. 建築技術者ノ指導	會員ノ技術水準ノ向上
	會員ノ職域奉公ノ推進
3. 建築技術者ノ登錄配置保成	資格審査
	登錄、配置、徵用ヘノ協力、育成、保持
4. 建築各部門ノ綜合協力	行政、營繕、設計、施工勞務、材料等各部門ノ綜合連絡ト協力
5. 建築ト社會各部門トノ連絡、協力	政治、行政機關トノ連絡協力、産業、經濟團體トノ連絡、協力
	文化諸團體トノ連絡、協力
	勞務團體トノ連絡、協力
6. 建築國策ノ調査、研究並ニソノ實施ヘノ協力	政府ノ諮問ニ答ヘ又ハ政府ニ建議ス
	建築ニ關ル調査資料ノ蒐集
7. 建築敎育ノ振興、勞務者ノ技能向上	諸敎育機關トノ連絡、協力
	産業團體、勞務者團體ノ技術部、勞務部トノ連絡指導、協力

8. 建築ニ關スル社會認識ノ啓發普及　國防、產業、文化、厚生等ニ於ケル建築ノ重要性ニ關スル社會認識ノ啓發建築知識ヲ普及シ以テ國民生活ノ刷新ヲ圖ル

（2）會　員

第1種會員　必然加入會員

建築技術者

第2種會員　要請加入會員

建築技術者トノ協力ヲ要スルモノニシテ、本會ノ要請ニヨリ會員タルモノ

第3種會員　任意加入會員

建築技術者ヲ志望スル者、建築技術或ハ建築事業ニ關係ヲ有シ、ソノ攻究發達ヲ企圖スル者

（3）組　織

中央ニ本部ヲ置キ全國ヲ適當數ノ地區ニ分チテ、各々支部ヲ置キ、支部ハ當該地區ニ關スル會務ヲ分掌ス

本部ハ本會ノ主旨使命タル「學術・技術ノ研鑽」「建築國策ヘノ奉仕、協贊」「會員ノ指導、統制」ニ關スル事業ヲ行フタメ、研究部、事業部、會員部ノ三部ヲ以テ主翼構成トシ、地方支部又之レニ倣フモノトス

即チ研究部ハ行政、設計、構造、衞生等ノ專門部門及ビ國土計畫、防災、住居等ノ綜合部門ニ關スル科ヨリ成リ常時常該部門ニ關スル調查、研究ニ關スル會務ニ當ルモノトス

事業部ハ政策、統計、資料、刊行、啓發、宣傳、連絡ノ五科ヨリ成リ、常時政府ノ諮詢及ビ建議ニ關スル、基本調查資料ノ蒐集ニ關スル、刊行並ビニ社會一般ノ啓發・宣傳ニ關スル、建築各職域トノ連絡ニ關スル會務ニ當ルモノトス

會員部ハ登錄・配置、資格・保成、指導ノ三科ヨリ成リ、常時建築技術者ノ登錄、計畫的配置ニ關スル主務官廳ヘノ協力、又ソノ資格詮衡並ビニ所要數ノ確保ニ關スル會務ニ當ルト共ニ、全會員ヘノ指導並ビニ職域奉公准進ノ浸達ニ關スル會務ニ當ルモノトス

1. 本部役員及組織（附圖參照）

役　員

會　長　銓衡委員ノ推薦シタル者ニシテ主務長官ノ認可シタルモノヲ以テ充ツ

銓衡委員ハ建築ニ關シ經驗アル者及學識アル者ノ中ヨリ主務長官之レヲ指名ス

會長ハ會務ヲ統理ス

理事長　會長之レヲ指名ス

理事長ハ理事會ヲ掌理シ會務全般ニ渉リ會長ヲ補佐ス

理　事　理事四名ヲ置キ會長之レヲ指名ス

1名ハ總務部長トシ、本會ノ一般的事務ヲ分擔執行ス

1名ハ研究部長トシ、學術・技藝ノ研究ニ關スル事項ヲ擔當執行ス

1名ハ事業部長トシ、建築ノ社會活動ヘノ協贊ニ關スル事項ヲ擔當執行ス

1名ハ會員部長トシ、會員ノ資格・保成、登錄、配置並ビニ本會ノ指導推進ヲ全會員ニ浸達セシムル事項ヲ擔當執行ス

顧問及參與　關係大臣ソノ他ヲ顧問ニ關係官吏ソノ他ヲ參與ニ推スコトヲ得

理事會　理事會ハ理事長及理事ヲ以テ構成シ重要會務ヲ審理ス

支部長ハ理事ノ資格ニ於イテ理事會ニ出席シ審理ニ加ヘルコトヲ得

評議員會　地方支部選出ニヨル會員代表者ヲ評議員トシテ評議員會議ヲ構成シ會務遂行ニ對スル協力機關タルト共ニ會員總意ノ表明機關タラシム

部　局

總務部　庶務、研究、事業、會員ノ四部門ヨリナリ、各部門ハ夫々當該部長ノ指揮ヲ受クルト共ニ、總務部長ニヨリ統轄サル

研究部　別記諸專門部門及ビ綜合部門ノ科ヨリナリ、研究部長ニヨリ統轄サル

事業部　連絡、啓發、宣傳、刊行、統計・資料、政策ノ五科ヨリナリ、事業部長ニヨリ統轄サル

會員部　登錄、配置、資格、保成、指導ノ三科ヨリナリ、會員部長ニヨリ統轄サル

研究部　事業部、會員部ノ各科ニハ必要ニヨリ委員會ヲ置キ特定ノ問題ヲ研究調査スルモノトス

2. 地方役員及組織

役　員

支部長　地方詮衡委員ノ推薦シタル者ニシテ會長ノ認可シタル者ヲ以テ充ツ
地方詮衡委員ハ當該地方ニ在ル建築ニ關シ經驗アル者、學識アル者ノ內ヨリ會長之レヲ指名ス
支部長ハ地方支部會務ヲ統理ス

常務員長　支部長之レヲ指名ス
常務員長ハ常務員會ヲ掌理シ、支部會務全般ニ渉リ支部長ヲ補佐ス

常務員　支部長之レヲ指名ス
常務員長　1名
常務員　4名
事務委員長
研究委員長
事業委員長
會員委員長
事務委員長、研究委員長、事業委員長、會員委員長ハソレゾレ本部々長ニ倣ヒ地方支部ニ於ケル當該事項ヲ擔當執行ス

常務員會　常務員長、常務員ハ常務員會ヲ構成シ支部重要會務ヲ審理ス

地方評議員會議　當該支部選出ノ評議員ニヨリ地方評議員會議ヲ構成シ、支部會務遂行ニ對スル協力機關タルト共ニ會員意志ノ表明機關タラシム

部　局

事務室
研究委員會
事業委員會
會員委員會

本部ニ於ケル部ニ倣ヒ地方支部ニ於ケル當該會務ニ當ルモノトス

× × ×

（別冊1）

建築學會、日本建築協會ノ合併ニ依ル新團體ノ結成

要旨　吾國ニ大建築技術者團體タル建築學會、日本建築協會ノ兩會ヲ合併シ、同時ニ其ノ事業、組織ヲ刷新展開シ、以テ建築技術者ヲ中心トスル新團體ヲ結成スルコト

說明　一元的建築技術者團體ノ設置ニハ今後相當ノ日子ヲ要スベシ、然ルニ時局ハ實質的活動ヲ急務トスルヲ以テ次記要領ニ依ル新團體ノ成立ニ邁進スルト共ニ他方一元的建築技術者團體設置ヘノ一段階タラシメントス

記

建築學會、日本建築協會ノ合併ニヨル建築技術者ノ新團體組織要綱

（1）會　名　日本建築學協會（假稱）

（2）目　的　建築技術者ノ總力ヲ總合發揮シ建築ニ關スル學術・技藝ノ發達並ニ建築事業ノ伸展ヲ圖リ、以テ國家ノ興隆ニ資スルヲ目的トス

（3）本部支部　本會ハ事務所ヲ東京ニ置キ、全國ヲ適當ノ地區ニ分チテ支部ヲ置ク
差當リ豫想サルヽ支部次ノ如シ
關東支部
東海支部
關西支部
中國支部
九州支部

（4）事　業　學術・技藝ノ研鑽ニ關スル事業
技術者ノ指導、推進ニ關スル事業
技術者ノ育成、保持、配置ニ關スル事業
建築各部門ノ綜合、協力ニ關スル事業
建築ト社會各部門トノ連絡、協力ニ關スル事業
建築國策ノ調査、研究並ニソノ實施ニ關スル事業
建築教育ノ振興、勞務者ノ技能向上ニ關スル事業
建築ニ關スル社會認識ノ啓發、

普及ニ關スル事業

（5） 會　員

正　員　イ、一定資格ニ合格スル建築技術者

ロ、建築學或ハ建築事業ニ關係ヲ有シ一定資格ニ合格セル者

（學會—正員、特別員、協會—會員、特別贊助員）

准　員　イ、建築技術者

ロ、個人又ハ團體ニシテ建築學或ハ建築事業ニ關係ヲ有シ若クハ建築學ニ志アル者

（學會—准員、贊成員　協會—普通贊助員）

名譽員　建築學或ハ建築事業ニ關係ヲ有スル者ニシテ本會ノ要請ニヨリ會員タル者

（學會—ナシ、協會—名譽贊助員）

特別員　個人又ハ團體ニシテ年額50圓以上ヲ納付スル者

（學會—終身贊成員　協會—終身贊助員）

（6） 役　員

理　事	若干名
會　長	1　名
副會長	4　名
總務部長	1　名
研究部長	1　名
事業部長	1　名
會員部長	1　名
支部長	若干名

會長ハ正員ノ投票ニヨリ正員中ヨリ之ヲ選擧ス

副會長ハ正員ノ投票ニヨリ正員中ヨリ之ヲ選擧ス、但シ內2名ハ東京府及隣接縣下在住正員中ヨリ、內1名ハ大阪府及隣接府縣下在住正員中ヨリ之ヲ選擧スルモノトス

總務部長、研究部長、事業部長、會員部長ハ常議員會ニ於テ之レヲ選擧ス

支部長ハ各支部正員ノ投票ニヨリ當該支部正員中ヨリ之ヲ選擧ス

常議員　名

常議員ハ正員ノ投票ヲ以テ別ニ定ムル地域內在住正員中ヨリ　名ニツキ1名ノ割合ヲ以テ之ヲ選擧ス

（7） 組　織

本部ニ次ノ4部ヲ置ク、（一元的建築技術者團體ノ附圖參照　但シ理事會ノ構成ハ異ル）

總　務　部
研　究　部
事　業　部
會　員　部

總務部ハ本會ノ一般的事務ニ當ル

研究部ハ行政、設計、構造、施工、防災、教育等ノ科ヨリナリ、各々當時當該部門ノ研究ニ當ル

事業部ハ連絡、啓發・宣傳、刊行、統計・資料、政策ノ5科ヨリナリ、各々常時當該部門ノ事業ニ當ル

會員部ハ登錄・資格、指導ノ2科ヨリナリ各々會員ニ關スル當該事務ニ當ル

地方支部ノ役員、組織ハ地方的事情、會員數ニヨリ差異アルベキモ大體本部ノソレニ倣フモノトス

（8） 收　支

本部費ト支部費トノ關係ニ就テハ會費其ノ他ノ收入ハ一應全部本部ニ集メ各支部ニ對シ

事務費　大體當該支部會員數ニ比例スル基本維持費トシテ配布ス

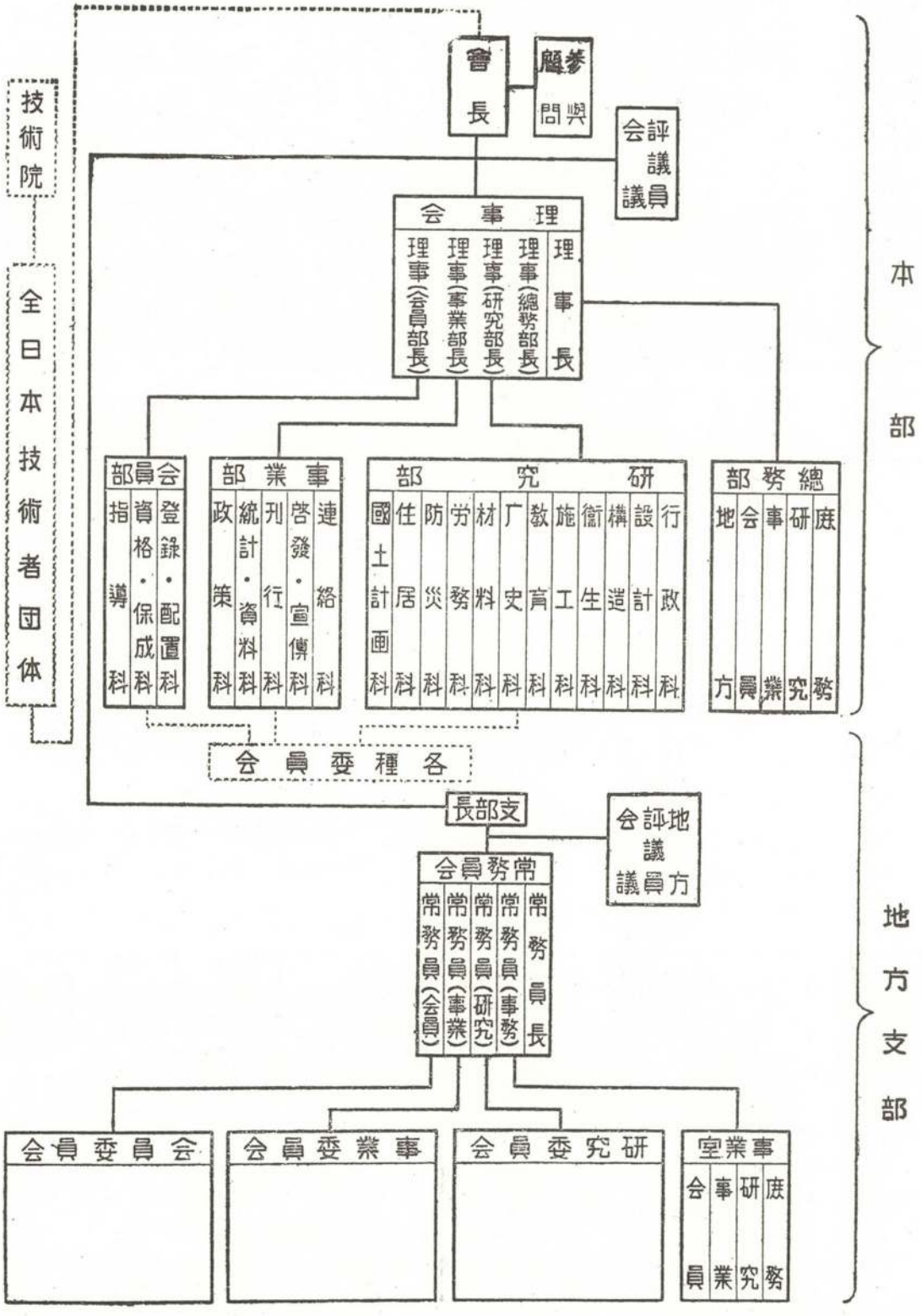
事業費　本會計及ビ特別會計中ノ事業費ノ內地方支部ニ於テ施行スベキ事業計畫ニ基キ配布ス

× × ×

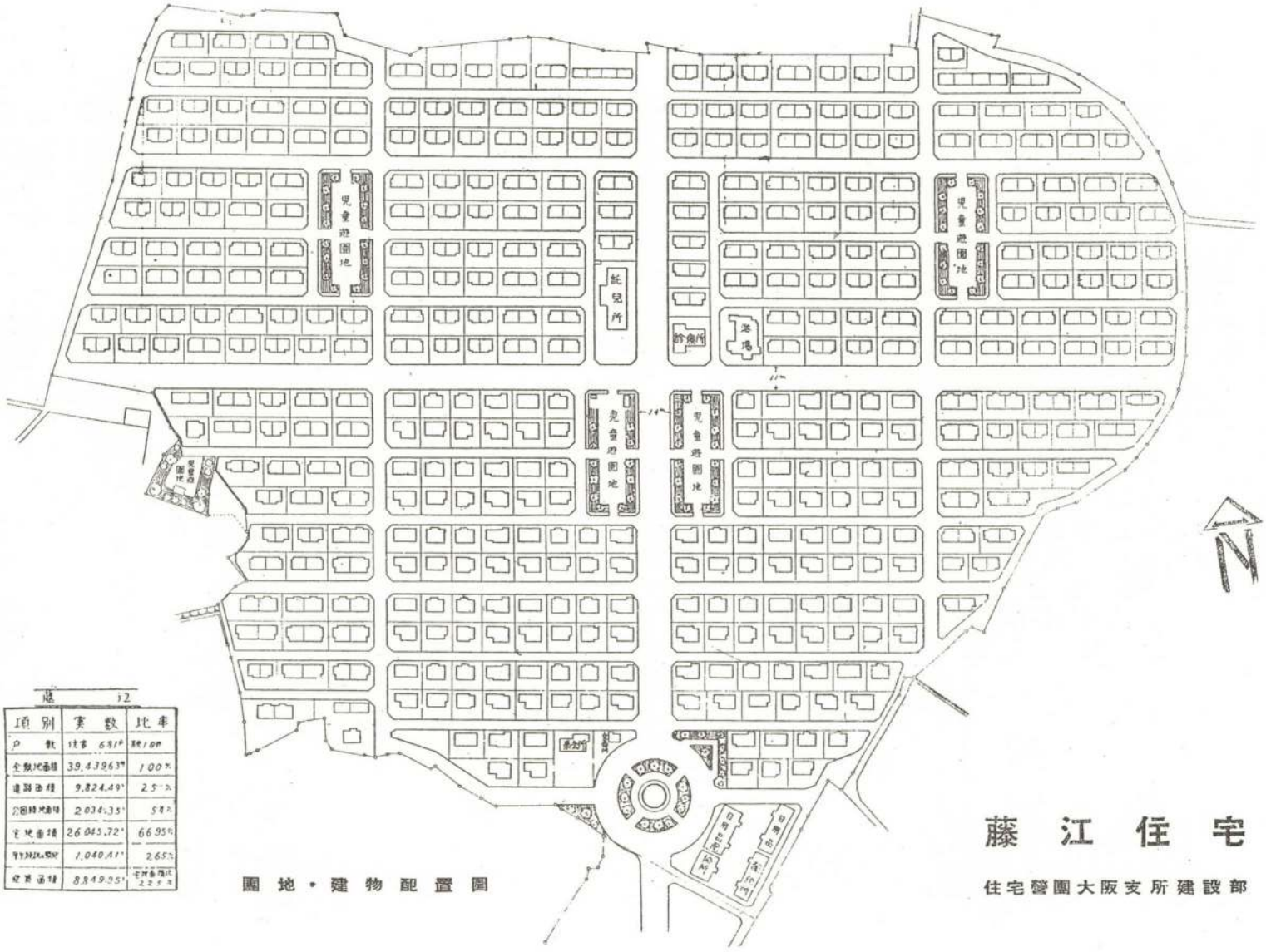
（別冊2）

建築聯合協議會ノ設置

戰爭ノ完遂ト、新體制確立ノ途上ニ於テ、我建築界ノ問題ト之ニ對スル方策ハ、極メテ複雜多岐ナルモノアリ、然モ之等ノ立案並ビニ實施ハ建築全


技術院
全日本技術者団体
会長
顧問参与
評議員会
理事会
理事長
理事(総務部長)
理事(研究部長)
理事(事業部長)
理事(会員部長)
総務部
庶務
研究
事業
会員
地方
研究部
行政科
設計科
構造科
施工科
衛生科
教育科
厂史科
材料科
労務科
防災科
住居科
国土計画科
事業部
連絡科
啓発・宣傳科
刊行科
統計・資料科
政策科
会員部
登録・配置科
資格・保成科
指導科
各種委員会
本部
支部長
地方評議員会
常務員会
常務員長
常務員(事務)
常務員(研究)
常務員(事業)
常務員(会員)
会員委員会
会員委業事
会員委究研
事業室
庶務
研究
事業
会員
地方支部

32頁へ續く



項別	実数	比率
P 数	住宅 691戸	戸/ha
全敷地面積	39,439.63㎡	100%
道路面積	9,824.49㎡	25%
公園緑地面積	2,034.35㎡	5%
宅地面積	26,045.72㎡	66.95%
[illegible]	1,040.41㎡	2.65%
建築面積	8,849.95㎡	宅地面積に対する 22.5%

藤江住宅

住宅營團大阪支所建設部

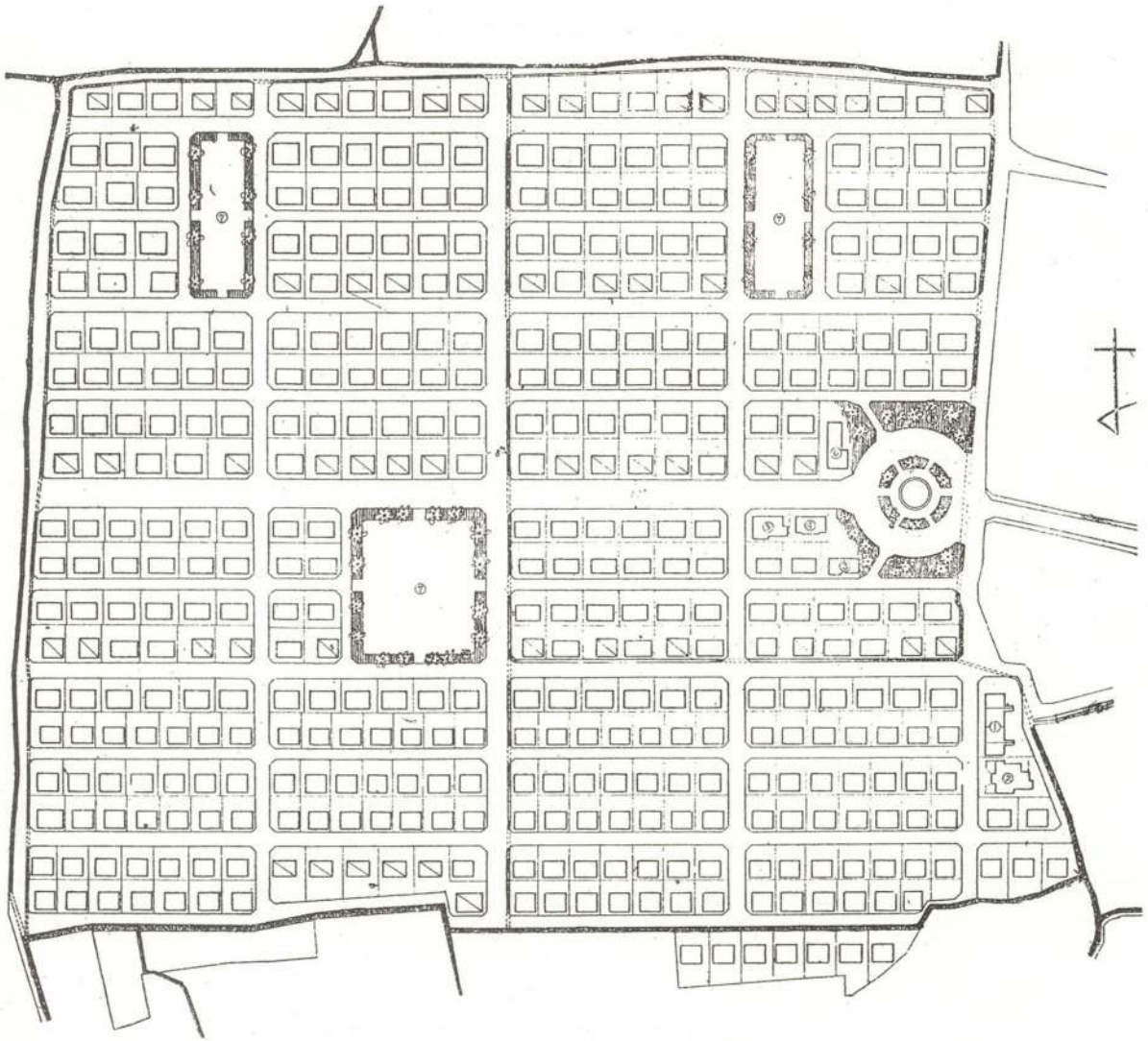
圖地・建物配置圖

初芝住宅

團地・建物配置圖

住宅營團大阪支所建設部

尺例	
①	日用品配給所
②	公衆浴場
③	管理所
④	理髮店
⑤	診療所
⑥	集會所
⑦	兒童遊園
⑧	緑地
□	平家建
□	二階建



初芝		
項別	實數	比率
戸數	428戸	其他 10戸
全敷地面積	37,820㎡	100%
道路面積	10,055㎡	26.7%
公園緑地面積	2,380㎡	6.3%
宅地面積	24,915㎡	65.8%
學校敷地面積	470㎡	1.2%
建蔽面積	7,611.04㎡	宅地面積に對し 30.5

大阪府下南海電車高野線初芝驛より東へ約5丁、附近は南海電車の住宅經營地であり、土地高燥にして空氣清澄閑靜なる田園住宅鄉である。建物は一般分讓用各型の平家及二階建住宅の他日用品配給所。集會所。診療所。公衆浴場。理髮店管理所。巡査派出所等約 430 戸、敷地約 12,500平方米、私設上水道も設備すべく目下竣功を急いでゐる。圖面は其の配置圖



生活の建築的雜感

辰巳孝雄

△行政簡素化

諸官廳が行政の簡素化と稱へて、新機構が實施された。從來の各分野もそれに伴つて、新時代語に變へられて、例へば保險課が厚生課とか、錬成課に。人事課が要員課等と云ふ樣に……。しかしそれがあたかも行政の簡素化といふ物々しい掛聲のみで、單に名稱の改正かの如く、むしろ簡素化が複雜化されたやうに思はれ、實施後も以前同樣に所謂お役所振つて、むつかしい取扱が續行されてゐるのである。

退廳一時間延長だといひ、土曜日は13時迄勤務だといつて、私達は既に幾日か過して來た。政府がかやうな、低能率的なものを實施して、時局下にふさはしい斷行だとすませてゐては、一般民間に廣くとやかく云はれるのも當然の問題であらう。

△鐵道沿線建築規定といふものを……。

かゝる行政簡素化の夥しい職務の中に、我々國鐵建築人は、線路上を步行巡回し、中間建物の保守巡回に、工事監督に、或は現場調査にあらゆる仕事が連日横はつてゐる。

凡そ鐵道の所局建築物には、諸氏の目にひき立てるものは一としてないが、我々の手に依つて追々改修と整正につとめて行くとしても、せつかく氣持の良い列車に乘つても、雜然とした裏町の長屋の凸凹が沿線に横たはつてゐては、非常に不愉快なものである。

殊に鐵道等の沿線筋は、鐵粉や音響振動に依つて、生活の休息場所たる長屋であらう住宅も、不健康であり、保安上も面白からざる結果にあるのである。

勿論現行建築法規には、かゝる問題が間接に示されてゐるとしても、今一應美觀即ち形態及び構造等を充分取締つた。鐵道沿線建築規定といつた樣なものを制定してもらひたいものだ。さすれば重要交通機關の輸送も、火災其他防空、保安上も非常に暖和せられると共に、我々の目に映じる光景も又、愉快なものと改められるであらう。

△二重生活と住宅

そんな事を考へ乍ら、大阪驛で新聞を買つて電車に飛乘つた。

丁度「聲」の欄に〝去る10月15日から國鐵が全國一齊に24時制を實施したが、政府では一般に午前午後の活用で良いと告示してゐる。しからば我々は、交通機關に對しては、例の24時制に馴れねばならない折柄、一方では從來通り午前午後を、一方では13時、14時……と活用しなければならぬといふ、非常に複雜な事實である。丁度尺貫法と米法云々〟……。

——そうした1例にかゝはらず、一體我々の日常が、如何に多くの二重生活を營んでゐるか?。

試みに——

我々は下駄もはけば、靴も用ふる。洋服を着ければ、勿論和服をも着る。腰坐式で生活もし、疊の上でも坐居する。

しかし男子の服裝が、最近殆どが洋服を主としてゐるが、婦人に於ては和服の日もあれば、洋服

の日もある。それには靴下も要れば、足袋も必要である。其他下駄、靴、下着、更に装飾品から化粧迄が二元的な生活を行ひつゝあるのであり、衣料切符の制定で、近頃の若い婦人のブツブツ云ふのも當然な話である。

それに伴ふ家具調度も、みんな二重に扱はれて居り、かゝる生活が我々日本住宅の現實に及ぼす影響も、又複雑な形式に移變される問題である。

だが、日本の住宅がかゝる和洋を混合した形式に推移されるものでは無く、又するものでも無く矢張り純粋な日本の風土と氣候、それに風習をも包含した、日本人として眞に合理的な生活形式のもとに新しい構成が生れなければならないのである。

△國民服と住宅形式

日本人の體質・氣候・風土を基準として、從來の純和服を改造して國民服が出來たが、例の24時制の如く生活の上に充分活用出來ぬものなれば何もならない。

しかし、以上は餘談であつて、順次それに移りつゝあるものであり、早急にすべての二重生活が單純的に標準化されて來つゝある秋、一人我々の住宅のみが樂觀すべき問題ではなく、これ又新しい構想のもとに具現しなければならない問題なのである。

國民服が勿論婦女子に迄も及ぶ事は、既に動きつゝある大勢を以てすれば容易であり、純然たる坐式から腰坐式に移變することが可能なる問題であらう。

かゝる生活樣式が、住宅に必然的に樣式の移變をも要求しつゝある時、現在の住宅を簡單に合理的な住居に、充たすことは容易な問題ではないのである。

我々はこの與へられた住宅形式の問題を、從來の建築樣式を基準とし、我々の新生活に適した構成態を以て、新しい住宅への實現に向つて進まねばならないと思ふ。

新聞の「聲」に於ける〃二重生活〃が、私にこんな餘談を以つてくれ、はツと氣がつくと、電車は終點驛に迫つて大きいアナンスが「19時20分發……」と、かの24時制實施後の〃午前午後崇拜者〃に對して皮肉そうに擴がつて行く。

（筆者は大阪鐵道局・建築士）

奎堂先生と上棟式

津田　鑿

國家の重臣として多年國事に鞅掌功績多き清浦奎吾伯、11月5日薨去の報に襟を正して謹んで哀悼瞑目久ふした。

私事で恐縮ではあれど、昭和10年の春奎堂會より伯爵の米壽を御祝する爲熱海の別邸として米壽庵を新築送呈の計畫があり、その依頼を受け、始めて伯爵に御面接の機會を得た。間取や樣式其他の設備に就いて御希望を伺ふと、只萬事專門家に一任可然との餘りにも簡單過ぎた御返事で、實は如何なるものを作つてよいか甚だ迷つたが、誠意をこめて設計を進め、幸ひ實行に移つた。

程なく上棟式の日が來た。當日午前現場で式を濟し、熱海ホテルの普通食堂で、關係者約50名晝餐を兼ね聊か祝宴を催すことになり、伯の御注意によりなるべく質素にと從つて會費は持寄り、しかも普通の定食、頗る簡單なものであつた。然るに卓上シヤンペンのコツプが各自の前に置かれてあるので、上戸連は早速眼を丸くして左右にさゝやき始めた。今日の會費は定食程度であるのに、シヤンペンが出るとは幹事さんの大奮發か、或は間違ではあるまいかと、頗る賑やかである。と世話人のひとりは、今にその譯がわかるからと微苦笑して居られた。定食は型の如く順次に運ばれ、いよいよデザードコースに入り、幹事の一人が今日迄の經過と、誠にさゝやかではあるが、豫定通りに竣工して御使用くださるやう、その日の一日も速やかならんことを念願すると結んだ。

そこで伯爵から一場の御挨拶があつた。今回は皆さんに大變御迷惑をかけ、誠に恐縮千萬である私が明年迎へる米壽を祝つて別莊を作つてくださることは誠に辱ないが、實を申すと世の中に妾と別莊程仕末にならぬ厄介なものはあるまいと平素考へて居つた。先年京都ホテルの前隅の方に塵芥捨場があつて、見晴しのよい場所であんな所に芥を捨て、不汚にして置くのはもつたいないものと

ついよけいなにくまれ口をすべらした。同行の人々が、それでは一つ私の爲に別莊でも作りましては如何かと、とんでもない話が持ち上つた。口は禍の基であると後悔したが、早速妾と別莊不濟論を一席辨じて非常線を張つてをいたが、段々と本物になつて計畫が進んで居るらしいとの注進、是れには大弱り。貧的な自分が別莊なんて贅澤なものを持つたら到底やり切れん。之れは一つ出來ない相談を持ち出すに限ると考へ、それにはとんでもない無理な注文を連發して見た。

眺望のよい丈けに建物の敷地を工作するになるべく少面積とし、崖は危險でないやうに又無暗に樹木を倒さず風致を損せぬこと、又上り坂は樂に自動車の往復出來るやう、或は給水には筧から鈴の音のするような風流に流れて來るのではこまる。勢のよいしかも清水で序に漉過して飲用には差支のない良質のものに限るとか、電柱は兎角目障のものあれば、地下に限るとか、曰く何々と種々厄介なるべく素人考へでは不可能らしい難題をならべ立て、別莊が作られぬやう心ひそかに祈つた。

所が人の力は偉いもので、總てはそれぞれ其道の專門の方々の學識經驗で譯もなく解決、且つ各位の御骨折の御蔭で美事に別莊は出來上り、頭をかいて謹んで御禮を申上げ、住居してみると、決して惡るいものではないが、それ丈け關係御一同の盡力と、其の勞に對し非常に感謝恐縮して居ります。

今回又も京都には溫泉がないのは物足らぬうらみがある。追々老境に向ふ私に大好物の湯がこんこんと湧出る溫泉のある此の地に、しかも米壽庵を建てゝくださるとなると、是非義理にも明年迄は命をつないでをく必要があるので、例により再三辭退したが、遂に本日上棟式が濟み、此處も亦眺望絕佳海と綠に惠まれ、山の上に登る道路を造るには相當難物多大の費用と工夫を要することであらう。崖下には瓦斯タンクがある。あれがどかんと來ては大變と、例により無理難題を述べなる可く、家の出來ぬやう骨を折ると、流石は其道の達人揃、既にそんなことは調査濟、何んの不安もないらしく、水道、給湯、電氣、其他の設備には諸君の盡力で解決。もう斯くなると男らしく兜をぬいで、本日の上棟式に列席の覺悟をきめ、あと三ケ月の後には新らしい木の香も床しい新築の別莊を頂戴することになればなんたる幸福か。誠に嬉しく感慨無量である。何分宜敷と極めて御謙遜なる御挨拶であつた。

時に何か心計りの御禮のしるしを致したいと考へますが、清貧の私には何も出來ません。幸ひ茲に　恐れ多くも　竹の園生　から年末重臣賜るシヤンペンの一瓶が大切に保存してあります。波々とは參らないかも知れませんが、一滴も殘さず飲み干して頂き度いと。一同恐縮有難謹んで乾杯列席者一同互に流石は大政治家である。なんとあざやかな御挨拶であると感銘を深くした。

工事は幸ひ順調に進み、豫定の通り移轉の運びとなり、不肖も其の責任の一部を果し、一と安心をした。

尙伯の日常は國事に盡力の外何もない新聞紙上其他に傳へらるゝ如く、實に偉大なる政治家である。長壽の秘訣を伺ふものがあると、伯は如何なる日も晝食後の約2時間は必ず外出散步運動を日課とするのみと話された。

健康と健啖家當時八十七歲の高齡にもかゝわらず、其の時分の洋定食は相當豐富な內容であつたが、平氣で召上るには若輩のものども一同驚いてゐた。

書齋には揮毫依賴の渦高く積み重ねられた紙や絹地には定めし御弱りの樣子であつたらうと恐察した。

人の生涯中最大の慶事である婚姻に高砂の仲人を引受けられたこと七十五回迄は確かに記憶があるが、あと幾人であつたか即座には一寸思ひ出しにくいと目出度御話があつた。

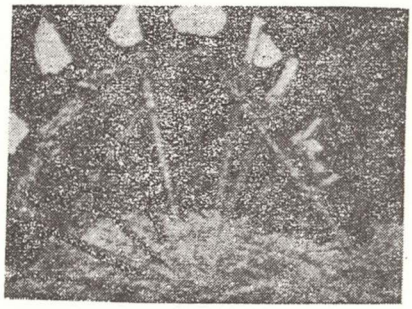
葬儀の當日、十一月としては惠まれたる暖かな小春日和。天氣は淸朗、定刻に參會する人々三丁餘にあまり、延々として數列の人垣を造り、如何に故人の德を敬慕する人士の多きか元勳を送るに相應しき盛儀であつた。

偉大なる政治家として國家の重臣を失ひたるは返々も遺憾の至り、衷心より深く哀悼申上げ、茲に謹んで冥福を御祈する次第である。

告別式より歸りて記す　　昭和17年11月10日

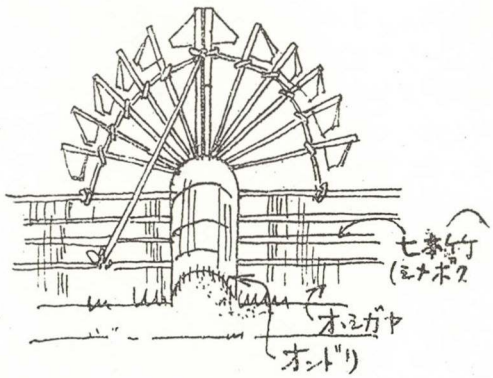
（筆者は津田鑿建築設計監督事務所長）

やばさみ

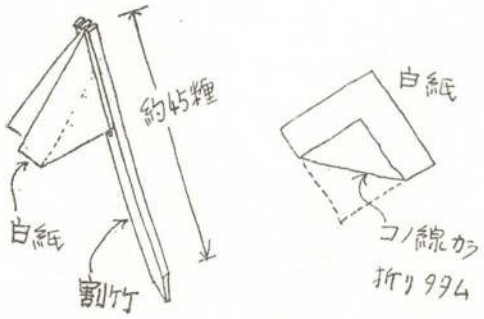


山口　正

文字通り胸をつく急坂88町、始めは天瀧の支流や、そのうねりに沿つて美しく耕された田畑、村落などがひとあし毎につづまつてゆくのを樂しみながら登つたが、次第に息が喘み胸のさわぎが激しくなると、これは容易ならぬ登攀行を企てたものだと悔ひる心が頭を占めた。しかし、ほどなく眺望臺のようなところへ着き、眼下に遠州灘や濱名湖の大景ををさめると、忽ち元氣をとりもどして、坂下まで乘つて來たバスの中の和やかな空氣を思ひ浮べた。『あきわへ行くだ』『あきわさまへ參詣するだでね』などの地方訛にまじつてキビキビした兵隊さんの朗らかな會話が車中に輕い笑ひをただよはせてゐた。『俺んとこへがんかとは何の事ですかと聞きに來をつたから敎へてやつたよ、眼下とかいてがんかと讀むんじや、わかつたか貴樣は俺のがんかじや、トナ』。眺望を眼下にたのしみながら、なるほど眼下は目下に通ずるわいと、さきにはさして氣にもとめなかつた事が、ほゝえましく思ひ出されて、心も和み身も輕くなり、續く急坂への足どりを早めて行つた。この邊ではしよいこといふ荷負臺に何10瓩もあらう石材をつけて、にんぼうといふ杖をたよりに汗をふきふき登る人々を、すまないような氣もちで追ひぬけながら、氣おひこんだ自分は、もう頂上めざしてまつしぐらである。老杉にまじつて、造花のように赤いもみぢや蔦の葉が、汗ばんだ目を涼しくする。日は11月の初旬、秋冬の間にあつて、寒くはなく暑くもなく、陽光は樹頭にあたつて、すみきつた大空へはね返されて行つた。參詣の客はひつきりなく續くのだが、山は不思議なほどの靜けさである。ひぶせ（防火とかいてひぶせとよむ）の神樣として靈驗あらたかな、このあきわさま（遠江國周智郡犬居町、縣社秋葉神社）へ自分が出かけて來たのは、この夏、美濃國武儀郡の洲原村で民家の棟上中央に、このあきわさまを祀り、やばさみといふものを飾つてゐるのを發見したので、その實體を把まんがためである。やばさみといふのは、**カツト**と**第1圖**とに示す如く、棟の中央のおんどり（針目覆の名稱）に、白紙を挾んだ串12本を扇の形に突きさし繩でかがつたものである。**カツト**のようなのを末廣形といひ、別に花形といふのもある。末廣形の方は印度孔雀の冠羽に似て居り、花形の方は眞孔雀のそれのようでもあり、又シクラメンの鉢植のような相貌をも呈する。洲原村では、草葺の材料に、はながやとおばな（**第4圖參照**）に小麥稈を用ひる外、殆ど大麥稈を用ひるのであるが、別に葺師といつた專門職はないらしく、近隣のすけあひ（助合）で素人が寄りあつて葺くのであつて、針や鋏を用ひず、鎌とやねいたと稱する簡單なたゝき板を使つて雜作なく葺きあげる。葺きあげて最後のこわず（押へ竹のこと）で仕舞をつけると、こんどはのたれと稱する一抱へもある藁束を棟に据え、これをこわずにとり、その上にほしがやをおき、莚を敷いてしめぼく（七本竹ともいふ）をこわずにとると、棟は出來上るのであるが、繩で葺いた場合には、そのしめぼくをこわずにとつた針目の數だけのおんどり



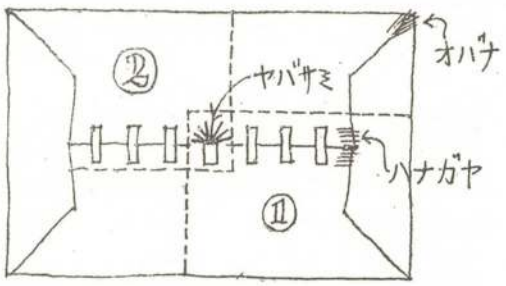
第1圖



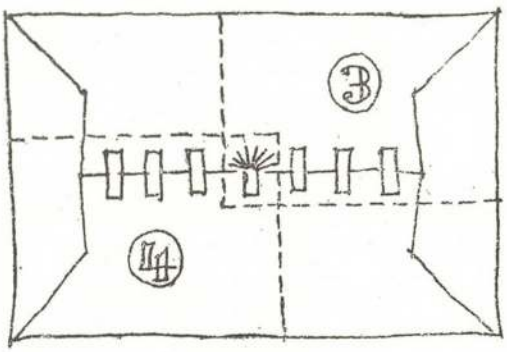
第 2 圖

を据える。針金葺きで實用上おんどりを必要としない場合には、中央に１ケ所だけおんどりをおくおんどりをおくと、葺師達は棟上に正座して拍手してあきわさまを拜み、あらかじめ作つておいた第2圖の如きやばさみの串をそのおんどりに突き立てるのである。そして神酒供物を棟にふりかけそのお下りをいただく。やばさみは御幣をかたどつたものであるといひ、串の長さは約45糎、末廣形、花形共12本、中央の２本は合せて１本にする。近火の際には、ぬれむしろを持つて屋根にかけ上り、破風に蓋するのであるが、その時、このやばさみの串を拔いて莚をつきさしてとめる。串の先には白紙が挾んであるから、その位置は夜目にも明かである。田舍の夜は街燈や窓を洩れる燈火がないから、月のない夜は、ほんとうのまつくらやみである。そんな時に、近火に映えだされた白紙の串が、どんなに重寶であるかは想像に餘りがあらう。他の地方での話であるが、棟から鎖や藤蔓を軒端近くまで甩ひ下らせてゐる場合に、よくその先端に貝殻がつけてあるのは、やはり夜目にその綱の位置を明示する目的を持つてゐるのである。12本の串は、１年12ケ月を表はすともいひ12支を意味するともいはれ、この白紙を裁斷するには、磯れを忌み、鋏やほうちようを用ひず、專ら鎌を用ひ、やばさみは年毎に新しく作りかへられる。大體、大麥稈はくさりが早いから、この邊では４年目毎に葺きかへる。その葺きかへの順序が一寸變つてゐる。それは第4圖と第5圖とに示す如く、やばさみのあるおんどりをとりこんで屋根を四つに區切り、今年①の部分を葺きかへると來年は②を、その次の年は③、つづいて④といふ風に順次毎年四分の一づつを葺きかへるので、ひらの部分は４年に１回、棟の部分は２年に１回、やばさみは毎年更新される事になる。こういふ葺きかへ方であるために、姿圖では第3圖にみる如く、新舊葺草による色合の相違が顯著になり、一種變つた風貌を呈する。こんな葺きかへ方は、美濃とか丹後とかの特有の方法であつて、普通には横に水平に葺きつぐ事はあつても、こんなに縦に垂直にひらの部分で葺きつぐ事はあまりやらない。これは葺草のくさりが早いために、その修繕方法に、規約といふか公式といふか、一つの定まつた方式が出來たわけなのである。丘陵に桑海のままに建ちならんだ草屋根が、この葺きかへ意匠とやばさみとのために、特異なそして美しい景觀を呈してゐるのは、日本民家の一名勝地として推す價値があると認める。

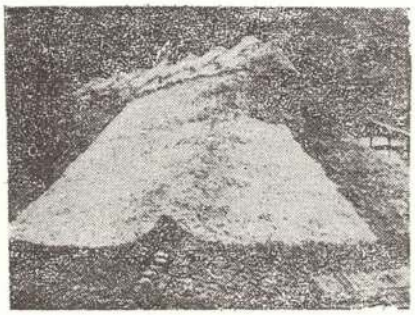
さて、こうしてあきわさまを祀るといふ事と、この實用上の目的との外に、やばさみには如何なる意義があるか。こうした形象を家の棟に飾ることの意義如何。が次の問題である。そして更に、何の故に、こうした形象が誕生したかを考へねばならない。必然この形をとるべき何らかの理由が



第 3 圖



第 4 圖



第5圖

あつたに相違ない。そこで自分は、その理由を究めたいばかりに、濱松から電車で45分、更にバス1時間半、それからの急坂38町を遠しとせず、この秋葉神社へでかけて來たのであつたが、こゝでもその理由は明かにならず、判明したのは、日本全國から講を造つて參詣する中でも、美濃國は信仰最もあつく、わけても洲原村は御札をいただく數が極めて多いといふ事だけであつた。かくて、民間に於ける傳承も採取されず、何等參考となすべき資料も無いとなると、今を昔につなぐ橋は、形象に關する心理學的考察より外に術はないであらう。自分は今この橋をかけわたしてみる前に、秋葉神社に關する說明を古い書きものから、少しく拔いて紹介する必要を感づる。

『國史辭典』には

秋葉神社　靜岡縣（遠江）周智郡犬居町秋葉山に鎭座。火之迦具土神（ひのかぐつちのかみ）を祀る。舊名岐氣保神創建年代未詳。中古秋葉寺と稱する佛刹建立せられ、本社の神を稱して秋葉大權現といふ。東海の靈場として聞こえ、防火の神として信仰せらる。（明治5年秋葉神社と改稱）特殊神事、12月15日の防火祭、一に秋葉の火祭といふ。

とあり、これで要をつくしてゐるが、『東海道名所圖繪』の著者は更に詳しい傳記を述べた上、次のような事をかきとめてゐる。

古緣起舊記等は、享祿天文の間、甲州武田信玄が騷擾に罹つて兵燹の爲に燒亡す、只秋葉神社觀音堂わづかに遺り、寶記は寺僧携へて逃免るゝゆへ今に存在す。甲州亂妨の軍勢堂社を燒き拂はんとて、數多の火をかくれども、棟上より白水流れ出て火災を免る、これらの應驗著しければ、近年都鄙の參詣晝夜を嫌はず、蟻の如く道につどひ、秋葉講とて國々縣々にて多くの人數を聚め、月參には宿々の泊札、辻々別れ路の標石、あるひは石燈爐を建て、常夜を照らす。（中略）此御神の靈驗かずかずの中に、第一には弓箭刀杖の横難を免れ、第二には火災燒亡の危急を免れ、第三には洪水沈沒の難を免れさせ給ふ。中古兵火の時も軍卒多く損じ、その餘煙によつて社頭の檜皮少し火に焦せる時、水雲起りて忽ち消す、これ今に遺りて見へたり。火伏鎭護の神德度生化益の方便、海內一圓に信敬せずといふ事なし。

で、問題は、この棟上より白水流れ出てとか、水雲起りて忽ち消すなどの文句である。白水流出水雲と更に簡約してみると、このやばさみがなんとなく、白水、水雲をかたどつたものであるような氣がするのである。こうした考へ方——形象の心理學的考察——はいはば一寸した直感である。推理推論抜きの甚だ非科學的な考へ方ではあるが現在の多くのものに、こういふ考へ方を適切に働かせば、案外その根源をつき得るのではないかと考へる。凡そ、現代人の頭で、昔をおしはかる程危險な事はない。物事によつては、昔の人と、今の人とは、たゞ單に人間の形體に於いてのみ辛じて同じであるといふに過ぎない場合もあらう。坪內逍遙、幸田露伴などは、現代人の頭で歷史上の人物を解釋すべきでないと說き『上代の彫刻』の著者は『歷史的批判は必ずしも現代的標準では行かない。自然主義的な尺度で天平藝術を計ることは無理であらう』と述べてゐる。まことにその通りである。ではあるが、また一方、現代人の頭も結局は現代に先行する前代の頭、更にその前の昔の人の頭の上に、1個1個五輪の塔の如く積み重ねて來た頭の塔の、一番上のやつが現代人の頭である事に相違ないのだから、こゝにやばさみ考を以つて例示した如く、形象の心理學的考察、或ひはまた構造の心理學的考察などによつて、多くの疑問を解決に導く事が出來るものと考へる。遺構と文獻とを唯一つの手がかりと考へてゐるような事では、既にとり去られ、既に燒き亡された多くのものを持つ建築の歷史は、所詮成立するものではあるまい。社寺建築史を以つて、日本建築史

5頁へ續く

會報

常務會

（第22回）

時　12月2日午後5時40分—6時30分
所　集會室
出席者　理事
竹腰副會長　松本副會長
常務　佐藤主記　中西主記
西澤主記　藪中主記
小林主計　松久保主計　大下編輯　錦田編輯

議事
1. 四會聯合協定の工事請負規程に關する件
2. 事務員昇給並に下半期賞與に關する件
3. 會員詮衡

報告
1. 10月分會計報告
2. 入營、出征、除隊報告

（第23回）

時　12月21日午後5時10分—6時10分
所　陳列場
出席者　理事
片岡會長　松本副會長
監事　池田監事
常務　中西主記　西澤主記
藪中主記　松久保主計　大下編輯　小林編輯　錦田編輯

議事
1. 學會、協會合併問題協議委員に關する件
2. 全日本科學技術團體聯合會より本會會誌寄贈方依頼の件
3. 事務員下半期昇給並に賞與の件
4. 會員詮衡

報告
1. 11月分會計報告
2. 入營、除隊報告

通常總會

1. 昭和17年11月28日大阪市北區中之島3丁目3番地朝日ビルヂングに於て通常總會を開會す
1. 出席者次の通り會員27名

伊藤　和夫	池田　宮彦
今津　義勝	尾龜清四郎
大下順三郎	岡本正次郎
片岡　安	川勝　健二
桐本　楠雅	小林　清
小林　三造	左谷　陽亮
坂本　啓一	鈴木　孫市
橘　嘉一	中西　六郎
中野順次郎	後出　清範
林　良信	伴野　貞三
松久保敬三	松本　儀八
三浦　茂	三藤　清三
水原　旭	籔中　一良
山口　正	

1. 午後5時40分開會會長理事片岡安氏議長となり只今出席者24名なるも本日は再度の召集に付定款第24條但書により定數を問はず本會成立の旨を宣し直ちに選擧を行ふ

選擧

第1監事選擧

第2評議員半數改選

議長投票洩れの有無を確めたる後右一括して開票する旨を告げ開票立會人として下記5氏を指名し其の承諾を得たり

伊藤　和夫君　川勝　健二君
中野順次郎君　伴野　貞三君
三浦　茂君

以上5名は直ちに別室に於て開票されたき旨を告げ右立會人は投函を別室に移し開票に着手す

1. 議長只今開票中なるも時間の都合上休憩せず進行して差支へなきやを諮り一同賛成ありたるを以て次の議事に移る旨を宣す

第1號議案　昭和17年度事業報告

中西主記常務より別紙事業報告を詳細說明あり

議長質問の有無を問ひたるに質問者なく一同諒承

第2號議案　昭和16年度決算報告並に剰餘金處分の件

松久保主計常務より別表により詳細說明ありて後池田監事より帳簿其他を査閲したるも謬謬なき旨を告げて證明あり尙住友信託株式會社により會計の內容を檢査照合されある旨を附言す

議長より質問なきやを問ひたるも質問者なく滿場一致承認に決定

第3號議案　昭和18年度收支豫算の件

議長別表により內容の概略を說明の上時局の推移によりては之に卽應する樣編成上苦心研究以て萬遺憾なからしめんとする旨を述べ尙大體17年度に準じて記念事業繼續が主たる事業となるべき見込なること附言する處あり

更に記念事業の大綱は中西主記より報告の通りなるが目下未了の事業進捗中なるを以て夫々の結末を告げたる後更めて內容及決算等詳細報告する旨を述ぶ議長質問の有無を問ひたるに評議員小林淸氏より支部設置問題に

關る說明方要求あり之に對し松久保主計より目下折角研究中なるも正式に機關に諮る運びまでに至らざるも不取敢18年度豫算面には豫算費中に相當考慮を加へ計上しある旨を答ふ

議長　本件は新體制問題即ち學會對協會が時局に即應せんとする氣運濃厚となりつゝあり近き將來に於て或る新體制に向ふべき過程にあるを以て之等も考慮し折角善處中なることを附言す其他質問なきやを諮りたるも質問者なく依て議長より本案承認のことを認めて差支なきやを諮りたるに異議者なく滿場一致可決確定

議長　只今開票立會人より選擧の結果を通告ありたる旨を告げ次の通り發表す

監事選擧開票結果

總投票數　1.396票
內無効　14票
差引有効票數　1.382票
當選　686票　池田宮彥氏
同　686票　鈴木一幸氏
次點　2票　生駒忠彥氏
（以下略）

評議員半數改選開票結果

總投票數　2.247票
內無効　23票
差引有効票數　2.224票
當選　79票　林　良信氏
〃　79票　堀內四知丸氏
〃　76票　伊東　正也氏
〃　76票　藪中　一良氏
〃　75票　井上　一雄氏
〃　75票　大下順三郎氏
〃　75票　長尾　清一氏
〃　74票　生駒　忠彥氏
〃　74票　篠原　清孝氏
〃　74票　瀧澤　眞弓氏
〃　74票　棚橋　諒氏
〃　73票　秋山　圭氏
〃　73票　岩尾　保衞氏
當選　73票　川勝　健二氏
〃　73票　楠瀨　徹氏
〃　73票　小林　清氏
〃　73票　中野順次郎氏
〃　73票　堀井　啓治氏
〃　73票　增井　敏克氏
〃　73票　三浦　茂氏
〃　73票　水原　旭氏
〃　73票　山口　正氏
〃　72票　石原　達偉氏
〃　73票　岩佐　信也氏
〃　72票　岡田　達彌氏
〃　72票　笹岡美代吉氏
〃　72票　竹內佐平治氏
〃　72票　野中　駒市氏
〃　72票　藤阪捨治郎氏
〃　72票　矢田　鐵藏氏
次點　4票　石井　春雄氏
〃　2票　池田　宮彥氏
〃　2票　岩崎甚太郎氏
〃　2票　鈴木　一幸氏
（以下略）

議長以上の通り夫々當選されし旨を宣す（一同拍手）

1. 次で議長より本議事錄の代表署名者に次の2氏を指名し其の承諾を得たり
岡本正次郎君　林　良信君
1. 議長本日の總會は之を以て閉會する旨を宣す時に午後6時50分

評議員會

1. 昭和17年12月3月大阪市北區中之島3丁目3番地朝日ビルヂングに於て評議員會を開會す
1. 出席者次の通り評議員39名

秋山　圭　井上　一雄
伊東　正也　生駒　忠彥
池田谷久吉　石原　達偉
岩尾　保衞　岩佐　信也
尾龜清四郎　大下順三郎
岡田　達彌　岡野　寬次
景山　正明　片岡　安
川勝　健二　楠瀨　徹
黑田　茂　小林　三造
佐藤正次郎　坂本　啓一
菅原　徹郎　瀧澤　眞弓
谷　民藏　中島　喜平
中西　六郎　中野順次郎
長尾　清一　錦田　直一
野中　駒市　林　良信
藤阪捨治郎　松久保敬三
松本　儀八　三浦　茂
水原　旭　道田泰治郎
矢田　鐵藏　藪中　一良
山口　正

1. 午後5時5分中西主記常務司會の下に國民儀禮を行ひたる後開會理事會長片岡安氏議長となり只今出席者33名にして定款第24條に依り評議員定數の2分の1以上の出席に付本會成立の旨を告げ豫て通知の如く選擧を執行する旨を宣す
   1. 定款第17條に依る理事3名選擧
   2. 定款第20條に依る會長1名副會長2名選擧
   3. 定款第17條に依る常務12名互選

議長右一括して選擧して差支なきやを諮り一同賛成依て其方法に付諮りたるに評議員松久保敬三氏より前例に做ひ投票選擧の代りに議長指名による詮衡委員を擧げて一任したしとの提議あり議長より其の賛否を問ひたるに（賛成々々の聲あり）異議者なく茲に詮衡委員制に依ることに決定議長より次の5氏を指名し承諾を得たり

詮衡委員（五十音順）
景山正明君　黑田　茂君
野中駒市君　三浦　茂君
矢田鐵藏君

議長　只今指名の方は直ちに別室に於て愼重に詮衡されたしと述べ此間評議員會は休憩する旨を宣す

1. 午後5時25分再會

議長　只今詮衡委員より詮衡の

結果を報告ありとて次の通り發表す

理事會長　片岡　安君
同　副會長　竹腰　健造君
同　同　松本　儀八君
常務　伊藤　和夫君
同　大下順三郎君
同　桐本　楠雅君
同　小林　清君
同　小林　三造君
同　佐藤正次郎君
同　中西　六郎君
同　西澤　藤生君
同　錦田　直一君
同　堀井　啓治君
同　松久保敬三君
同　藪中　一良君

議長以上通り夫々當選されし旨を告ぐ

1. 次で議長は本會議事錄の代表署名者に次の2氏を指名し其の承諾を得たり

岡野寛次君　楠瀬　徹君

1. 議長　以上にて選擧終了に付本日の評議員會は之を以て閉會する旨を宣し散會す時に午後5時30分

記念史編纂部會

（第9回）

時　12月10日
所　集會室
出席者　主査　伊藤
委員　錦田、尾龜、桐本、塚本、西村、廣瀬、

議　事

1. 蒐集原稿檢討の件
2. 年內方針打合の件

編輯幹事會

時　12月12日
所　集會室
出席者　幹事長　小林
常　務　大下、錦田
幹　事　尾龜、川勝、塚本、西村、宮崎、富田

議　事

1. 1月號揭載原稿蒐集狀況報告の件
2. 2月號編輯企畫の件

必携刊行部會

（第9回）

時　12月17日
所　集會室
出席者　主査　池田
幹事　星、河合、久良知

議　事

1. 執筆依頼先選定の件
2. 執筆依頼方針審議の件

會員動靜

入　會

會　員

安達　正武君　東區大手通1の26株式會社松村組內（株式會社松村組）
赤松　義夫君　豊中市新免936（株式會社小坂井組）
石川　興作君　東淀川區豊里菅原町107（土木建築請負業自營）
內山喜代松君　府下中河內郡八尾町大字八尾496（岩城工務店）
浦井　金作君　堺市賑町3の39（磯本建築設計計算事務所）
川本　義雄君　西淀川區佃町2の8株式會社大阪機械製作所內（大阪機械製作所）
國松　茂君　京都市中京區兩替町通二條上ル木村直二郎方（木村工務店）
佐藤　音松君　泉北郡高石町羽衣508（今西組）
武村盛之助君　京都市中京區御幸町二條下ル山本町43（自營）
鳥居　健次君　西成區南吉田町35（今西組）
堀　修二君　北區小松原町43小坂井組內（小坂井組）
增田　保君　西淀川區海老江上3の44（中島組）

地方會員

大倉　義憲君　朝鮮釜山府溫仙町476（釜山府廳營繕係）

特別賛助員

岩佐　明君　住吉區萬代東4の1（高島屋）
篠原　彥夫君　旭區古市中通3の1愛國科學工業大阪工場內（愛國科學工業株式會社）
杉崎嘉兵衛君　浪速區元町1の749（左官業組合）
鈴木　總作君　住吉區墨江中1の62（高島屋）
谷風　六藏君　東區横堀3の27（中尾敷物店）
利倉　清君　東區農人橋1の19（利倉商店）
山脇　節三君　住吉區萬代西4の25（高島屋）
和田村太郎君　府下南河內郡高鷲村惠我之莊238浪速建材株式會社
築柴宗治郎君　京都市中京區富小路通夷川下ル

普通賛助員

横山勝太郎君　新潟縣地魚沼郡小出町大字小出島593（建築講負業自營）
中井　嘉宣君　兵庫縣武庫郡鳴尾村西開6（宮本建築事務所）

退　會

會　員

淺野利　吉君、福島　晉君

特別賛助員

野村　綱一君

普通賛助員

川口　孝一君、小谷　利郎君

轉居・轉勤

會　員

石原　靖介君　神戸市灘區篠原北町2の35（勤務先）小林讓三建築事務所

坂口　恒雄君　南區難波新地6南海鐵道株式會社工務部營膳課

板野　敏男君　府下泉南郡田尻村字吉見東洋紡績社宅

山原　正美君　住吉區駒川町7の5

杉原　殿君　尼ヶ崎市抗瀬古樋13

會我部壽男君　住吉區田邊東之町3

瀧　龜治君　池田市中之島10（除除）

渡部　章君　朝鮮平壤府外寺洞番川除

黒川　作郎君　府下中河内郡八尾町山本住宅營團工事場

松本喜三郎君　住吉區田邊西之町5の4銀香治三郎方

上田　一雄君　港區八幡元町2の214の1

大谷愼次郎君　兵庫縣武庫郡鳴尾村内荻島36

小林　堅二君　神戸市須磨區東垂水町114

地方會員

片山　勝君　鹿兒島郡元町2653

稻葉　重朗君　大連市櫻町42（勤務先）關東洲金洲滿洲重機株式會社

柴垣　貴雄君　東京市大森區馬込町東2の1058（勤務先）同市日本橋區日本橋通1の1野村ビル内野京殖産貿易株式會社不動産部

小倉　虎雄君　馬山府都町1の8

南　欽三君　名古屋市東區西二葉町19第二常盤荘内（勤務先）三菱地所株式會社

竹中　稔雄君　岡山市福田252不動建築株式會社出張所

黒澤　研君　北京内六區北長衙10號華北線業振興會内

懸山　良雄君　鹿兒島市郡元町524

四日　健男君　弘前市陸軍病院7の2

福田　耕治君　奉天市鐵西區興工街三段17

池野　逸郎君　岩國航空隊吳海軍建築工事場内

吉田　正夫君　京城府漢南町山13公舍（ロ）3號

鳥井　捨蔵君　東京市小石川區大塚窪町1

山本　良介君　東京市澁谷區穩田1の1青山アパート99山本逸太郎方

特別賛助員

平山　文澈君　東淀川區中津濱通1の114

久野銀太郎君　西宮市下瓦林辨天352

普通賛助員

高橋　幸藏君　鐵道省大阪地方施設部建築調査係（勤務先）

田中　茂夫君　秋歌山市湊外濱四本組河西出張所

川谷　勇君　岡山縣玉野市和田住宅營團監督員詰所

今津　三郎君　西宮市本町44

改姓名

會　員

小林　堅二君　（舊名讓三）神戸市須磨區東垂水町114

地方會員

河野　繁生君　（舊姓名曾繁樹）奉天市鐵西區嘉工街一段26内外木材工藝株式會社奉天支店

死亡

特別賛助員

荒木　大作君　昭和17年11月17日逝去

（謹んで哀悼の意を表す）

建築と社會
第26輯　第1號

每月1回1日發行　定價㊊　1册 50錢（郵稅2錢）
12册 6圓（〃 24錢）
昭和17年12月25日印刷　昭和18年1月1日發行

發行・編輯　戸川　弘
印刷人　大阪市北區朝日ビル日本建築協會内
印刷所　新日本印刷有限會社
大阪市北區南錦町46番地
發行所　社團法人　日本建築協會
大阪市北區中之島3ノ3朝日ビル
電話長北濱(23)4501番(9)
振替口座大阪39975番
日本出版文化協會會員番號222043
配給元　日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二丁目九番地

禁　轉　載

本號に揭載せるものは一切これを無斷にて轉載し又は單行本に上梓その他の複製行爲をなすことを禁ず。

●第二六集 第一号 掲載広告一覧（掲載順）

佐藤商事工業所
美素工業所
アサヒ商会
盛工務店
竹原文泉社
日本竹筋工業所
米本栄商店
ライトラバー商会
日本陶織
織本建築設計計算事務所
矢橋大理石商店
南満建材工業所
建築金物商会
平松釣戸車製造所
協和製作所
大阪窯業セメント
萩工業
大西商店
大阪伊丹商店
前田白蟻研究所
東洋リノリューム
東亜化工

小西勝太郎商店
椎名営業所